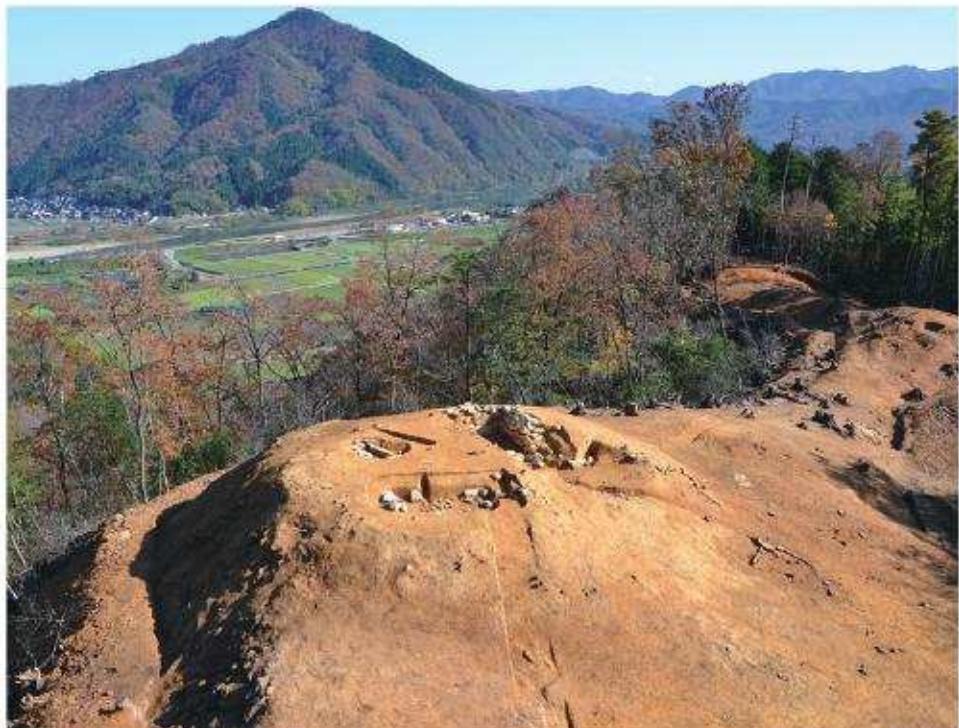


養父市

広瀬古墳群

— 一般国道 483 号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —



平成 31 (2019) 年 3 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

養父市

ひ ろ せ こ ふ ん ぐ ん
広瀬古墳群

一般国道483号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 31 (2019) 年 3 月

兵庫県教育委員会



円山川下流側から広瀬古墳群を望む(北から)



平野部側からの遠景(北東から)



広瀬古墳群より円山川下流方向を望む(南西から)



1区全景(南西から)



1～4号墳全景(西から)



1号墳全景(南西から)



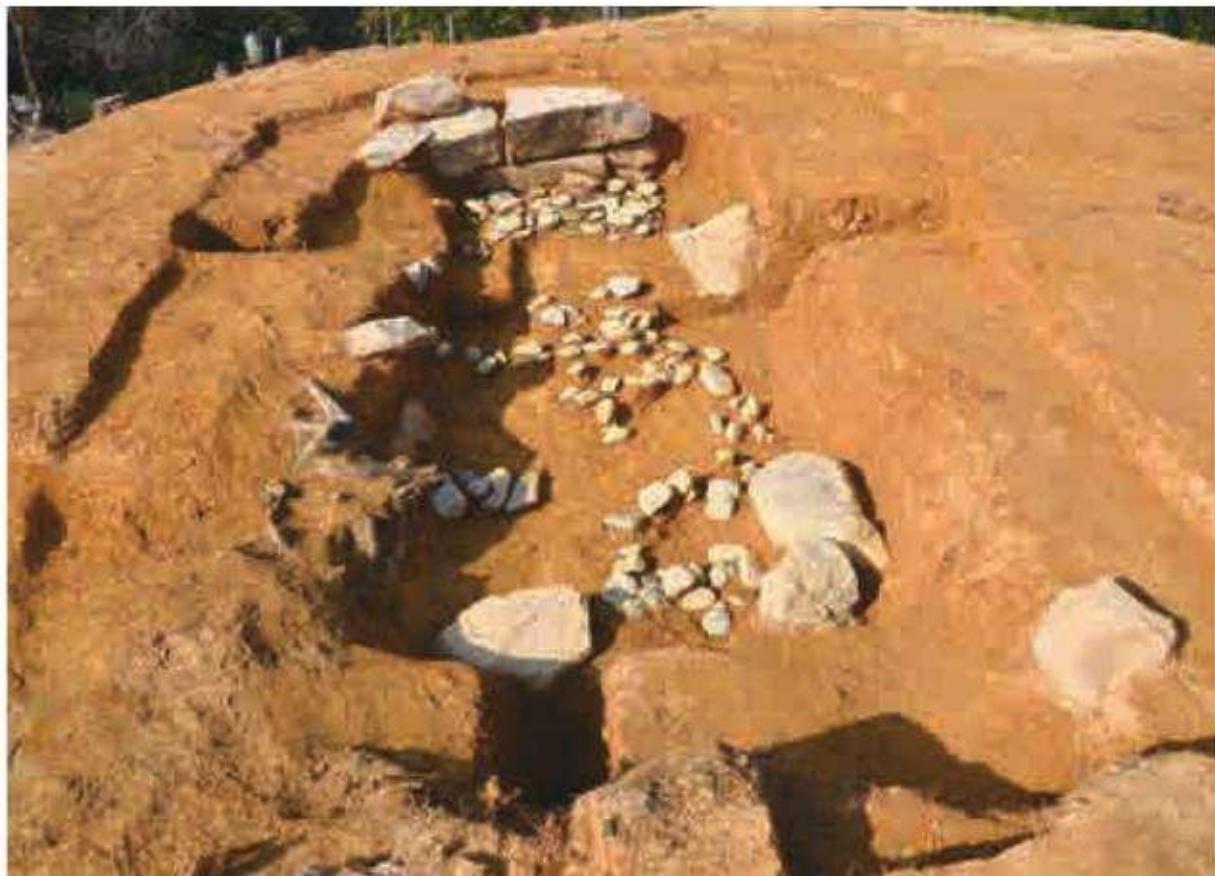
石室 1(南西から)



石室2(北東から)



石室2遺物出土状況(南東から)



1号墳石室3(南東から)



5号墳箱式石棺(西から)



管玉



ガラス小玉



管玉



ガラス小玉



土玉

例　言

- 1 本書は、養父市八鹿町宿南字広瀬・榎谷・ソチ・夜氣山に所在する広瀬古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、一般国道483号線北近畿豊岡自動車道路八鹿豊岡南道路に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会が調査主体となり、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
- 3 調査の推移
(発掘作業)
確認調査 平成26年8月6日～9月4日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
工事請負：株式会社徳網建設
本発掘調査 平成26年9月3日～平成27年1月16日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
工事請負：株式会社小柴組
(出土品整理作業)
平成29年4月1日～平成30年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
平成30年4月1日～平成31年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部企画調整課 中川涉・渡瀬健太が担当した。文責は目次に記している。
- 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会(兵庫県立考古博物館)で保管している。
- 6 調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。
榎本誠一(大手前大学名誉教授)、養父市教育委員会、谷本進・山根実生子・松岡淳平(以上、同市教委)、豊岡市教育委員会、小寺誠・仲田周平(以上、同市教委)

凡　例

1 座標・水準高

図版に示す方位・座標は世界測地系に則っており、調査地は第V系に属する。標高は東京湾平均海
水準(T.P.)を基準とした海拔高度である。

2 使用地図

第1図に使用した地図：国土地理院1/25,000地形図「江原」「八鹿」平成30年5月25日調製

3 使用写真

本書に使用した航空写真・写真測量図は、株式会社かんこうと委託契約を交わして作成したもので
ある。なお、調査成果の測量は、電子基準点兵庫日高・久美浜・和田山の3点を基に、調査地に3級
基準点を設置して行なった。

遺物写真は、株式会社地域文化財研究所と委託契約を交わして、兵庫県立考古博物館において撮影
した。

4 遺物

掲載した遺物の種類には土器・金属器・玉類があり、報告No.は土器が1～、金属器がM1～、玉類
がJ1～の通し番号とする。

目 次

第1章 調査の経過	(中川)
第1節 分布調査	1
第2節 確認調査	1
第3節 本発掘調査	2
第4節 出土品整理・報告書作成作業	2
第2章 遺跡の環境	(渡瀬)
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の結果	
第1節 概要	(中川) 7
第2節 広瀬1号墳	(中川・渡瀬) 7
第3節 広瀬2号墳	(渡瀬) 17
第4節 広瀬3号墳	(渡瀬) 17
第5節 広瀬4号墳	(渡瀬) 18
第6節 広瀬5号墳	(中川) 19
第7節 その他の遺構と遺物	(中川) 20
第4章 まとめ	(中川)
第1節 出出土器について	23
第2節 1号墳の石室について	25

挿図・表・写真目次

第1図 周辺の遺跡(1:35,000)	5
第2図 宿南地区と広瀬古墳群(1:5,000)	8
第3図 1号墳の鉄器	15
第4図 その他の遺物	20
第5図 兵庫県下の装飾付須恵器類例(縮尺: 1/6)	24
第6図 1号墳墳丘・石室断面合成図	25
第7図 d型「石棺系小竪穴式石室」の類例(縮尺: 1/60)	27
第8図 暗渠状石組・墳丘断面合成図	28
表1 遺跡地名表	5
表2 土器計測表	21
表3 金属器計測表	21
表4 玉類計測表	21
写真1 石室1と進美寺山(南西から)	29
写真2 南ホウキ3号墳(北東から バノラマ)	29

写真3 同 東面の横穴式石室(東から)	29
写真4 同 北面の石室(北から)	29

図版目次

図版1 広瀬古墳群調査位置図(1:2,000)	図版14 1号墳石室2断面図・掘り方と小口石・
図版2 1~5号墳調査前地形図	礫床
図版3 1~5号墳調査後地形図	図版15 1号墳石室2遺物出土状況
図版4 1号墳全体図	図版16 1号墳石室3平面図・断面図
図版5 1号墳墳丘断面図(1)	図版17 1号墳石室3平面図・立面図・遺物出土
図版6 1号墳墳丘断面図(2)	状況
図版7 1号墳石室1平面図・断面図	図版18 2号墳全体図・断面図
図版8 1号墳石室1俯瞰図・掘り方と基底石	図版19 3号墳全体図・遺構図
図版9 1号墳石室1平面図・立面図	図版20 4号墳全体図・遺構図
図版10 1号墳石室1遺物出土状況	図版21 5号墳全体図・断面図
図版11 1号墳墳丘上の遺構	図版22 5号墳箱式石棺
図版12 1号墳暗渠状石組	図版23 出土土器
図版13 1号墳石室2平面図・立面図	図版24 出土玉類

巻頭図版目次

巻頭図版1 航空写真・遠景 円山川下流側から広瀬古墳群を望む(北から) 平野部側からの遠景(北東から)	巻頭図版5 1号墳 石室2(北東から) 石室2遺物出土状況(南東から)
巻頭図版2 航空写真 広瀬古墳群より円山川下流方向を望む(南西 から) 1区全景(南西から)	巻頭図版6 1・5号墳 1号墳石室3(南東から) 5号墳箱式石棺(西から)
巻頭図版3 1区 1~4号墳全景(西から) 1号墳全景(南西から)	巻頭図版7 1号墳石室2の出土玉類 管玉 ガラス小玉
巻頭図版4 1号墳 石室1(南西から)	巻頭図版8 1号墳石室3の出土玉類 管玉 ガラス小玉 土玉

写真図版目次

- 写真図版 1 航空写真
広瀬古墳群全景(真上から)
- 写真図版 2 航空写真
調査前状況遠景(北西から)
調査前状況遠景(西から)
調査前状況遠景(南から)
- 写真図版 3 航空写真
調査後状況遠景(北西から)
調査後状況遠景(南西から)
1区調査後状況近景(北から)
- 写真図版 4 1号墳(1)
調査前状況 確認調査Tr 4(西から)
調査前状況 確認調査Tr 5(東から)
石室1 調査前状況(北から)
- 写真図版 5 1号墳(2)
表土掘削後全景(南から)
石室石材散乱状況(南から)
石室掘り下げ前全景(南から)
- 写真図版 6 1号墳(3)
全景(南から)
石室1 全景(南西から)
石室2・3 全景(南から)
- 写真図版 7 1号墳(4)
東側周溝検出状況(西から)
西側周溝検出状況(東から)
西側周溝土層断面(南から)
- 写真図版 8 1号墳(5)
石室1 表土掘削後全景(南から)
石室1 表土掘削後近景(西から)
石室1 検出状況(南西から)
- 写真図版 9 1号墳(6)
石室1 検出状況(西から)
石室1 検出状況(南から)
石室1 石室内埋土東西土層断面(南西から)
- 写真図版10 1号墳(7)
石室1 南西半部長軸方向土層断面(南から)
- 石室1 南西半部長軸方向土層断面 2回目掘削後(南東から)
石室1 北東半部長軸方向土層断面(南から)
- 写真図版11 1号墳(8)
石室1 石材崩落状況(南西から)
石室1 西側壁石材崩落状況(東から)
石室1 西側壁石材崩落状況(南西から)
- 写真図版12 1号墳(9)
石室1 完掘状況(南西から)
石室1 完掘状況(南西から)
石室1 奥壁～東側壁(西から)
- 写真図版13 1号墳(10)
石室1 東側壁(北西から)
石室1 西側壁(南東から)
石室1 奥壁(南西から)
- 写真図版14 1号墳(11)
石室1 須恵器出土状況(南西から)
石室1 須恵器出土状況(西から)
石室1 溝状遺構装飾付須恵器出土状況(西から)
- 写真図版15 1号墳(12)
石室1 溝状遺構検出状況(南西から)
石室1 溝状遺構検出状況(南から)
石室1 溝状遺構埋土土層断面(南から)
- 写真図版16 1号墳(13)
石室1 墳丘内暗渠状石組(南西から)
石室1 墳丘内暗渠状石組(北西から)
石室1 墳丘内暗渠状石組蓋石除去状況(南西から)
- 写真図版17 1号墳(14)
石室2 検出状況(南東から)
石室2 検出状況(南西から)
石室2 全景(南東から)
- 写真図版18 1号墳(15)
石室2 磯床(北東から)
石室2 南小口(北東から)

写真図版19 1号墳(16)	写真図版29 4号墳(1)
石室2北小口(南西から)	調査前状況 確認調査Tr7周辺(東から)
石室2須恵器出土状況(北東から)	全景(東から)
写真図版20 1号墳(17)	木棺墓土層断面(南から)
石室2刀子・管玉出土状況(南東から)	写真図版30 4号墳(2)
石室2礫床長軸方向断割り断面(南東から)	木棺墓完掘状況(北から)
石室2埋土完掘状況(南東から)	S K01土層断面(北から)
写真図版21 1号墳(18)	S K01完掘状況(北から)
石室2完掘状況(南西から)	写真図版31 5号墳(1)
石室2基底石検出状況(南西から)	石棺調査前状況 確認調査Tr15(東から)
写真図版22 1号墳(19)	全景(南東から)
石室3検出前状況(南から)	石棺検出状況(南東から)
石室3長軸土層断面(南から)	写真図版32 5号墳(2)
石室3長軸土層断面(南西から)	石棺蓋石除去状況(北西から)
写真図版23 1号墳(20)	石棺内埋土土層断面(南西から)
石室3短軸土層断面(北西から)	石棺完掘状況全景(南東から)
石室3全景(北東から)	写真図版33 5号墳(3)
石室3北小口石材・礫床残存状況(南東から)	石棺完掘状況(北西から)
写真図版24 1号墳(21)	石棺完掘状況(北東から)
石室3全景(南東から)	石棺掘り方埋土土層断面(南東から)
石室3管玉出土状況(南東から)	写真図版34 状況写真
写真図版25 1号墳(22)	表土掘削状況(北から)
墳丘北半部土層断面(南東から)	1号墳石室1石材検出状況(北東から)
墳丘西半部土層断面(南から)	1号墳石室2清掃状況(南から)
墳丘東半部土層断面(南から)	1号墳石室1実測状況(北から)
写真図版26 2号墳	1号墳作業状況(南から)
調査前状況 確認調査Tr7(西から)	学識経験者現地指導状況
墳丘土層断面(西から)	地元小学生見学状況
周溝土層断面(南から)	調査成果説明会実施状況
写真図版27 3号墳(1)	写真図版35 土器(1)
調査前状況 確認調査Tr7(西から)	写真図版36 土器(2)
全景(東から)	写真図版37 土器(3)・金属器
木棺墓1・2検出状況(西から)	
写真図版28 3号墳(2)	
木棺墓1土層断面(北から)	
木棺墓2土層断面(南から)	
木棺墓1・2完掘状況(東から)	

第1章 調査の経過

第1節 分布調査

舞鶴若狭自動車道春日JCTから分岐して但馬方面へ伸びる一般国道483号北近畿豊岡自動車道は、丹波市から豊岡市に至る延長約70kmの高規格幹線道路である。丹波地域と但馬地域が自動車専用道路で結ばれることによって、京阪神都市圏と兵庫県北部の道路交通の利便性が向上し、広域ネットワークの強化が期待されている。平成18年7月に春日和田山道路が和田山JCTで播但連絡道路と連絡した後、平成24年11月には和田山八鹿道路が八鹿水ノ山IC、平成29年3月には八鹿日高道路が日高神鍋高原ICまで順次供用を開始しており、さらに豊岡方面に向けて延伸工事中である。

そのうち八鹿水ノ山IC～豊岡南IC区間については、平成21年度に兵庫県教育委員会が埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、40箇所において埋蔵文化財の存在を認め、工事の実施にあたり事前協議が必要である旨の回答を行った(平成22年4月8日付け兵考第1032号)。そのうちNo.10地点には周知の遺跡である「広瀬1号墳(兵庫県遺跡番号680650)」および「広瀬2号墳(同680651)」が存在する。

遺跡調査番号 2009307

調査期間 平成22年3月16～18日

調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

調査第1班 吉田昇・渡辺昇・西口圭介・長濱誠司・上田健太郎

第2節 確認調査

兵庫県教育委員会は、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所長の依頼(平成26年4月1日付け国近整豊二調第47号)を受け、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター(以下、「まちづくり技術センター」と呼称する)に委託し、平成26年度に同地で確認調査を行った。

調査は広瀬1・2号墳が存在する尾根に9本のトレント(Tr 1～7・16・17)、途中で分岐して南へ延びる尾根に8本のトレント(Tr 8～15)を設定して行った。

その結果、Tr 4・5では広瀬1号墳の周溝を検出し、須恵器片も出土した。また墳丘西側のTr 4では約80cm幅の落ち込みと川原石の散乱が認められたため、墳丘東側に石材が露出している石室とは別に、礫床を伴う埋葬施設の存在が予想された。

Tr 7ではトレントの東端で広瀬2号墳の墳丘と周溝を検出したが、調査区内には埋葬施設は認められなかった。トレントの中央では埋葬施設の可能性がある土坑2基、西端では浅い周溝状の落ち込みを検出し、周知以外の古墳の存在が予想された。

南へ向かう尾根においては、Tr 10・14で2箇所ずつの落ち込みを検出し、埋葬施設や周溝の可能性が考えられた。さらにTr 15では箱式石棺と須恵器片を検出し、古墳の存在を確認した。

調査の結果、広瀬1・2号墳以外に未周知であった古墳の存在を複数確認し、遺構が認められたTr 4～10を中心とする範囲(北区)と、Tr 14・15を中心とする範囲(南区)の2つに分かれた地区を本発掘調査の対象とすることとなった(平成26年9月4日付け教文第3157号)。

遺跡調査番号 2014066

調査期間 平成26年8月6日～9月4日

調査担当者 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

調査第1課 岸本一宏・大本朋弥

第3節 本発掘調査

確認調査の結果を受けて兵庫県教育委員会は、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所長の依頼(平成26年4月1日付け国近整豊二調第47号)に基づき、同古墳群の本発掘調査をまちづくり技術センターに委託し、下記の日程・体制で実施した。

調査は広瀬1・2号墳が存在する尾根を中心とした「北区」と、確認調査で箱式石棺を検出した「南区」の2地区に分けて実施した。北区では、1・2号墳の他に、確認調査のTr7で検出していた土坑・落ち込みなどから3・4号墳の存在を認めた。南区では、箱式石棺を伴う古墳を5号墳とした。ただし確認調査のTr10・14で検出していた落ち込みについては、人為的な造構とは認定できなかった。

調査中には、1号墳で検出した3基の石室について、大手前大学の樋本誠一名誉教授に現地で指導をいただいた。また1月10日には、宿南ふれあい倶楽部において調査成果説明会を開催し、地元の方々を中心に50名の参加者があった。

調査の結果は、発掘調査実績報告書を添えて、平成27年7月6日付け教文第1535号で通知した。

遺跡調査番号 2014074

調査期間 平成26年9月3日～平成27年1月16日

調査担当者 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

調査第2課 中川涉・渡瀬健太

第4節 出土品整理・報告書作成作業

同古墳群の出土品整理作業は、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所長の依頼(平成29年2月22日付け国近整豊二調第43号、平成30年1月29日付け国近整豊計第67号)を受け、作業をまちづくり技術センターに委託し、平成29・30年度の2箇年度に分けて、下記の工程・体制で実施した。

平成29年度

出土遺物のネーミング、接合・補強、実測・拓本、復元、写真撮影、金属器の保存処理を行った。

調査担当職員 中川涉 整理担当職員 深江英憲 大本朋弥

非常勤嘱託員 大前篤子 児玉昌子 今村直子 中井翠 菅生真理子 萩野麻衣 沼田眞奈美
小野潤子 池田悦子 八木和子

平成30年度

図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷を行った。

調査担当職員 中川涉 渡瀬健太 整理担当職員 菱田淳子

非常勤嘱託員 佐伯純子 平宮可奈子 柏木明子

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

広瀬古墳群の所在する養父市は兵庫県の北部、但馬地方のほぼ中央に位置している。東西約33km、南北約24km、面積422.91km²の広がりを持ち、人口は24,288人（平成27年10月1日現在）である。平成16年に旧養父郡八鹿町、養父町、大屋町、関宮町の4町が合併し、現在の養父市となった。北は豊岡市、南は朝来市に接する。市域の西側には県下最高峰である氷ノ山（1510m）や鉢伏山（1221m）が聳え、周囲を山に囲まれた地形となる。朝来市に端を発する円山川が市の東部を北流し、豊岡市を抜け、日本海に注ぐ。また、市内を横切るように八木川や大屋川等の支流が東流し、円山川に合流する。円山川沿いにはおおむね平坦な沖積地が広がり、各支流沿いには河岸段丘が形成される。現在の集落はこれらの沖積地や河岸段丘上に築かれる。気候は日本海側気候で寒暖の差が大きく、冬季は大陸からの季節風が吹き、積雪が多い。

広瀬古墳群は養父市と豊岡市を隔てる山地の支尾根上、標高110m前後の地点に位置する。北側への眺望は開けており、円山川およびその沖積地を一望することができ、麓からも古墳の位置を容易に認識することができる。その一方、南側は狭い谷地形となっており、見通しは悪く、谷間からは古墳は見えない。

第2節 歴史的環境

広瀬古墳群の所在する養父市北部から豊岡市南部を中心とした地域を対象に、旧石器時代から中世までの遺跡を概観する。

旧石器時代の資料はわずかしか見つかっていないが、ナイフ形石器が出土した旧関宮町域の杉ヶ沢遺跡、別宮家野遺跡、旧養父町域の石ヶ堂遺跡などが知られる。

縄文時代には氷ノ山山系や神鍋高原などの山岳地帯を中心に遺跡が分布する。旧養父町域の熊野遺跡では早期から中期の遺物が出土し、豊岡市南部の旧日高町域に所在する神鍋遺跡では、前期の竪穴式住居が検出されている。後期から晩期にはいると、河川の沖積地や山地の縁辺部にも生活の拠点が進出し、旧日高町の祢布ヶ森遺跡（11）では、河川沿いの低地に遺跡が形成される。

弥生時代の集落跡は、旧八鹿町の東家ノ上遺跡、赤尾遺跡、旧養父町の大野遺跡、広瀬遺跡などが知られている。東家ノ上遺跡や赤尾遺跡は尾根上に立地し、周囲に溝を巡らせた高地性集落の性格をもつていたことが推定されている。

古墳時代に入ると、尾根上に古墳群が築かれるようになり、遺跡数が急増する。広瀬古墳群の周囲にも多くの遺跡が形成されるようになる。広瀬古墳群が位置する夜氣山丘陵上には、夜氣山古墳（86）や立石古墳群（87）、狐谷古墳群（156）などの古墳が確認されている。広瀬古墳群から谷を一本挟んだ南向の丘陵の先端部に位置するびくに古墳（83）は、竪穴系横口式石室として有名である。びくに古墳は6世紀中葉頃の築造と考えられており、南但馬地域における横穴系埋葬施設導入期の古墳に位置づけられる。円山川を挟んだ向かいの山頂には広瀬1号墳と同様に1墳丘に複数の石室が築かれる南ホウキ3号墳（65）

が作られる。南ホウキ3号墳も丘陵の頂部に位置し、東方向に開口する横穴式石室と直角方向に小規模な竪穴式石室と思われる石室が構築される。

広瀬古墳群から約2.7km北の豊岡市日高町祢布・久斗には、北近畿豊岡自動車道建設に伴って兵庫県教育委員会による発掘調査が行われた南構遺跡(10)が立地する。南構遺跡では、溶岩を用いた横穴式石室をもつ古墳時代後期の円墳が段丘上の平地に十数基築かれ、その南方には古墳を築造した集団のものと考えられる集落が営まれる。

当初尾根上に築かれていた古墳は、古墳時代末期に至ると谷部に築かれるようになる。

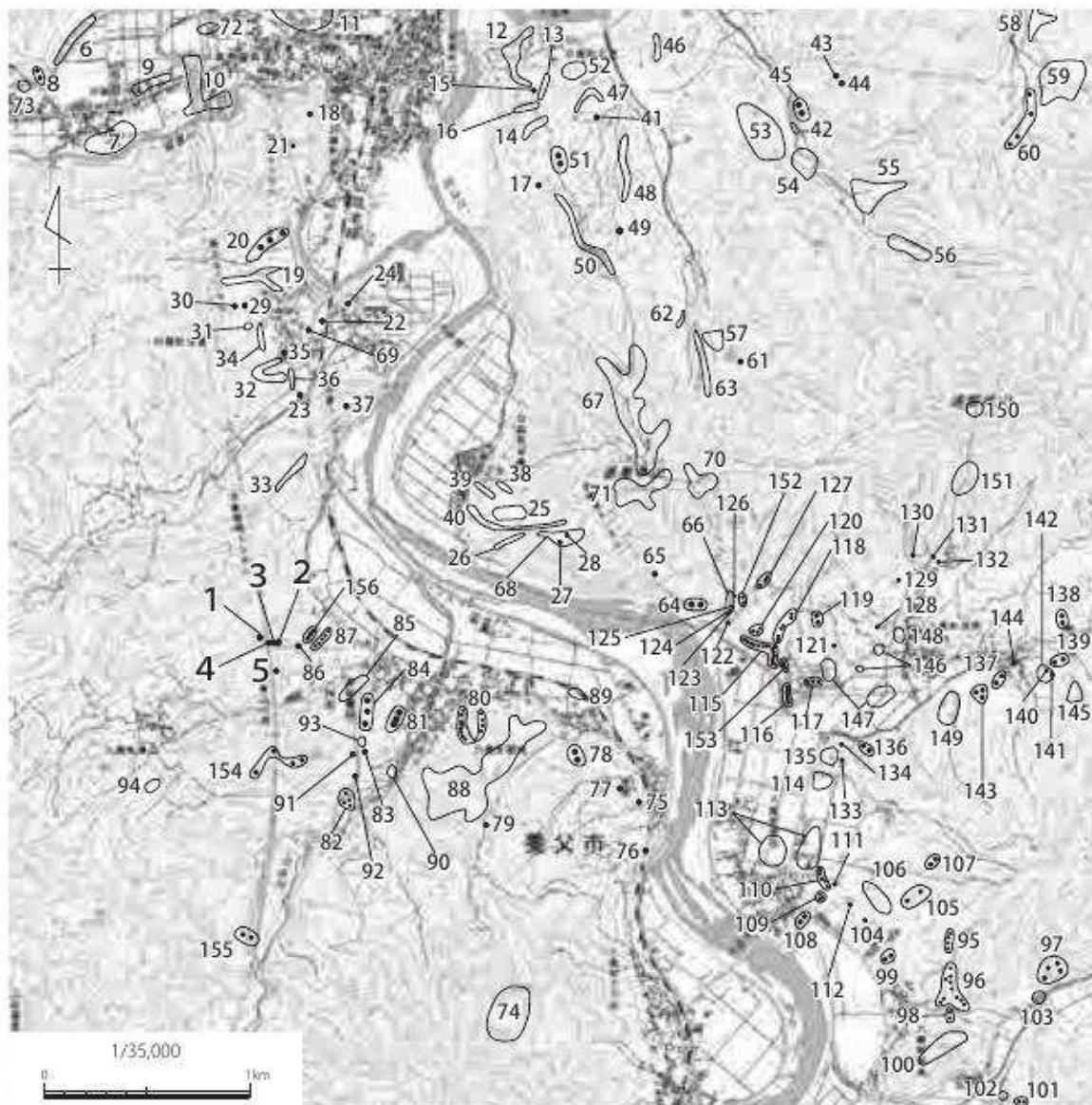
楯縫古墳(44)は径約29mの円墳で、巨石を用いた長大な横穴式石室をもつ。但馬地域で2番目に大きい石室を誇り、県史跡に指定される、6世紀末の但馬地域を代表する古墳である。楯縫古墳の更に奥に位置するスルギ古墳群(55・56)には、1つの墳丘に横穴式石室を並べて構築する双室墳とみられる古墳も認められる。

奈良時代に入ると、広瀬古墳群から1.7kmほど北の豊岡市日高町浅倉には奈良時代から平安時代にかけての集落跡と考えられている早越田遺跡(69)が形成される。また、そこからさらに2kmほど北上した日高町祢布には第二次但馬国府であったと考えられている祢布ヶ森遺跡や国史跡に指定された但馬国分寺跡などが築かれる。『日本後記』によれば、804(延暦23)年に但馬国府が当地に移転したとされており、祢布ヶ森遺跡からは多量の木簡などが出土している。祢布ヶ森遺跡の西方約0.5kmに位置する南構遺跡や定谷遺跡では、北近畿豊岡自動車道建設に伴い行われた発掘調査で、和同開珎や綠釉陶器、円面鏡などの国府と深い関係にある遺物が出土した。

中世に入ると山上に中小規模の山城が多く築かれる。広瀬古墳群が所在する宿南地区にも円山川に面した平地に町土居ノ内遺跡(89)、その背後の山上に宿南城跡(88)が築かれる。宿南城は浅倉氏を祖に持つ宿南氏が城主の城で、1580年(天正8年)の羽柴秀吉による第二次但馬攻略により、落城したと考えられている。円山川をはさんだ向かいの丘陵上には、同じく第二次但馬攻略の際に秀吉方に投降した佐々木氏の城である浅間城跡(145)や浅間小城跡(149)が築かれており、中世城郭が密に分布する地域であったといえる。宿南集落の奥には社寺跡である諏訪遺跡(91)や諏訪経塚(92)やびくに中世墓群(93)が築かれ、谷部や小高い丘陵が信仰や埋葬の場として利用されていたことが想定される。

参考文献

- 中島喜市編1971『八鹿町史』上巻 八鹿町役場
瀬戸谷皓2005『但馬の古代2—古墳の発展から消滅まで—』 但馬文化協会
養父市HP(<http://www.city.yabu.hyogo.jp>)



第1図 周辺の遺跡 (1 : 35,000)

表1 遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡の時代	遺跡の種類	番号	遺跡名	遺跡の時代	遺跡の種類
1	広瀬1号墳	古墳	古墳	23	カジガ谷散布地	縄文～弥生	散布地
2	広瀬2号墳	古墳	古墳	24	小山古墳	古墳	古墳
3	広瀬3号墳	古墳	古墳	25	左鍾1～4号墳 シゲリ谷1～8号墳	古墳	古墳
4	広瀬4号墳	古墳	古墳	26	赤崎ホ一キ1～7号墳	古墳	古墳
5	広瀬5号墳	古墳	古墳	27	赤崎ホ一キ8号墳	古墳	古墳
6	久斗遺跡	平安	集落跡	28	赤崎ホ一キ9号墳	古墳	古墳
7	上代散布地	古墳	散布地	29	浅倉29号墳	古墳	古墳
8	下ヶ谷1～2号墳	古墳	古墳	30	浅倉30号墳	古墳	古墳
9	川端散布地	縄文～平安	散布地	31	浅倉31～33号墳	古墳	古墳
10	南構遺跡	古墳～平安	集落跡・古墳	32	寺谷1～16号墳 浅倉南17～18号墳	古墳	古墳
11	祢布ヶ森遺跡	縄文～平安	集落跡・官衙跡	33	天満1～11号墳	古墳	古墳
12	姫路山1～15号墳	古墳	古墳	34	天満1～8号横穴	古墳	横穴墓
13	姫路山16～19号墳	古墳	古墳	35	天満9号横穴	古墳	横穴墓
14	姫路山20～25号墳	古墳	古墳	36	寺谷1～4号横穴	古墳	横穴墓
15	姫路山26号墳	古墳	古墳	37	岩山城址	中世	城跡
16	姫路山27～29号墳	古墳	古墳	38	マス谷1～3号墳	古墳	古墳
17	姫路山30号墳	古墳	古墳	39	左鍾5～8号墳	古墳	古墳
18	城山古墳	古墳	古墳	40	シゲリ谷9～32号墳	古墳	古墳
19	大谷1～28号墳	古墳	古墳	41	茅谷窯跡	奈良	生産遺跡
20	上森1～9号墳	古墳	古墳	42	蒲生谷遺跡	古墳	散布地
21	宵田城址	中世	城跡				
22	兵主神社横散布地	弥生	散布地				

番号	遺跡名	遺跡の時代	遺跡の種類
43	勘定山古墳	古墳	古墳
44	櫛縫古墳	古墳	古墳
45	森垣1～2号墳	古墳	古墳
46	峰1～4号墳	古墳	古墳
47	力ナ谷1～2号墳 法尺谷1～3号墳	古墳	古墳
48	棚田1～11号墳 棚田1-1～2号墳	古墳	古墳
49	棚田12号墳	古墳	古墳
50	棚田13～23号墳	古墳	古墳
51	棚田25～26号墳	古墳	古墳
52	谷1～6号墳	古墳	古墳
53	丸山1～2号墳 菖蒲谷1～15号墳	古墳	古墳
54	新林1～5号墳 腰細1～3号墳	古墳	古墳
55	スルギ1～13号墳	古墳	古墳
56	スルギ14～19号墳	古墳	古墳
57	中谷1・2・4・5号墳	古墳	古墳
58	山谷川1～9号墳	古墳	古墳
59	黒谷酒屋谷1～14号墳 豆ヶ谷1～3号墳 朝闇岳1～2号墳	古墳	古墳
60	朝闇岳3～6号墳	古墳	古墳
61	中谷3号墳	古墳	古墳
62	中谷6～9号墳	古墳	古墳
63	中谷10～17号墳	古墳	古墳
64	南ホウキ1～2号墳	古墳	古墳
65	南ホウキ3号墳	古墳	古墳
66	大谷ノ上1～3号墳	古墳	古墳
67	進美寺城址	中世	城跡
68	空山1～8号墳 シゲリ谷33～34号墳	古墳	古墳
69	早魅田遺跡	奈良～中世	集落跡
70	搔土城址	中世	城跡
71	白山城址	中世	城跡
72	井森木遺跡	古墳	集落跡
73	浪滝遺跡	弥生・ 奈良～平安	集落跡
74	池之内遺跡	奈良	社寺跡
75	寄宮1号墳	古墳	古墳
76	寄宮2号墳	古墳	古墳
77	寄宮3号墳	古墳	古墳
78	広ヶ谷1～2号墳	古墳	古墳
79	うなば古墳	古墳	古墳
80	高月1～11号墳	古墳	古墳
81	岸谷1～3号墳	古墳	古墳
82	見谷1～4号墳	古墳	古墳
83	びくに古墳	古墳	古墳
84	地蔵平1～3号墳	古墳	古墳
85	源氏山A1～4号墳 源氏山1～10号墳	古墳	古墳
86	夜氣山古墳	古墳	古墳
87	立石1～5号墳	古墳	古墳
88	宿南城跡	中世	城跡
89	町土居ノ内遺跡	中世	城跡
90	神尾散布地	平安	散布地
91	鐵訪遺跡	中世	社寺跡
92	鐵訪絆塚	中世	その他
93	びくに中世墓群	中世	墓
94	青山城跡	中世	城跡
95	勝負谷1～4号墳	古墳	古墳

番号	遺跡名	遺跡の時代	遺跡の種類
96	勝負谷5～9号墳	古墳	古墳
97	勝負谷10～13号墳	古墳	古墳
98	城山1～2号墳	古墳	古墳
99	倉谷1～2号墳	古墳	古墳
100	坂本城跡	中世	城跡
101	ハタガイ1～2号墳	古墳	古墳
102	寺垣遺跡	古墳	散布地
103	岩崎中田土器散布地	平安	散布地
104	淀古墳	古墳	古墳
105	割谷1～2号墳	古墳	古墳
106	割谷城跡	中世	城跡
107	篠谷1～2号墳	古墳	古墳
108	舟山1～2号墳	古墳	古墳
109	弘法山1～3号墳	古墳	古墳
110	巡礼1～5号墳	古墳	古墳
111	巡礼6号墳	古墳	古墳
112	巡礼7号墳	古墳	古墳
113	伊佐遺跡A地区	奈良	散布地
114	伊佐遺跡B地区	奈良	散布地
115	西山B1～11、15～20号墳	古墳	古墳
116	くぬぎばな4～11号墳	古墳	古墳
117	くぬぎばな12～14号墳	古墳	古墳
118	西山B21～26号墳	古墳	古墳
119	西山B27～28号墳	古墳	古墳
120	西山B12～14号墳	古墳	古墳
121	西山B29号墳	古墳	古墳
122	西山C1号墳	古墳	古墳
123	西山C2号墳	古墳	古墳
124	西山C3号墳	古墳	古墳
125	西山C4号墳	古墳	古墳
126	西山C5号墳	古墳	古墳
127	西山A1～4号墳	古墳	古墳
128	大谷1号墳	古墳	古墳
129	大谷2号墳	古墳	古墳
130	大谷3号墳	古墳	古墳
131	大谷4号墳	古墳	古墳
132	大谷5号墳	古墳	古墳
133	丸山1号墳	古墳	古墳
134	丸山2号墳	古墳	古墳
135	丸山城跡	中世	城跡
136	田口1～2号墳	古墳	古墳
137	一位谷1～2号墳	古墳	古墳
138	八坂1～2号墳	古墳	古墳
139	城坂1～2号墳	古墳	古墳
140	城坂3号墳	古墳	古墳
141	城坂4号墳	古墳	古墳
142	浅間城館跡	中世	城跡
143	アシ谷1～3号墳	古墳	古墳
144	シンドウ塚古墳	古墳	古墳
145	浅間城跡	中世	城跡
146	西屋敷土器散布地	平安	散布地
147	浅間土器散布地	平安	散布地
148	神宮田井遺跡	平安	集落跡
149	浅間小城跡	中世	城跡
150	須留岐山城跡	中世	城跡
151	浅間寺城跡	中世	城跡
152	西山C6～7号墳	古墳	古墳
153	くぬぎばな1～3号墳	古墳	古墳
154	湯坪1～4号墳	古墳	古墳
155	山ノ神1～2号墳	古墳	古墳
156	狐谷1～3号墳	古墳	古墳

第3章 調査の結果

第1節 概要

広瀬古墳群は、養父市八鹿町宿南地区の門前集落から見て西側にあたる夜氣山の尾根上に位置し、従来は1・2号墳の2基が知られていたが、今回の調査で新たに3～5号墳の存在も判明した。調査は、1～4号墳を含む「北区」と、5号墳を含む「南区」の2地区に分けて実施した。

北区では、1～4号墳が標高110～117mの稜線上で東西に並んでおり、さらに東側の事業用地外には夜氣山古墳も存在する。この稜線からは北東向きに円山川の下流方面をはるかに見下ろすことができ、川の対岸には進美寺山がそびえる。古墳群中で最も高い場所に立地するのが1号墳で、墳丘の頂部は約117mの標高があり、平野部から約100mの比高差をもつ。2号墳はそこから稜線伝いに約80m東に位置しており、墳丘の西側約1／3ほどが事業用地内に含まれている。1号墳と2号墳の間の稜線上に、東から3号墳・4号墳が位置する。3号墳は2号墳から約20m西の尾根筋において木棺痕跡を2基検出したものであるが、明らかな墳丘や溝状区画は認められなかった。4号墳は1号墳から約50m東に位置しており、南方向へ向かう支尾根との結節点にあたる。木棺の痕跡などを検出した。

4号墳から南へ延びる支尾根は、まず南南西方向に約100m延びたところで標高約112mの頂部となり、そこから南東に向きを変えて、県指定史跡の青谿書院がある青山川の谷に向かって下る急傾斜の痩せ尾根となっている。南区はこの尾根線上に設定しており、頂部から南東へ約60m、標高94m付近のわずかな平坦面に5号墳は位置する。

第2節 広瀬1号墳

1 立地

夜氣山から西北西にのびる尾根筋で一段高くなった頂部に位置する。調査前の墳丘最高点の標高は117.79mである。

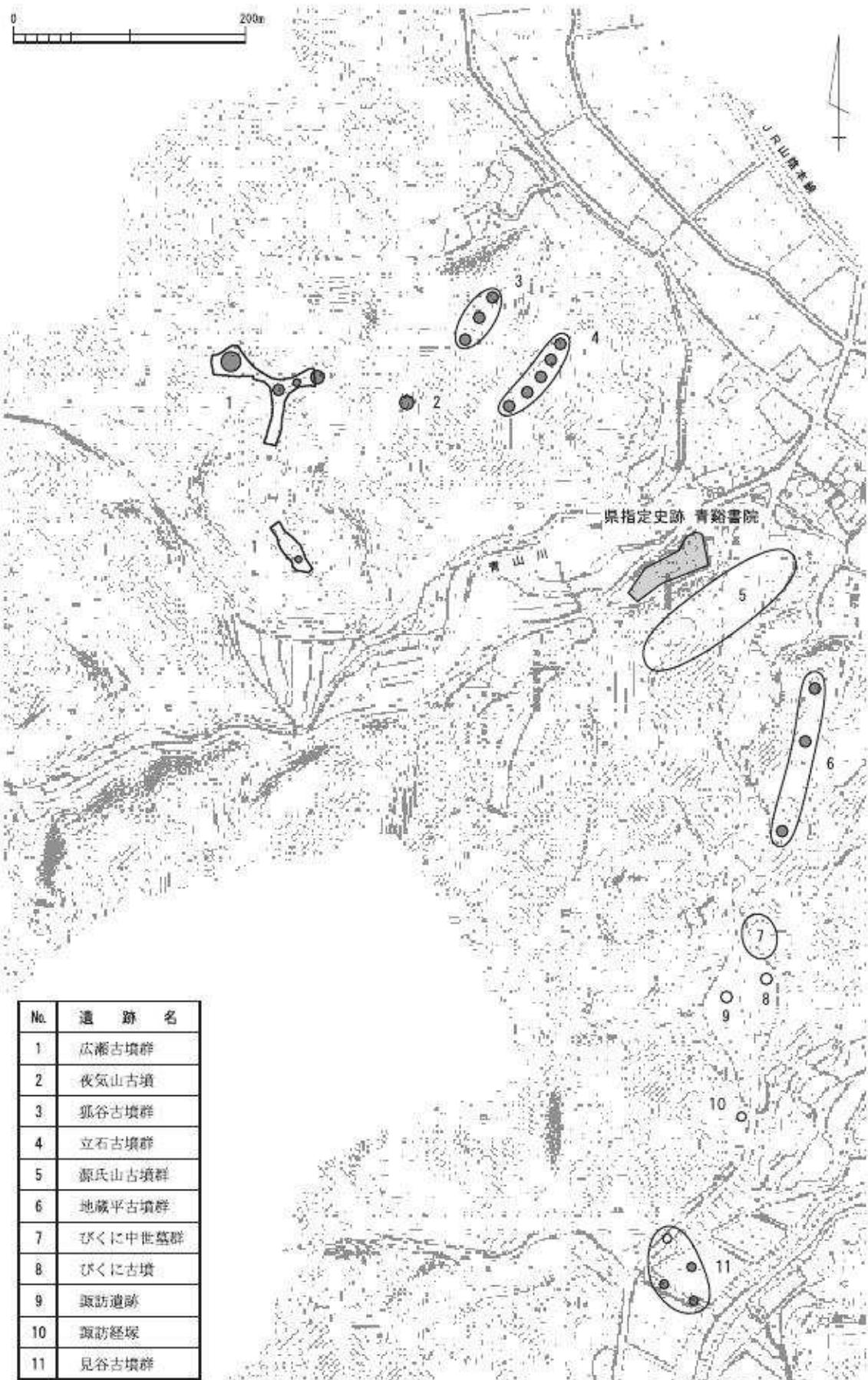
2 調査前の状況(図版2、写真図版4)

墳丘の南半部が崩れており、特に南東部は大きくえぐられ石材が露出していて、石室の存在を示していた。また南西部にも窪地があり、確認調査のTr 4で石材を検出したことから、石室の存在が示唆された。墳丘の北西から北東にかけては急斜面となっていて盛土が一部流出しているようにも見受けられ、そのために頂部の形状が橢円形となっている可能性がある。

墳裾は尾根筋に沿った東西と南側には平坦面があるが、明確なラインは認められない。

3 墳丘(図版3～7・11・12、写真図版5～7・16・25)

1号墳の墳丘からは3つの石室(石室1～3)が見つかった。特徴的なこととして、それらの配置は石室1が墳頂部の東側、石室2が北側、石室3が西側に寄っており、いずれも墳丘の中央に位置していない。しかも各石室の主軸方向はおよそ、石室1がN50° E、石室2がN40° E、石室3がN25° Wで、



第2図 宿南地区と広瀬古墳群 (1 : 5,000)

軸線も共有しない。さらに後述するように、石室の特徴もすべて異なっている。石室の構築順序は墳丘断面観察から石室2が最初であることは明らかで、次いで石室3→石室1の順が妥当と考えられる。以上を前提として、墳丘の内容を説明する。

円墳で、墳丘の平面形はやや東西に長い楕円形を呈し、尾根筋に続く西面・東面と緩斜面となる南面では墳丘裾のラインは比較的明瞭であるが、北西面と北東面では崖面となる。規模は東西方向が17.5m、南北方向が15.2m、墳頂部の広さは東西方向が10.5m、南北方向が7.5m、高さは頂部から西墳裾までが約2.6m、東墳裾までが約3.3mである。墳裾の南西側には幅3.5m、深さ15cm程度の浅い周溝があり、南東側にも周溝状の落ち込みが認められたが、尾根線を切るところまでは掘り込まれず、南側前面にも溝は続かない。

墳丘構造については図版5・6の墳丘断面図をもとに説明する。立地が尾根筋の頂部にあたることから、墳丘下部では地表面のカットをほとんど行っておらず、旧表土層(35層)の上に直接盛土している。盛土の厚みは最大で1.15mあり、使われている土は風化岩盤(クサレレキ)を多く含むいわゆる山土で、周辺から削り出されたものと考えられる。西から東へ向かって緩く下る旧地形に対し、東側に10~20cmほど土を盛って(32・33層)東西方向は水平を図っている。その面から石室2の掘り方を掘削し、石室を構築後、蓋石を覆いながら26~29層を盛って、約60cmの厚みの一次墳丘を形成している。

石室3の掘り方は墳丘の断面ラインからわずかに外れていて層位を直接確認できないが、レベルで比較すると、一次墳丘盛土の上から掘り込んでいると考えられ、層位的には石室2より後出となる。

石室1は土壤化した盛土の11層直下で石材が顔を出すが、西側掘り方の検出面は一次墳丘盛土の28層上面で、側壁を構築しながら新たに二次墳丘(12・13層)を盛り上げていることが分かる。同様な状況は図版7に示した石室の断面図でも確認でき、北側および東側の掘り方は14・15層の盛土を切って、石室を構築しながら二次墳丘(6~9層)を重ねている。ただし石室1東側の盛土(図版7の14・15層)が、西側の一次墳丘(図版5・6の28・29層)と同時施工の一次墳丘かどうかは明らかでない。石室1の東側には暗渠状の石組みが墳丘の中に埋め込まれていることもあり、通常とは異なる複雑な工程も予想されるが、それを詳らかにするだけのデータは得られなかった。

4 石室1(図版7~12、写真図版8~16)

層位

墳丘東側に位置する。墳丘盛土の流出によって、地表面に石材が露出していた。石室は大きく損壊を受けており、墳丘南東側には石室を構成していたと考えられる石材が散乱する。天井石も大部分は抜き取られており、墳丘上には1石のみが残る。石室全体は東向きに傾倒しており、西側壁石材が石室内部に土砂とともに流入している。

石室1は、石室2の蓋石を被覆する墳丘盛土(28層)を掘り込んで作られており、石室2よりも後に構築されたことが分かる。一次墳丘掘削後、石材を積みながら風化岩盤を多く含む土で埋め戻す。なお、掘り方を埋め戻す際には壁面の補強のため、背後に20~30cm大の裏込め石材を入れる。壁面構築後天井石を架構し、更に盛土を施す。

石室構造

残存長4.6mの無袖の横穴式石室である。石室は主軸方向をN50°Eにとり、南西側に開口する。袖がなく明確な玄門を形成しないため、玄室と羨道の境がはっきりとしないが、西側壁をみると奥壁から3.7m

の箇所で石の積み方が変化するため、これより南側が羨道部であった可能性がある。一方で、礫床は奥壁から3.1mの地点で途切れ、後述する暗渠状石組もほぼ同じ地点から構築されており、この地点が玄室と羨道の境であった可能性も考えられる。閉塞石は残っていないことから、閉塞位置については不明である。

石室規模は玄室長3.1mもしくは3.7m、玄室幅1.0~1.1m、羨道長0.9m以上を測る。石室の高さは全体が東に傾いているが、石材を本来の位置に直したとすると玄室高は1.2m程度であったと推測できる。天井石は1石のみ残り、大きさは長さ162cm、幅84cm、厚み32cmを測るが、石室が東側に向かって傾倒したことにより原位置からはずれて、西側壁から完全に遊離しており、崩落の危険が非常に高いことから、石室内部の調査に入る前に記録を取り、撤去した。壁は側壁が6段、奥壁が5段の石積みで構築される。

東側壁は奥壁から2.3m付近まで石材が残る。5段目以上が大きく東に傾いており、本来の位置を留めていない。基底石には長さ40~72cm、厚さ15~25cm大の横長の石材を使用し、2~4段目には厚さ20~25cm大の石を積む。5~6段目には厚さ10cm大の扁平な石を使用し、高さを調整しているようである。西側壁は奥壁から4.6m付近まで石材が残るが、最大でも3段目までしか遺存しておらず、多くの石材が石室内に転落した状態で検出された。東側壁と同様に基底石には横長の石材を用いるが、奥壁から3.7m以南は長さ・厚みともに25~35cm大の角礫を基底石として使用しており、石材の使い分けが認められる。奥壁は一段目に高さ60cmの板石を立て、その上に厚さ20cm大の石を2段積み、更にその上に厚さ10cm大の扁平な板石を重ね、高さを調整する。

羨道部は天井石が残っておらず、元々架構されていたか、前庭部として開放状態であったかは不明である。羨道部の床面には、奥壁から3.7m付近を起点に断面U字形の溝状遺構が延びる。溝状遺構は幅0.4~0.7mで、石室主軸に沿って1mほど南西に向かって延びた後、石室を出て傾斜がつくあたりで南へ屈曲し、さらに約2.7m延びて墳丘斜面に開放する。溝状遺構は石室内から延び、比較的底部幅が狭いことから排水溝と考えたが、排水溝が途中で折れ曲がる例は稀で、麓から古墳に登る道側に向かって屈曲することから、墓道であった可能性も残る。

暗渠状石組

奥壁から約3.1m地点の東側壁の裏側には暗渠状の石組みが築かれる。暗渠状石組は残存長約4.3mで、北西から南東方向に向かって直線的にのび、方位はN20°Wを取る。旧表土および基盤層を約0.7mの幅でU字状に掘り込み、40~60cm大の角礫を2列に並べ、その上に同様の石材で蓋をし、幅10~15cm、高さ20~30cmの空間を確保する。石組みを構築した後には、上から盛土を施し、完全に埋め戻すことで暗渠としている。両端の高低差は約65cmで、約15%の傾きをもつ。

床面の状況

玄室の床面は掘り方の底面に土を敷き、その上に15~40cmの扁平な角礫を据え、礫床としている。礫床は奥壁から約3.1mで途切れしており、羨道部には石敷きを施していない可能性が高い。後述する土器枕として使用された須恵器は、礫床に直接設置されていたとみられ、被葬者の遺体は棺には入れず直接床面に安置したと考えられる。

遺物の出土状況

石室内の出土品には須恵器6個体分、鐵鏃1点がある。また、溝状遺構から須恵器1点が出土した。

玄室内からは杯蓋(2+3)および有蓋高杯の蓋(7)がほぼ完形状態で出土した。3点は奥壁から約0.5m離れた箇所に、奥壁側を底辺とした逆三角形の形に配置される。底辺側の2点は伏せた状態、南

側の杯蓋は内面を上に向けた状態に置かれ、遺体の頭を据える枕として用いられた可能性が高く、被葬者の頭位方向は北東とみられる。この3点以外の須恵器や鐵鏹はいずれも埋土中からの出土で、石室が損壊を受けた際に散逸したものと考えられる。

溝状造構埋土の最上層中から出土した須恵器は、装飾付子持壺である。石室の損壊に伴って破損し、埋没して座み状となっていた溝状造構に落ち込んだものと考えられる。

5 石室2(図版13~15、写真図版17~21)

層位

墳丘の北側に位置する。表土直下では埋葬施設が検出できなかったため、墳丘盛土(27~33層)を0.6~0.7m掘り下げたところ蓋石の上面が見つかり、さらに0.2mほど覆土を取り除いて蓋石を検出した。小型の堅穴式石室で、攪乱を受けておらず、蓋石が全て原位置を保っている状態であった。

掘り方は墳丘盛土(35層)を掘り込んでおり、ある程度旧表土を整地した上から掘削したものとみられる。平面形は不整な小判形で、断面観察から長軸3.6m、短軸1.85m、深さは最大0.7mの規模が復元できる。

石室構造

小型の堅穴式石室で、主軸方向をN40°Eにとる。蓋石には長さ0.8~1.0m、幅0.5~0.6mの大型の角礫が4石用いられ、隙間を8~30cm大の角礫によって埋めている。粘土による目張りは施されていなかった。4石の重なりからみて、北端から2番目の石材を最後に閉じた可能性が高い。なお4石のうち蓋石の検出時に見えていたのは北寄りの3石で、南端の石材は他の3石を外した段階で確認した。

側壁は、厚さ10~20cmの角礫を3~4段積み上げて構築している。最下段には長さ40~65cmの細長い石材を据えて基底とし、その上に15~40cm程度の石を小口積みしている。なお東側壁の最上段は厚さ4~10cmの薄い石材で、高さを調整している。

南小口は、厚さ10~25cmの角礫を3段に小口積みしている。最下段には長さ45cmの石材を1石据えて基底とし、2・3段目には10~20cm程度の石を2石ずつ並べている。ただし最上段では、南小口と西側壁の隅に石材を斜めにはめ込んで蓋石を受けていた。

北小口は、最下段に高さ40cmの板石を立てて、その上に厚さ10~20cmの角礫を1石ずつ2段に小口積みしている。最下段背後の掘り方内には裏込めの石材を入れて、板石を支えている。側壁と南小口の構築の前後関係は判断が難しいが、北小口については、側壁を少なくとも2段目まで積み上げてから立てている可能性が高い。

床面の状況

石室内には土砂の流入が少なく、副葬品や砾床の存在など、床面の状況はすぐに観察できた。床面の北端には北小口に接して横長の角礫を1石配置している。この角礫は40×18cm、高さ12cmで、枕として用いられたと考えられ、被葬者の頭位は北側であったとみられる。頭位の方角はおよそN40°Eである。この枕石と両側壁の間には別に幅10cmほどの石を詰めて隙間を塞いでいる。枕石より南側の床面には2~5cm大の川原石を5~7cmの厚さに敷いて砾床としているが、南端の20cmほどは砾が途切れている。

石室の床面付近の内法は全長約1.7mだが、砾床部分の長さは1.3~1.4mで、石枕から砾床端までの長さで推し量る身長は1.5m前後となる。幅は北端側が約0.5m、南端側が約0.4mで、頭位と考えられる北側の方が広い。床面から蓋石までの高さは0.6~0.7mであるが、砾床上面から測ると0.5~0.6mとなる。

遺物の出土状況

石室内の出土品には須恵器3点、刀子1点、管玉12点、ガラス小玉約40点がある。

須恵器は足元側にあたる南小口付近に副葬されており、短頸壺(17)とそのセットと思われる蓋(16)は砾床の南端、もう1点の壺蓋(15)は砾床から外れた床面上に置かれていた。なお2点の蓋はいずれも内面を上に向けた状態で、それ自体が容器として用いられていた。

刀子(M2)の出土位置は北小口から約70cm南で、中軸線から12~15cmほど西へ寄っており、被葬者の右腰付近にあたる。出土状況は切先を足元側に、刃を内側に向けた状態であった。

管玉は刀子に接した箇所で3点(J5・J8・J9)を検出した他、北小口から約40cm南の被葬者の胸付近で3点(J1・J2・J11)、約90cm南の下腹部付近にあたる箇所で1点(J3)が見つかった。しかし残りの管玉5点やガラス小玉については砾床上面の覆土の水洗選別によって採集しており、出土位置は不明である。

6 石室3(図版16・17、写真図版22~24)

層位

墳丘の西側にあつた窪地を中心に攪乱土・覆土を取り除いていったところ、確認調査Tr4で検出したのと同様の石材の並びとともに、方形の掘り方を検出した。

掘り方は、石室2の蓋石を被覆する一次墳丘より上から掘り込まれており、石室2よりも後から施工されたことが分かる。平面形は不整な隅丸方形で、南北方向の長軸は3.9m、短軸は2.45m、検出面からの深さはおよそ0.6mである。

石室構造

大きく損壊しているため不明確だが、掘り方のひと回り内側に石材の並びが断片的に認められ、石室が設けられていたことを示している。しかし石材のほとんどは抜き取られており、確実に原位置を留めるのは北小口で2段に積まれた数石のみである。他の各辺では石室の基底付近に20~55cm大の石材が残存するものの、本来の状態はうかがえない。しかし横口状の構造は認められないことから、竪穴系の石室であったと考えられる。石室の主軸は概ねN25°Wの方向をとる。掘り方の内側で石材を据えていた落ち込みは、長軸がおよそ3.0m、短軸が1.5~1.7mの範囲である。さらにその内側に設けられたであろう石室空間の規模は、全長が2.3m程度、幅については、後で説明する北小口の砾床の残存幅が0.8mであることから、その前後のサイズであったとみられる。なお掘り方に、裏込めの石はほとんど認められなかった。

石室構造の痕跡を示すのは北小口のみで、平積みされた2段の石積みが残っている。基底の中央に幅70cm、奥行き45cm、厚さ20cmの板石を据え、その両側に20~30cm大の角砾を寄せる。2段目には中央に幅60cm、奥行き40cm、厚さ20cmの板石、その西側に30~40cm大の角砾を積んでいて、石積みは内側へオーバーハングしている。

床面の状況

床面には黄褐色シルトによる貼り床とともに、4~15cm大の川原石を密に敷いて砾床としているが、現状では北小口の基底石に接した80cm×45cmほどの範囲にしか残っていない。砾床に使われている川原石は石室2よりも大きいもので、床面の中央から南側にも散乱しているところから本来は床一面に敷かれていたものとみられるが、北小口周辺以外は壁体から床面にかけて完全に攪乱されてしまっている。

遺物の出土状況

石室内の出土品には管玉5点、ガラス小玉5点、土玉30数点がある。土器・鉄器などは出土しなかつたが、遺存状況が非常に悪いため、本来的に無かったのかどうかは不明である。

管玉は北小口から30cm南側の礫床上で2点（J51・J53）を検出した他、石室南西隅の落ち込み斜面では床面から10cmほど遊離した状況で1点（J54）が、床面中央付近の埋土からは2点（J50・J52）が見つかった。土玉は礫床の西端付近で約20点がたまつて出土した。しかし残りのガラス小玉、土玉については礫床上面の覆土の水洗選別によって採集したものである。

7 出土遺物

須恵器（図版23、写真図版35～37）

杯蓋（1～4）

1は石室1の埋土および墳丘・周溝の覆土から出土した破片が接合したもので、全形が復元できる。口縁部から天井部にかけてゆるやかなカーブを描き、その境界に稜線等は認められない。天井部外面の調整は、回転ヘラキリ後、不定方向にナデている。口径は16.3cm、器高は4.95cmに復元できる。

2は石室1の礫床上面からの出土で、完形品である。やや直立気味の口縁部から平坦な天井部につながり、全体的に低平な印象を受ける。口縁基部の内面はやや強くナデしている。天井部外面の調整は、回転ヘラキリ後、一部に板状工具の痕跡が認められる。口径は16.5cm、器高は4.7cmである。

3は石室1の礫床上面からの出土で、ほぼ完形品である。口縁部から天井部にかけてゆるやかなカーブを描き、その境界に稜線等は認められない。口縁基部の内面には強いナデによって沈線状の段が生じており、端部が短く直立する。天井部外面の調整は、回転ヘラキリ後、静止ヘラケズリを行っている。口径は16.5cm、器高は5.1cmである。

4は墳丘東側の周溝～墳裾の覆土から出土した、口縁部から天井部にかけての破片である。短く直立した口縁部から屈曲して天井部にいたる。天井部外面は回転ヘラケズリで調整している。他の杯蓋に比べると径が小さく、天井部外面も調整されているところから、8のような高杯とセットになる蓋かもしれない。口径は13.6cm、現存の器高は3.9cmに復元できる。

杯身（5・6）

5は石室1の埋土から出土したもので、全形が復元できる。口縁部の立ち上がりは1.1cmほどの長さで内傾し、受け部は短く外へ突出する。体部は直線気味にのびて平坦な底部につながり、深手のプロボーションと薄い器壁という特徴をもつ。底部外面は回転ヘラケズリで調整している。口径は14.5cm、器高は5.0cmに復元できる。

6は墳丘東側の周溝～墳裾の覆土から出土したもので、全形が復元できる。口縁部の立ち上がりは0.8cmほどで短く内傾し、受け部との間が匙面状の凹部となる。体部は底部にかけてゆるやかなカーブを描き、底部外面は回転ヘラケズリで調整している。口径は13.75cm、器高は4.3cmである。

高杯蓋（7）

石室1の礫床上面からの出土で、ほぼ完形品である。やや直立気味の口縁部から丸みを帯びて天井部につながり、その境界に稜線等は認められない。頂部に扁平なつまみが付く。天井部外面は回転ヘラケズリで調整している。口径は15.9cm、器高は5.4cmである。

高杯（8）

石室1南側から出土した脚部と、北東側の墳丘の覆土から出土した杯部が接合した有蓋高杯で、全形

が復元できる。口縁部は0.9cmほどの長さでややシャープに立ち上がる。杯部にラッパ状の脚部が接合し、裾部で沈線を伴う段が付く。脚部の透かしの有無は、残存率が少なく不明である。口径は12.8cm、器高は8.4cm、底径は11.1cmに復元できる。

壺体部(9)

墳丘南西側の墳裾から出土した壺の体部で、残存高は10.8cm、腹部最大径は13.85cmである。口頸部の形状は不明で、丸みのある体部は器壁が厚く重みが感じられる。肩部に櫛状工具による連続刺突と沈線文を2段に施し、底部は不定方向のヘラケズリの後ナデ消している。

装飾付子持壺(10)

石室1入口付近で検出した溝状遺構から、装飾付子持壺の破片がまとまって出土した。層位は腐植土を含む上層の黒色土で、接合もしくは同一個体の破片が周辺にも散っているところから、石室が破壊された時に、同じく破損したものと考えられる。

接合したところ、頸部から体部にかけての形状が復元できた。口縁部は失われていたが、本来の口径は20cmを超えていたとみられる。腹部最大径は21.5cm、現存の器高は23.1cmだが、底部の接合痕からみて、本来は脚部を有していた可能性があるが、現況で確認はつかめない。肩部には貼り付けられた子壺の剥離痕が3箇所円く残り、もう1箇所も縁だけが観察できて、全体で4単位であったことが判る。ただし割り付けは、等間隔とはなっていない。子壺の破片は3片のうち1片が肩部に接合して、口径6.7cm、器高5.5cm程度の壺状の器形であったことが判る。他は口縁のみの破片(10-2)で接合できなかつた。

体部は球形で、頸部が高く外反する。器壁は0.8~1.1cmの厚みをもち、重量感がある。頸部は中位を区切る2条の浅い凹線の上下に櫛描波状文を施し、凹線の上には円形浮文と棒状浮文を交互に貼付する。各浮文は全体で5個ずつあったと復元できる。また竹管文が頸部の付け根側に11箇所、肩部の上半に12箇所残存しており、子壺間に2~4個ずつ施されている。体部外面は平行タタキをカキメで調整し、内面にはユビオサエの痕跡が顕著に残る。色調は灰色で、5mm大までのやや粗い砂粒を含む。

器台(11)

北西側の墳丘の覆土から鉢部の破片が1点のみ出土した。本来は脚部を有していたものと考えられるが、底部以下は不明である。鉢部は大きく開いて、口縁部を外側へ折り返して垂下させる。器壁は0.8~1.1cmの厚みをもつ。口縁直下の2条の凹線、鉢部中位の1条の凹線で区切られた間に櫛描波状文を2段に施す。外面の中位凹線以下には平行タタキ、内面には同心円のあて具痕が残る。口径は32.0cmに復元できる。色調は灰色で、2mm大までの砂粒を含み、全体に自然釉がかぶる。

脚部(12)

南西側の墳丘の裾部から出土した。脚部の裾にあたる破片で、内傾気味に立ち上がった後、2状の凹線を伴う段を有する。底径は22.6cmに復元できる。色調は黄色味を帯びた灰色で、4mm大までの砂粒を含む。装飾付子持壺もしくは器台の脚部の可能性がある。

壺(13)

北東側の墳丘の覆土から出土した口頸部の破片で、丸く外反した頸部から、口縁端部が凹線を伴う段をもって開く。口径は23.9cmに復元できる。

有蓋壺(14)

墳頂部で石室2の検出時に、墳丘の盛土から出土した。壺の口頸部で、頸部はゆるやかに開き、その

端部に0.5cmほどの受け部を設けて、口縁部が1.5cmほど立ち上がる。受け部の直下に細かい櫛描波状文を施し、その下に1条の凹線で文様帯を区画している。なお波状文の天地には罫書き線が認められ、罫書きの間を埋めるように施文していることがうかがえる。色調は明るい灰色で、精良な胎土をもち、外面には自然釉がかぶり、火だすき痕も認められる。口縁部の形状からみて、蓋を伴うものとみられるが、欠損部以下の器形は不明である。口径は9.1cm、受け部径は11.0cm、頸部径は6.4cmに復元でき、残存高は6.15cmである。

壺蓋(15・16)・短頸壺(17)

石室2の床面南端に副葬されていた3点の土器で、短頸壺1点に対し蓋が2点あり、形状・焼成などからみて16と17がセットになると考えられる。ただし2点の蓋はいずれも内面を上に向けた状態で、それ自体が容器として用いられていた。

壺蓋(15・16)はいずれも丸い椀を伏せたような形状で、頂部外面を回転ヘラケズリで仕上げる。口縁端部には内傾する匙状の面をもつ。15は口径10.15cm、器高4.55cmで、器壁の厚みは0.4~0.6cmである。色調は灰色で、4mm以下の砂粒を含む。16は口径9.1cm、器高4.1cmで、器壁の厚みは相対的に薄く0.3~0.5cmである。色調は15よりやや明るい灰色で、2mm以下の砂粒を含む。

短頸壺(17)は低く腰の張った体部から、口頸部が内傾気味に短く立つ。底部外面は回転ヘラケズリで仕上げる。口径7.5cm、胴部最大径12.05cm、器高6.45cmである。色調・胎土は16と共通する。

杯身(18)

杯身の口縁部で、小片のため口径は復元できず、傾きも不明確である。1.8cmほどの立ち上がりが直立している。1号墳の他の出土品よりも古相を示しており、1号墳に伴うものかどうか不明である。

石室1の鉄器(第3図、写真図版37)

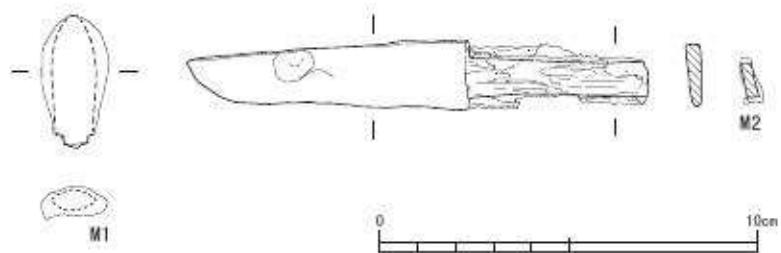
鉄鎌(M1)

逆刺をもたない長三角形の鎌身部で、断面は両丸造である。関部は角関で、鎌身長は3.15cm、レントゲン観察による鎌身幅は1.2cmである。長頸鎌とみられるが、頸部以下は基部から先が欠損しており、残存長は3.5cmである。

石室2の鉄器(第3図、写真図版37)

刀子(M2)

完形で、全長12.2cm、刀身長7.45cm、関部は両関で幅が1.8cm。刀身に明らかな研ぎ減りは認められない。茎部は長さ4.75cm、幅0.9cmで、柄の木質が残存している。



第3図 1号墳の鉄器

石室2の玉類(図版24、巻頭図版7)

管玉(J1～J12)

材質は碧玉製9点(J1～J9)と緑色凝灰岩製3点(J10～J12)の2種類がある。

碧玉の製品は直径の大小により、J1とJ2～J9の2グループに分けられる。J1は直径11mm、長さ33.5mmで、他のものより格段に大きい。J2～J9は直径7～8mm、長さ21～26.5mmで、直径は一定だが長さにはばらつきがある。石材は濃緑色を呈し、マーブル状の地模様が目立たないタイプが多いが、J4は濃淡のあるやや浅い緑色で、マーブル状の地模様が顕著である。製作技法は共通していて、小口面に擦痕が残るものが多く、片面穿孔で、孔の出口側が欠けたもの(J5～J7)については臼状に整形する。

緑色凝灰岩の製品は直径5～6.3mm、長さ16.2～22mmで、碧玉製品よりも細く短い。石材は、きめの細かいJ11と、やや粗くて風化の激しいJ10・J12の2つのグループに分けられ、J10・J12が片面穿孔なのに対し、J11は両面穿孔で技法の違いが認められる。

ガラス小玉(J13～J49)

すべて水洗選別によって採集したもので、破片を含めると40数点になるが、37点を図化した。大きさは直径2.5～3.9mmの範囲で、長さは筒状の1点(J13)が5.9mmであるのを除くと、1.3～3.1mmの範囲におさまる。色調によりコバルトブルーのもの33点(J13～J45)と緑青色のもの2点(J46・J47)、青緑色のもの1点(J48)、赤褐色で不透明のもの1点(J49)の4グループに分けられる。J49は蛍光X線分析の結果、銅と鉄で着色した鉛ガラスの可能性が高い。

石室3の玉類(図版24、巻頭図版8)

管玉(J50～J54)

すべて碧玉製で、直径7～7.5mm、長さ19～22mmと、規格性の高い一群である。石材は濃緑色を呈し、マーブル状の地模様が目立たないタイプ(J50・J54)と、濃淡のあるやや浅い緑色で、マーブル状の地模様が顕著なタイプ(J51～J53)がある。製作技法も石室2の管玉と同じく、小口面に擦痕が残るものがあり、片面穿孔の出口側が欠けたもの(J50・J52)については臼状に整形する。

ガラス小玉(J55～J59)

すべて水洗選別で検出し、5点を図化した。大きさは直径2.7～3.6mm、長さは1.8～2.6mmの範囲におさまる。色調はコバルトブルーのもの4点(J55～J58)と青緑色のもの1点(J59)がある。

土玉(J60～J67)

縄床上面から約20点が出土し、水洗選別でも10数点を採取したが、取り上げ・水洗の過程で破碎したものが多く、図化できたのは8点である。球状の形態で、内部は灰色の砂質土からなり、表面を黒灰色の皮膜層で覆う構造となっている。大きさは直径9.7～13.1mm、長さは7.2～10.8mmの範囲におさまる。

8 小結

円山川沿いの平野部に向かって眺望の開けた立地で、夜氣山丘陵の古墳群の中では最高点に位置する。この丘陵では現在のところ他に石室墳は見つかっておらず、単独で築かれた可能性がある。また1つの墳丘に3つの異なるタイプの石室が設けられ、その石室がいずれも墳丘の中央から外れていることなど、ほとんど類例のない様相が明らかとなった。

第3節 広瀬2号墳

1 立地

1号墳から東に向かって延びる尾根の頂部に位置する。調査前の墳丘頂部の標高は111.5mである。

2 調査前の状況(図版2、写真図版26)

墳頂部は平坦面となっており、明瞭に墳丘が確認できた。

3 墳丘(図版18、写真図版26)

墳丘の平面形は円形で、径は約9.9mである。周溝上部からの墳丘の高さは現状で1mを測る。西半部のみが調査範囲内となるため、全体の調査は行っていない。周溝によって西から続く尾根をカットし、墳丘を区画する。墳丘は付近の風化岩盤層由来の盛土を施すことで形成する。南北が急峻な斜面で、盛土が多量に流出しており、遺存状況は良くない。盛土残存部分の厚さは最大で50cmである。

周溝は幅4.9~5.4m、残存深度0.3mを測る。2号墳と3号墳の境に掘られるが、3号墳の西側には周溝が作られないことから、3号墳を明確に区画しようとする意図は認められず、周溝は2号墳に属するものの可能性が高い。

墳丘の西側1/3程度の調査を行ったが、埋葬施設は確認できなかった。埋葬施設は墳丘の中心部に位置しているものと考えられる。

4 小結

2号墳は円山川沿いの平野部を望む尾根先端部に築かれ、築造当初は麓からの視認性は広瀬古墳群中で最も良かったものと想定できる。墳丘は整形した地山の上に東側2/3は事業範囲外のため、現地に残る。西側1/3の調査では埋葬施設は検出されず、墳丘盛土からも遺物は出土していないことから、築造時期は不明である。

第4節 広瀬3号墳

1 立地

2号墳西側の尾根鞍部に位置する。幅の狭い尾根の平坦部を利用しておらず、調査前の標高は111.4~112.0mである。

2 調査前の状況(図版2・写真図版27)

明確な墳丘は認められず、確認調査以前は古墳と認識されていなかった。確認調査Tr7を調査した際に木棺墓の痕跡が確認され、古墳であることが認められた。

3 墳丘・埋葬施設(図版19、写真図版27・28)

尾根の平坦面を利用し、現状では明確な墳丘は確認できなかった。埋葬範囲の東側は2号墳の周溝によって尾根がカットされるが、西側はカットしておらず、墓域を明確に区画する意識は低い。盛土が施

されたかどうかは不明であるが、木棺墓はごく浅くしか残っていないことから判断すると、後世に土が相当量流出していることが想定できる。平坦面の規模は長さ11.3m、最大幅6.2mを測る。

埋葬施設は木棺墓2基が確認できた。2基は平行して築かれ、主軸をN78°Eにとる。

木棺墓1の掘り方は長軸2.1m、短軸0.8m、残存深度0.26mである。木棺の大きさは長軸1.3m、短軸方向は復元すると0.6m前後である。木棺を配置し、その裏に風化岩盤由来の土を埋め戻し、墓を形成する。墓壙内からは遺物は出土しなかった。

木棺墓2の掘り方は長軸1.8m、短軸1.1m、残存深度0.42mである。木棺の大きさは長軸1.3m、短軸0.7mである。木棺墓1と同様、風化岩盤由来の土を利用して埋め戻す。墓壙内からは遺物は出土しなかった。

4 小結

明確な墳丘を持たない古墳で、2基の木棺直葬の埋葬施設を持つ。遺物は出土していないため、時期は不明である。

第5節 広瀬4号墳

1 立地

東西方向の尾根とそこから南に延びる支尾根の結節点に位置する。標高は113.2mである。

2 調査前の状況(図版2・写真図版29)

確認調査前は頂部に平坦面が認められたが、裾部が明瞭ではなく、古墳の形状や規模は不明であった。

確認調査Tr8を調査した際に、古墳である可能性が指摘された。

3 墳丘・埋葬施設(図版20、写真図版29・30)

岩盤を削り出して墳丘を成形する。埋葬施設が下部の20cmほどしか残っていないことから、本来の墳丘はより高かったことが想定できる。墳丘の平面形は南北8.3m、東西9.0mの楕円形を呈する。

埋葬施設は平坦面の中心部では確認できず、墳丘頂部平坦面の南西寄りで木棺墓を1基検出した。墳丘の土の流出が大きいため、木棺墓の遺存状況も良くなく、底部がわずかに残るのみである。主軸をN53°Wにとり、掘り方の規模は長軸1.7m、短軸0.8m、残存深度0.24mを測る。木棺の大きさは長軸1.4m、短軸0.5mである。墓壙からは遺物は出土しなかった。

木棺墓の北側に隣接して、土坑を1基検出した。規模は東西1.4m、南北1.5mの歪な円形で、深さは0.6mである。遺物が出土していないため、時期・機能は不明である。

4 小結

1号墳と2号墳の中間地点に位置し、北側の平野部からの眺望は良い。墳丘の残存状況は悪いが、木棺直葬の埋葬施設1基と土坑1基が確認できた。遺物は出土していないため、時期は不明である。

第6節 広瀬5号墳

1 立地

南区の南半部に位置し、傾斜のきつい痩せ尾根のわずかな平坦面に立地している。調査前の平坦面の標高は94.12mである。

2 埋葬施設(図版21・22、写真図版31~33)

明確な墳丘は認められず、岩盤をカットして、幅1.0~1.5m、深さ0.2m程度の区画溝および北西~南東約2.6m、北東~南西約5.7mの半月形の平坦面を設け、墓域としている。平坦面には、尾根線に対して直交方向の石棺が1基存在する。不整形な板石を組み合わせた小型の箱式石棺で、主軸の方向はN 65° Eである。蓋石は4石で、東端の石と西から2石目の上に他の石が被さっている。棺身は立位の板石で構成しており、側壁の両側を1石ずつの小口石で抑える構造である。側壁は長さ0.5~0.55mの石を用いているが、南側では掘り方に2石を入れて隙間を塞いでいる。北側の掘り方にも、小口石の外側に1石入っているが、石棺の構造とは関係なさそうである。底石はなく、棺の床面は岩盤の節理が剥き出しで整形されていない。掘り方の規模は長軸1.24m、短軸0.75m、検出面からの深さ0.3mである。棺内の大きさは長さ0.56m、幅0.15m、高さ0.18mで非常に小規模であるところから、小児用とみられる。棺内に遺物はなく、山側の区画溝と、確認調査のトレントから須恵器の細片(19・20)が出土したのみである。

3 出土遺物

須恵器(図版23、写真図版37)

杯身(19)

確認調査の際に、箱式石棺の付近で出土した。杯身の口縁部立ち上がりの部分で、小片のため口径は復元できず、傾きも不明確である。立ち上がりの長さは約2cm、厚みは2.5mmほどのシャープな作りで、内傾して、口縁端部に匙面をもつ。古墳群中の出土品でもっとも古い年代的特徴を示す。

底部(20)

箱式石棺上方の区画溝から出土した。平坦な底面から丸みを帯びて体部が立ち上がり、体部下端に帶状の段が認められる。底面は回転ヘラキリのあと不定方向にナデ消している。底部のみの破片で全形は不明だが、壺か深手の椀のような器形が考えられる。底径は7.4cmである。

4 小結

平野部への視界もあまりない急傾斜の痩せ尾根に、単独で築かれた古墳である。4号墳から続く尾根線にはより好条件の立地がありそうだが、この場所が選ばれた理由は不明で、他の古墳群との関係も不明である。ただし出土遺物には古い年代の須恵器があり、それが遺構に伴うものであれば5世紀末~6世紀初頭に遡る可能性がある。

第7節 その他の遺構と遺物

1 盛土遺構

4号墳から1号墳へ向かう尾根筋の鞍部で、盛土遺構を検出した。盛土によって山道の高低差を均し、通路としていたと考えられる。盛土から寛永通寶などが出土しており、江戸時代以降の所産である。

出土遺物(第4図、写真図版37)

鉄釘(M3)

身部の断面は方形で、頭部を平たく伸ばして丸く折り返し、身部に密着させている。先端は欠損しており、残存長は8.0cm、断面幅は0.65×0.85cmである。

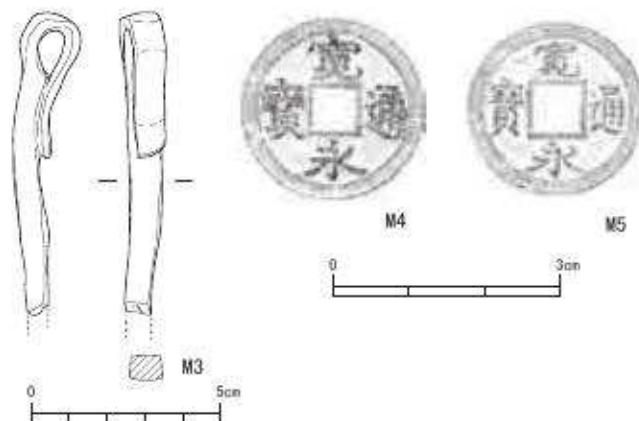
銅錢(M4)

寛永通寶で、裏面は無文である。直径は2.4cm、厚みは0.15cmである。「寛」の字体からみて、17世紀中頃に鋳造されたいわゆる古寛永とみられる。

2 その他

銅錢(M5)(第4図、写真図版37)

南区の尾根筋の表土から出土した寛永通寶で、裏面は無文である。直径は2.3cm、厚みは0.15cmである。「寛」の字体からみて、17世紀後半以降に鋳造されたいわゆる新寛永とみられる。



第4図 その他の遺物

表2 土器計測表

図版	報告No.	種別	器種	地区	遺構	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	その他
23	1	須恵器	杯蓋	北区	1号墳石室1	石室内埋土 第3層	16.3	4.95	—	
23	2	須恵器	杯蓋	北区	1号墳石室1	礫敷上	16.5	4.7	—	
23	3	須恵器	杯蓋	北区	1号墳石室1	礫敷上	16.5	5.1	—	
23	4	須恵器	杯蓋	北区	1号墳東周溝～ 東墳裾	上面～2層	(13.6)	(3.9)	—	
23	5	須恵器	杯身	北区	1号墳 石室1内サブトレ	表土下の覆土	(14.5)	(5.0)	—	
23	6	須恵器	杯身	北区	1号墳東墳裾	2層	13.75	4.3	—	
23	7	須恵器	高杯蓋	北区	1号墳石室1	礫敷上	15.9	5.4	—	
23	8	須恵器	高杯	北区	1号墳石室1南側	暗褐色腐葉土	(12.8)	(8.4)	(11.1)	
23	9	須恵器	壺	北区	1号墳南西墳裾	表土	—	(10.8)	—	腹径(13.85)
23	10	須恵器	装飾付子持壺	北区	1号墳石室1南側溝	黒色土層	—	(23.1)	—	腹径21.5
23	11	須恵器	器台	北区	1号墳北西墳丘	表土	(32.0)	(8.75)	—	
23	12	須恵器	脚部	北区	1号墳南西墳裾	周溝上面	—	(4.35)	(22.6)	
23	13	須恵器	甕	北区	1号墳東北墳丘	2層	(23.9)	(6.5)	—	
23	14	須恵器	有蓋壺	北区	1号墳墳頂部	主体部精査	(9.1)	(6.15)	—	
23	15	須恵器	壺蓋	北区	1号墳石室2		10.15	4.55	—	
23	16	須恵器	壺蓋	北区	1号墳石室2		9.1	4.1	—	
23	17	須恵器	短頸壺	北区	1号墳石室2		7.5	6.45	—	腹径12.05
23	18	須恵器	杯身	北区	1号墳 (出土場所不明)		—	(3.5)	—	
23	19	須恵器	杯身	Tr15	小石棺付近		—	(1.9)	—	
23	20	須恵器	底部	南区	5号墳	石棺上側の 溝上面	—	(3.6)	7.4	

表3 金属器計測表

挿図	報告No.	種別	器種	地区	遺構	層位	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
第3図	M1	鉄器	鉄鏃	北区	1号墳石室1	礫敷上面	3.5	1.75	0.84	4.3
第3図	M2	鉄器	刀子	北区	1号墳石室2		12.2	1.8 0.9	0.4	
第4図	M3	鉄器	鉄釘	北区	里道の盛土		(8.0)	0.85	0.65	
第4図	M4	銅製品	銅錢 (寛永通宝)	北区	里道の盛土		2.4	2.4	0.15	3.1
第4図	M5	銅製品	銅錢 (寛永通宝)	南区	表土 (木根除去時)		2.25	2.3	0.15	2.7

表4 玉類計測表

図版	報告No.	種別	器種	地区	遺構	層位	長(mm)	幅(mm)	重量(g)	色調他
24	J1	玉類	管玉	北区	1号墳石室2	床面	33.5	11.0	6.20	碧玉製 濃緑色
24	J2	玉類	管玉	北区	1号墳石室2	床面	26.5	8.0	3.08	碧玉製 濃緑色
24	J3	玉類	管玉	北区	1号墳石室2	床面	26.0	7.5	2.38	碧玉製 濃緑色
24	J4	玉類	管玉	北区	1号墳石室2	疊床下	25.0	7.5	2.70	碧玉製 濃緑色
24	J5	玉類	管玉	北区	1号墳石室2		24.5	7.3	2.45	碧玉製 濃緑色
24	J6	玉類	管玉	北区	1号墳石室2	水洗選別	23.0	7.5	2.27	碧玉製 濃緑色
24	J7	玉類	管玉	北区	1号墳石室2	水洗選別	23.0	7.0	2.10	碧玉製 濃緑色
24	J8	玉類	管玉	北区	1号墳石室2		22.5	7.8	2.51	碧玉製 濃緑色
24	J9	玉類	管玉	北区	1号墳石室2		21.0	8.2	2.63	碧玉製 濃緑色
24	J10	玉類	管玉	北区	1号墳石室2	水洗選別	22.0	6.3	0.99	緑色凝灰岩製 明緑灰
24	J11	玉類	管玉	北区	1号墳石室2	床面	20.0	6.0	1.05	緑色凝灰岩 オリーブ灰色 両面穿孔

24	J12	玉類	管玉	北区	1号墳石室2	水洗選別	16.2	5.4	0.52	緑色燧灰岩製 明緑灰
24	J13	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		5.9	2.8	0.07	コバルトブルー
24	J14	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		3.1	3.8	0.06	コバルトブルー
24	J15	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.3	3.6	0.04	コバルトブルー
24	J16	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.8	3.5	0.03	コバルトブルー
24	J17	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.4	3.4	0.04	コバルトブルー
24	J18	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.3	3.3	0.04	コバルトブルー
24	J19	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.1	3.4	0.04	コバルトブルー
24	J20	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.1	3.4	0.03	コバルトブルー
24	J21	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.1	3.4	0.03	コバルトブルー
24	J22	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.5	3.4	0.02	コバルトブルー
24	J23	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.4	3.3	0.03	コバルトブルー
24	J24	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.3	3.2	0.03	コバルトブルー
24	J25	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.9	3.4	0.03	コバルトブルー
24	J26	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.8	3.3	0.02	コバルトブルー
24	J27	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.7	3.2	0.04	コバルトブルー
24	J28	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.7	3.0	0.02	コバルトブルー
24	J29	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.3	3.2	0.03	コバルトブルー
24	J30	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.9	3.1	0.03	コバルトブルー
24	J31	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.4	3.0	0.03	コバルトブルー
24	J32	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.3	3.0	0.03	コバルトブルー
24	J33	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.2	3.0	0.03	コバルトブルー
24	J34	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.0	3.1	0.03	コバルトブルー
24	J35	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.8	3.0	0.02	コバルトブルー
24	J36	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.6	3.0	0.02	コバルトブルー
24	J37	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.3	3.0	0.01	コバルトブルー
24	J38	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.0	2.9	0.02	コバルトブルー
24	J39	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.7	2.9	0.02	コバルトブルー
24	J40	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.6	2.7	0.01	コバルトブルー
24	J41	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.6	2.5	0.02	コバルトブルー
24	J42	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.3	2.5	0.01以下	コバルトブルー
24	J43	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.9	3.0	0.03	コバルトブルー
24	J44	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		(2.5)	(2.9)	0.01	コバルトブルー
24	J45	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.0	3.0	0.02	コバルトブルー
24	J46	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		2.9	2.8	0.03	緑青色
24	J47	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		3.0	3.9	0.07	緑青色
24	J48	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		3.1	3.0	0.03	青緑色
24	J49	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室2		1.9	3.2	0.02	赤褐色(不透明)
24	J50	玉類	管玉	北区	1号墳石室3	円錐上面	22.0	7.5	2.18	碧玉製 濃緑色
24	J51	玉類	管玉	北区	1号墳石室3	北小口襖床	21.0	7.0	1.89	碧玉製 濃緑色
24	J52	玉類	管玉	北区	1号墳石室3	円錐上面	21.5	7.5	1.88	碧玉製 濃緑色
24	J53	玉類	管玉	北区	1号墳石室3	北小口襖床	21.0	7.5	2.07	碧玉製 濃緑色
24	J54	玉類	管玉	北区	1号墳石室3	南西隅埋土中	19.0	7.0	1.68	碧玉製 濃緑色
24	J55	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室3		2.6	3.6	0.05	コバルトブルー
24	J56	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室3		2.4	3.5	0.04	コバルトブルー
24	J57	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室3		1.8	2.9	0.02	コバルトブルー
24	J58	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室3		1.9	2.7	0.02	コバルトブルー
24	J59	玉類	ガラス小玉	北区	1号墳石室3	襖床	2.3	3.6	0.04	青緑色
24	J60	玉類	土玉	北区	1号墳石室3		10.8	13.1	1.6	黒灰色
24	J61	玉類	土玉	北区	1号墳石室3	北小口襖床	10.3	12.4	1.6	黒灰色
24	J62	玉類	土玉	北区	1号墳石室3		9.2	10.9	1.0	黒灰色
24	J63	玉類	土玉	北区	1号墳石室3	北小口襖床	8.2	10.1	0.9	黒灰色
24	J64	玉類	土玉	北区	1号墳石室3	北端襖床上	8.2	10.0	0.8	黒灰色
24	J65	玉類	土玉	北区	1号墳石室3	北小口襖床	(7.0)	10.9	0.8	黒灰色
24	J66	玉類	土玉	北区	1号墳石室3	北小口襖床	9.0	9.7	0.8	黒灰色
24	J67	玉類	土玉	北区	1号墳石室3	北小口襖床	7.2	10.1	0.7	黒灰色

第4章　まとめ

第1節　出土土器について

広瀬古墳群の出土土器はすべて須恵器で、そのほとんどが1号墳からのものである。しかし横穴式石室である石室1は大きく破壊されて遺物は持ち出されており、同様に破壊されていた石室3からは1点も土器が出土しておらず、古墳群全体の出土点数はあまり多くない。1号墳で18点、5号墳で2点の土器を図化したが、そのうち石室内での副葬状態を示しえるものは、石室1に残されていた杯蓋と高杯蓋の3点と、手つかずであった石室2における壺と壺蓋の3点のみである。以上のような限られた資料であることを前提として、1号墳と5号墳の出土土器を検討する。

1 装飾付須恵器

1号墳石室1の溝状遺構からは、装飾付子持壺1個体(10)が出土している。出土状況としては腐食土層中で、二次的に動かされているのは明らかであるが、この種の須恵器の圧倒的多数が横穴式石室に伴うことからも、石室1に帰属する遺物と考えて差し支えない。また関連する遺物として器台(11)と装飾付須恵器か器台の脚部の裾にあたる破片(12)が墳丘の各所から出土しており、本来は壺と器台がセットであったとみられる。

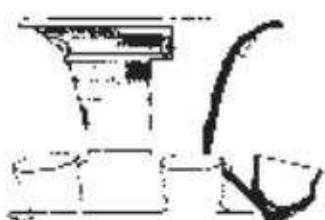
装飾付子持壺(10)は体部が球形で、器台の痕跡とされる鰐状突帯はもたず、肩の部分に子壺を4箇所貼り付けている。

井守徳男氏の研究[井守2003・2005]によると、但馬地域における装飾付子持壺は養父市禁裡塚古墳[山根1994](第5図1)、豊岡市赤坂1号墳[金津2005](第5図2)、香美町長者ヶ平古墳[井守2003](第5図3)に出土例がある⁽¹⁾。しかしそれらは鰐状突帯に子壺を載せる形態で、鰐状突帯をもたない壺としては広瀬1号墳が但馬では初例である。形態的な類似品を求めるに、小像を別にすれば、たつの市西宮山古墳[八賀1982]の台付装飾壺(第5図4)にプロポーションが似通っているといえる。また同古墳の器台(第5図5)についても、1号墳の器台(11)・脚部(12)と口縁部・裾部の形状に共通性が指摘できる。ただし西宮山古墳に比べると、装飾付子持壺(10)は器壁が厚く仕上げが粗雑なところがあり、器台(11)は鉢部が直線的で、型的には新しい様相がうががえる。

墳丘盛土から出土した有蓋壺(14)については、その特徴的な口縁部形態の類品として、尼崎市園田大塚山古墳[岡田1987]の有蓋長頸壺(第5図6)、三田市西山6号墳[高島・潮崎1983]埋葬施設4下部土壙の台付有蓋壺(第5図7)、神戸市松野遺跡[口野・山本2001]の装飾付有蓋直口壺(第5図8)がある。園田大塚山古墳と西山6号墳の例はともに子持蓋がセットとなり、松野遺跡例は肩部に子壺と動物の小像を配していることから、14についても装飾付壺である可能性が高いといえる。しかし口縁部以外の破片は見つかっておらず、その出土状況については問題が残る。



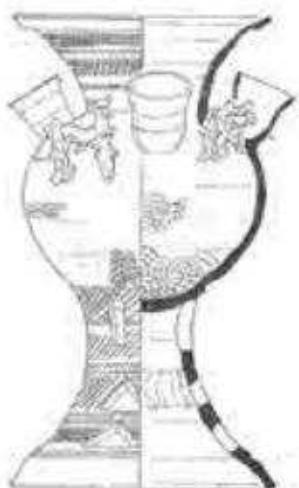
1 養父市禁裡塚古墳〔山根 1994〕



3 香美町長者ヶ平古墳〔井守 2003〕



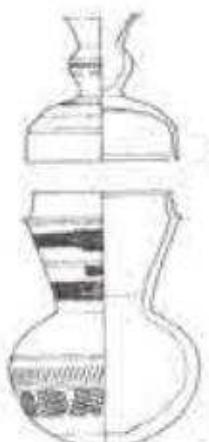
2 豊岡市赤坂1号墳〔金津 2005〕



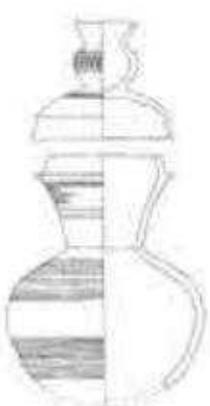
4 たつの市西宮山古墳〔八賀 1982〕



5 たつの市西宮山古墳〔八賀 1982〕



6 尼崎市園田大塚山古墳
〔岡田 1987〕



7 三田市西山6号墳
〔高島・瀬崎 1983〕



8 神戸市松野遺跡
〔口野・山本 2001〕

第5図 兵庫県下の装飾付須恵器類例（縮尺：1／6）

2 須恵器からみた古墳の年代

1号墳の石室1の砾床上面から出土した杯蓋(1～3)と高杯の蓋(4)の口径は15.9～16.5cmで、やや大ぶりな傾向を示す。一方、図化した2点の杯身(5・6)は、横穴式石室埋土や墳裾からの出土品であるが、受け部径が16.1～17.1cmで、蓋との組み合わせは法量的には過不足ない。この組合せを横穴式石室の土器群の基本セットと考えると、杯身の形状から陶邑編年のTK209型式の段階と判断され、石室1の年代は7世紀初頭に位置づけられる。ただし杯蓋(1～3)の外面調整は、回転ヘラケズリが天井部半ばでとどまっており、但馬地方の地域性を考慮すると、さらに年代が下る可能性もある。

石室2については墳丘の層位から、3つの石室のうちで最初に築かれたことが分かっている。しかしその砾床上の短頭壺(17)と壺蓋(15・16)の3点はいずれも年代的特徴に乏しい器形であり、石室1の土器群に対して、土器型式上の隔たりがどの程度であるかを表す決め手とはなっていない。しかし石室2の検出時に墳丘盛土から出土した有蓋壺(14)の類品である西山6号墳例はTK43型式を示しており、石室2の時期も6世紀後半の範疇に入る可能性が高い。

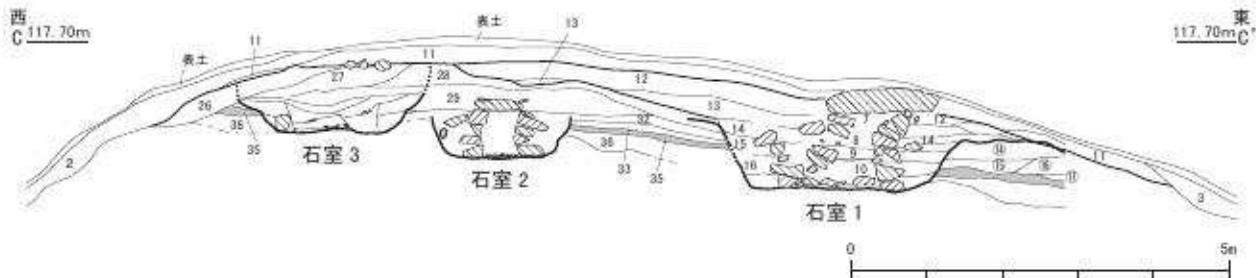
5号墳で出土した土器はいずれも小片だが、杯身(19)は陶邑編年のMT15型式の特徴に近く、6世紀前半の可能性がある。しかしあう1点の底部(20)は胎土・調整の質感が異なっていて時期差が感じられ、これだけの資料で時期の確定は困難である。

第2節 1号墳の石室について

1号墳は直径18mにも満たない円墳でありながら、墳丘上に3基の石室を有している。木棺や石棺であれば1墳丘多埋葬も通例だが、古墳時代後期の石室墳としては稀有な事例である。しかもその石室は横穴式石室1基と竪穴式石室2基が混在していて、配置についても墳丘の中央を避けるように分散しており、軸線も一定していない。このようなあり方を合理的に解釈するのは容易ではないと思われるが、要素を1つ1つ考察してみる。

1 築造順序

第3章第2節第3項で説明したように、墳丘土層断面の観察から石室2が最初に築かれたことが分かる。ただしこの断面の設定箇所が石室2・3にうまくかかっておらず、石室1の断面も不十分であるため、各石室の断面図を墳丘の東西土層断面図の中にはめ込んで、位置関係を表したのが第6図である。これをもとに構築順序をもう一度確認する。



石室2の掘り方は、墳丘下の旧表土(35層:網掛け部分)上に整地された32・33層の上から掘り込まれている。石室を構築後、蓋石を覆うように盛り上げた26~29層を一次墳丘とする(なお、土壌化を受けている表土・2・11層は除外している)。

石室3の上部は破壊されていて判然としないが、一次墳丘の上から掘り込まれたものと考えられる。

石室1の掘り方は一次墳丘の28層から掘り込まれていて、石室を構築しながら12・13層を盛り上げることにより二次墳丘を形成し、墳丘を嵩上げしている。ただし石室1西側の一次墳丘と東側の盛土(⑩~⑫層)に時期的な前後があったかどうかの手がかりは得られず、石室1構築に伴う墳丘の平面的な拡張の有無については確定できない。

なお、石室1と石室3の前後関係を直接比較できる層位はないものの、石室構造の系譜上、石室1の方が後出と考えておく。

2 積穴式石室

石室2の内法は1.7m×0.4~0.5m、高さが0.6~0.7mで、礫床の北小口側に石枕をもつ。壁体の石積みは両側壁と南小口が3~4段の積み石であるのに対し、北小口のみ板石を立てている。

石室3の想定される内法はおよそ2.3m×0.8m、残存高0.4~0.5mで、石室2よりひと回り大きい川原石で礫床を設けている。壁体の石積みは擾乱が著しく、北小口に2段の積み石が残っているのみで、他の三方については不明である。しかし残石に板状の石材は認められず、少なくとも側壁は数段の積み石を行っていたのではないかと予想される。被葬者の数は不明だが、玉類が出土した北小口側に頭位があったことは確実である。

この規模の埋葬施設の場合、但馬地域では木棺墓もしくは横長や板状の石材を組み合わせる石棺墓が一般的だが、数は少ないものの前期~中期の積穴式石室の系譜をひいて6世紀代でも積穴系の小石室を築造している例がある。こうした類例を分類・整理した福永伸哉氏は、この種の石室については箱式石棺が割石積み積穴式石室の影響を受けて成立したと捉えて「石棺系小積穴式石室」と呼称し、さらに箱式石棺との折衷の程度によりa~d型に細別した^[2]。そのうちのa~c型は石室の両小口もしくは側壁を含めて石材を立位で使用するもので、基本的に箱式石棺に石積みが加わったものである。広瀬1号墳の石室2は「四壁を2段以上の積み石で構成する」d型にあたり、北小口でのみ石材を立位に用いている。また石室3もd型の可能性がある。6世紀代におけるd型の類例としては、朝来市梅田27号墳SX01[仁尾2003]、同 秋葉山3号墳[藤井・深井1978]、豊岡市北浦古墳群27地点4号墳[瀬戸谷1987]などがあげられる(第7図1~3)。これら3つの石室の内法幅に注目すると、それぞれ87cm、60~65cm、63~92cmで、いずれも60cmを超えており。福永氏は内部に木棺をもち石室機能を担うものと、それ自体が石棺であるものとの境界は、石室の内法幅で60cm前後がその目安になるとされている。同様に朝来市芝花9号墳の埋葬施設の検討を通じて岸本一宏氏は、50cm程度以下ならば石棺と呼んでよいのではないかとした^[3]。以上の考察をふまえれば、先の3者は石室としての性格が評価でき(礫床を伴わないことも木棺が存在する可能性を補強して)、実際に梅田27号墳SX01では木棺痕跡も検出されている。

以上をもとに広瀬1号墳の積穴式石室を検討すると、石室2は内法幅が50cm以下で石棺としての機能面が強く、出土状況からもおそらく礫床上に直接遺体を横たえた単葬墓と考えられる。一方、石室3については内法幅が80cm以上あり、棺を伴っていてもおかしくない規模といえるが、礫床の残存部分には棺材等の痕跡は確認できず、礫床上に複数人を直葬した可能性もある。

1 朝来市梅田古墳群 27 号墳 SX01
〔仁尾 2003〕

2 朝来市秋葉山 3 号墳
〔藤井・深井 1978〕

3 豊岡市北浦古墳群 27 地点
4 号墳 [瀬戸谷 1987]

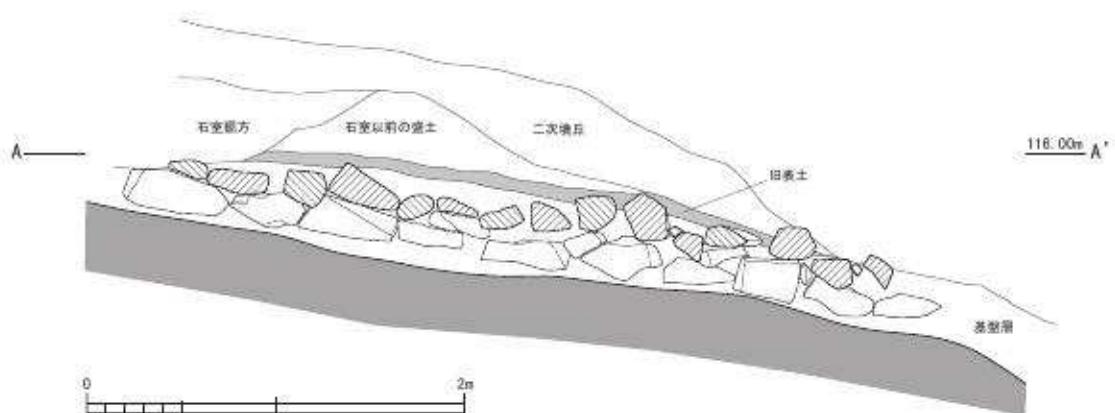
第 7 図 d 型「石棺系小竪穴式石室」の類例（縮尺：1／60）

3 横穴式石室

石室1は無袖の横穴式石室で、石室の残存長は4.6m、玄室長は3.1mもしくは3.7m、玄室幅は1.0～1.1mで、床面には15～40cm大の角礫を敷いて砾床としており、天井までの高さはおよそ1.2mである。羨道部は0.9m以上が残存していたが、そこに本来天井石が架かっていたかどうかは不明である。羨道部床面の溝状遺構は約1.5m延びたところで南へ曲がって墳丘斜面に開放しており、排水溝あるいは墓道的な性格が考えられる。

羨道部の溝状遺構とは別に、墳丘南東部の盛土中から暗渠状石組が見つかった。墳丘の断ち割り作業中の発見であったため、覆土との関係を示す断面がとれていない。そこで石組みの北側で作成した直近の墳丘断面図を、石組みの断面見透し図に合成したのが第8図である。地点がずれているため不確実な点もあるが、これをみると掘り方は旧表土・基盤層を掘り込み、構築後に盛土で覆って墳丘下の暗渠としている。構築のタイミングについては確証がとれないが、石組みの取付き部分が石室東壁の玄門付近に向かっていることなど勘案すると、石室と同時施工の蓋然性が高い。用途は排水と思われるが、墳丘中暗渠自体が異例で、系譜は不明である。

横穴式石室をもつ古墳は通常、丘陵の斜面や山裾に築かれることが一般的だが、山頂の尾根線上に位置する広瀬1号墳の立地はきわめて珍しい。尾根の先端や稜線に立地する横穴式石室墳としては、養父市びくに古墳〔谷本1993〕、豊岡市上佐野1号墳〔山田2016〕、丹波市火山10号墳〔多賀2005〕などの調査例があるが、いずれも古墳群における横穴式石室導入期のものと考えられ、時期的には6世紀前葉～後葉までのものを含む。広瀬1号墳の石室1は、夜氣山丘陵の古墳群の中では現在のところ唯一の横穴式石室である。築造時期は7世紀初頭と考えており、類例と比較すると年代は新しいものの、6世紀代の墳丘に石室を追加したという事情がある。ただし平野部との比高差は約100mで類例より群を抜いて高く、やはり特異な立地といえる。



第8図 暗渠状石組・墳丘断面合成図



写真1 石室1と進美寺山（南西から）



写真2 南ホウキ3号墳（北東から パノラマ）



写真3 同 東面の横穴式石室（東から）



写真4 同 北面の石室（北から）

4 石室の配置

3基のうち石室1は墳丘の東側に位置し、その軸線(N50°E)の延長線上には円山川対岸の進美寺山がそびえて石室の背景となっている。石室2は墳丘の北縁に位置し、その軸線(N40°E)は円山川下流方面に向いており、その方向が指し示す平野部からは、尾根上の墳丘が最も見易い角度となっている。一方、石室3は墳丘の西端に位置し、その軸線(N25°W)は他の2基と方位を大きく異にするが、その意味合いは不明である。

石室の配置について、2基の竪穴式石室が墳丘の中央を避けたということは、中心埋葬となるべき石室1の被葬者を予定していたということであろうか。しかしその横穴式石室も墳丘の東に寄っていて、結果的に中心部が空白となっている。墳丘の拡張があったかどうかも含めて、未解決の課題が多く残ってしまった。

6世紀代以降の円墳で、複数の石室をもつ古墳は但馬地域でも少数だがいくつか知られている。そのほとんどは横穴式石室が2基並んでいる例で、3基以上のものはないが、唯一2つの石室が直角方向を向いている例として豊岡市日高町赤崎に所在する南ホウキ3号墳がある⁽⁴⁾。同墳は進美寺山トンネル南坑口付近にある通称「みの柿山」の尾根の先端にあり、円墳の東面に開口する東西方向の横穴式石室と、北面に露出する南北方向の石室を見ることができる。北面の石室は全長2.5m、幅0.75m、高さ0.93mで、未調査のため詳細は不明だが、小型の竪穴式石室の可能性がある。山頂の尾根線に立地し、タイプも軸線も異なる石室が一墳丘に混在する類例が、円山川をはさんで向かい合う場所に所在するのも何らかの意味をもつかもしれない。

5 おわりに

石室2・3の類例として第7図に掲げたd型の「石棺系小竪穴式石室」3例は、いずれも墳丘上に単独で築かれた石室で、さらに各古墳群での最終段階の古墳ということが指摘できる。そのうち朝来市梅田古墳群、同秋葉山古墳群では、5世紀代から6世紀中頃にかけて木棺もしくは石棺による一墳丘多埋葬の古墳が一般的であったが、梅田27号墳SX01、秋葉山3号墳の段階以降、横穴式石室の古墳群にとって代わられるようになる。豊岡市北浦古墳群では5世紀代から一墳丘一埋葬の木棺墓を基本としていたが、北浦古墳群27地点4号墳の段階で古墳の構造は終わり、横穴墓への移行が想定されている。こうしてみるとd型は竪穴式石室の最終形態の1つと評価できそうで、広瀬1号墳では竪穴系から横穴系への墓制交代劇が1つの墳丘上で演じられたと受け止めるべきなのかもしれない。

同種の古墳の可能性があるとして先に述べた南ホウキ3号墳が所在する豊岡市日高町赤崎から広瀬古墳群の養父市八鹿町宿南にかけての地域は旧養父郡宿南村に含まれ、養父郡域の北東部に位置する。その養父郡内では、但馬最大規模の横穴式石室を内蔵する禁裡塚古墳から塚山古墳・西ノ岡古墳・こうもり塚古墳という巨石を用いた横穴式石室の系譜が迫る大蔵古墳群が傑出した存在である。また北に隣接する氷多郡にも、禁裡塚古墳に匹敵する石室をもつ縫縫古墳を中心に数十基の古墳群が円山川右岸の鶴岡の谷奥に形成されている。それらの勢力圏にはさまれた宿南のエリアにおいて、広瀬1号墳に葬られたのはどのような人物であったであろうか。

古墳の地勢という面から考えると、南但馬と北但馬の接点を扼し、蛇行する円山川を丘陵上から見下ろす立地は、古墳時代中期以来の占地の風を残している。埋葬施設も当初は伝統的な竪穴式石室を採用しており、兆城の始祖を任じていたのではないだろうか。

その出土遺物をみると、決して豊かな内容とはいえない副葬品の中に、装飾付子持壺や有蓋壺・器台といった特徴的な遺物が含まれている。こうした装飾付須恵器などは、第5図に掲げた類例が示すように地域の盟主的な古墳から出土する場合が多い。限られた資料から判断できる要素は多くないが、境界の地を掌握することにより、一定の実力を認められた存在であったといえよう。

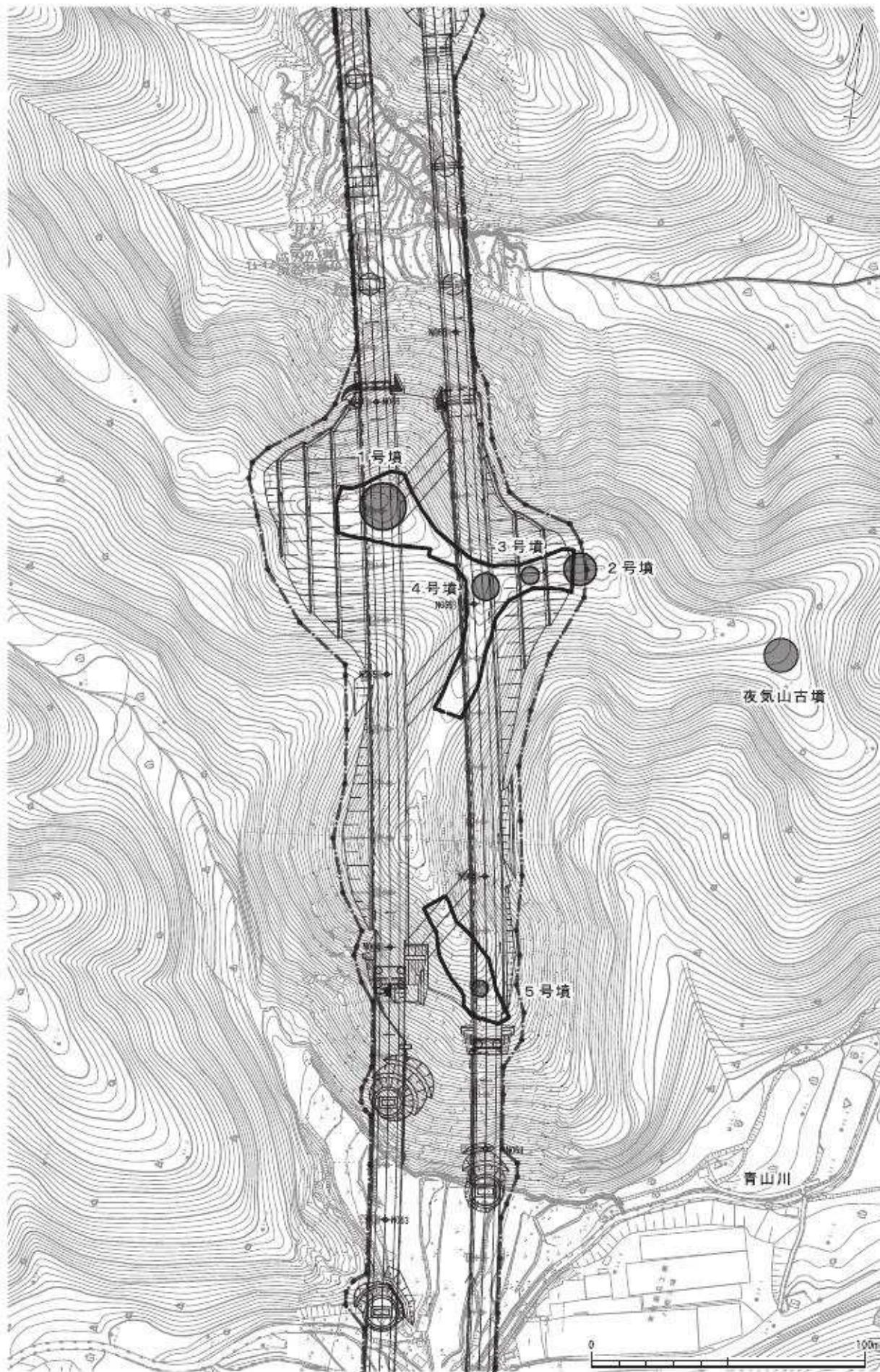
註

- (1) 但馬地域では他に、ケゴヤ古墳(豊岡市)の子持器台がある。
- (2) 福永伸哉1992「近畿地方の小竪穴式石室—長法寺南原古墳前方部小石室の意義をめぐって—」『長法寺南原古墳の研究』(大阪大学文学部考古学研究報告第2冊) 大阪大学南原古墳調査団
- (3) 岸本一宏2008「9号墳埋葬施設の名称」『芝花弥生墓群・古墳群』(兵庫県文化財調査報告第345冊) 兵庫県教育委員会
- (4) 萩木信雄1981「一墳丘二石室の古墳をめぐって」『よみがえる古代の但馬』但馬考古学研究会
この報告の中では「みの柿山古墳」となっているが、現在の『兵庫県遺跡地図』では「南ホウキ3号墳(遺跡番号611416)」として登録されている。

参考文献

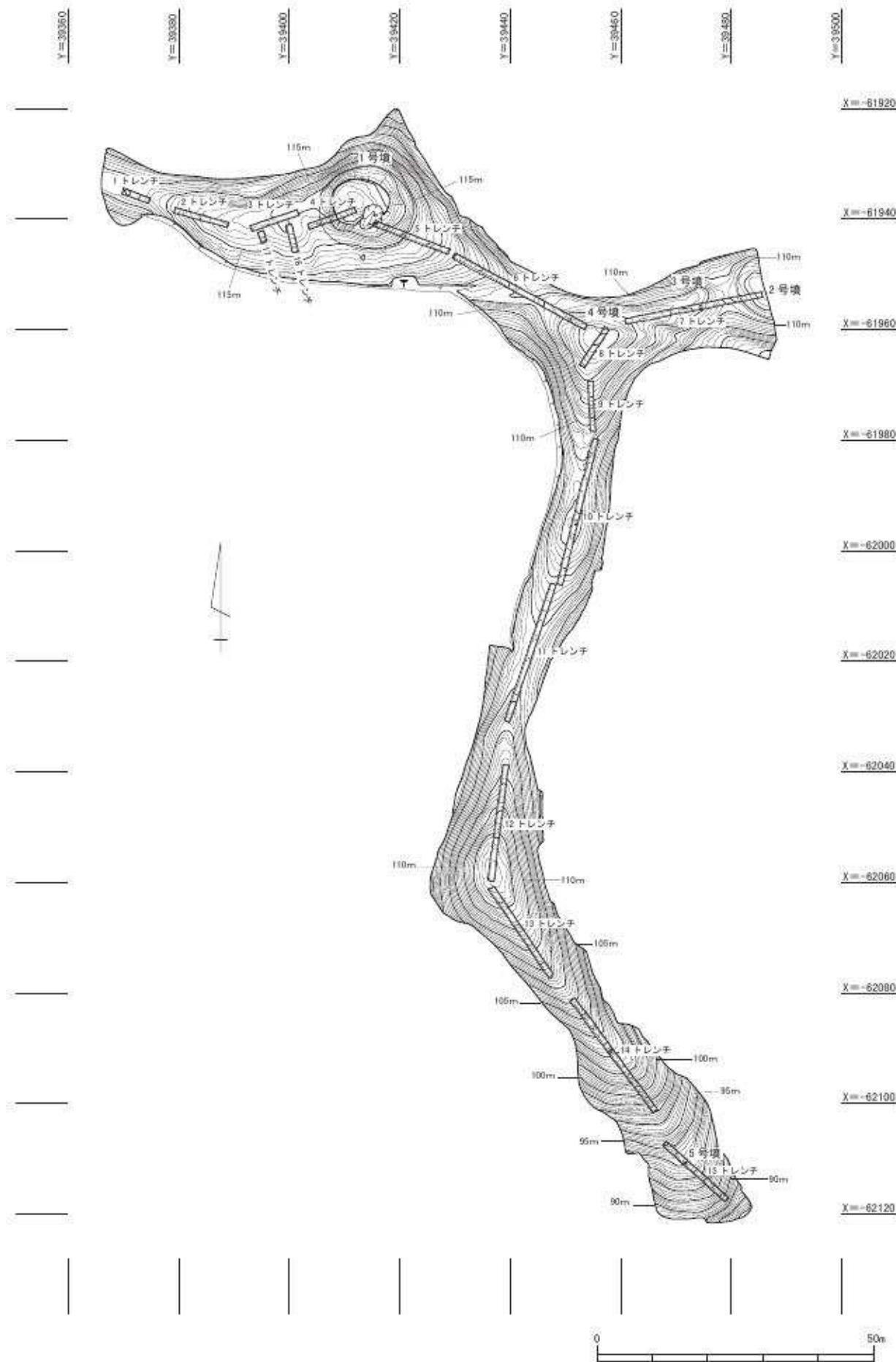
- 井守徳男2002「兵庫県出土の装飾付須恵器集成(1)—加古川流域—」『田辺昭三先生古希記念論文集』田辺昭三先生古希記念の会
- 井守徳男2003「兵庫県出土の装飾付須恵器集成(2)—播磨明石郡及び揖津・但馬—」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 井守徳男2005「兵庫県出土の装飾付須恵器集成(3)—西播磨地域・補遺—」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第4号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 岡田務1987『尼崎市中ノ田遺跡II(大塚山古墳を中心に)』尼崎市教育委員会
- 金津匡伸2005『赤坂古墳群第1号墳—発掘調査・整備保存事業報告書』但東町教育委員会
- 口野博史・山本雅和2001『松野遺跡発掘調査報告書 第3~7次調査』神戸市教育委員会
- 瀬戸谷暗ほか1987『北浦古墳群・立石墳墓群』豊岡市教育委員会
- 多賀茂治ほか2005『火山古墳群 火山城跡 火山遺跡』(兵庫県文化財調査報告第283冊) 兵庫県教育委員会
- 高島信之・潮崎誠1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書1』三田市教育委員会
- 谷本進1993『6世紀の墓制からみた宿南びくに古墳』『但馬考古学』第7集 但馬考古学研究会
- 中村典男1992『長者ヶ平1・2号墳』『兵庫県史』考古資料編 兵庫県(1)
- 仁尾一人ほか2003『梅田古墳群II』(兵庫県文化財調査報告第257冊) 兵庫県教育委員会
- 八賀晋1982『西宮山古墳の出土遺物』『京都国立博物館蔵 富雄丸山古墳 西宮山古墳出土遺物』京都国立博物館
- 深井明比古1978『秋葉山3号墳の調査』『秋葉山墳墓群』和田山町教育委員会
- 山田清朝2016『上佐野1号墳』(兵庫県文化財調査報告第480冊) 兵庫県教育委員会
- 山根実生子1994『地元に残る遺物』『徹底討論 大蔵古墳群』但馬考古学研究会編・養父町教育委員会刊

図 版



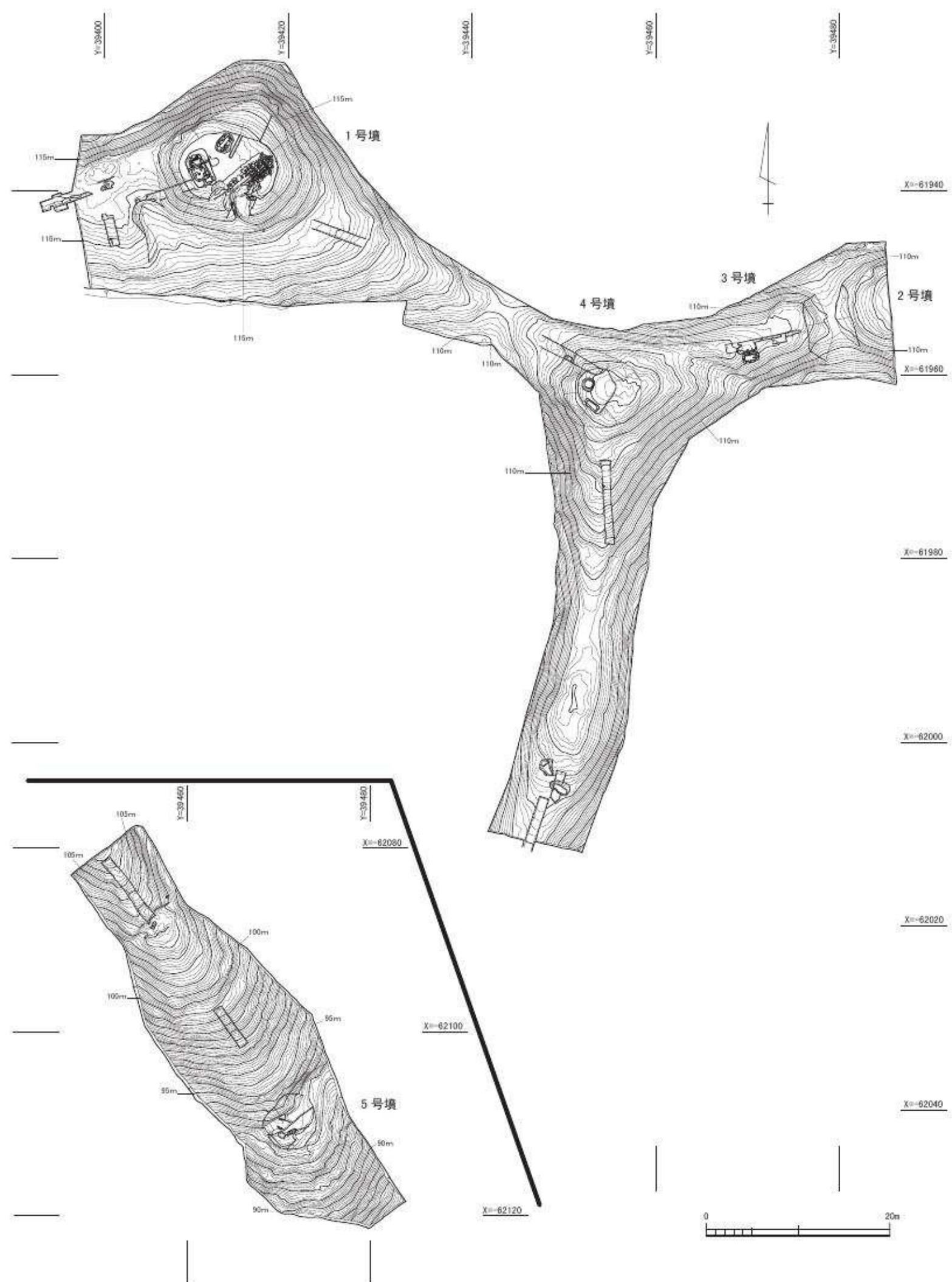
図版2

1～5号墳調査前地形図



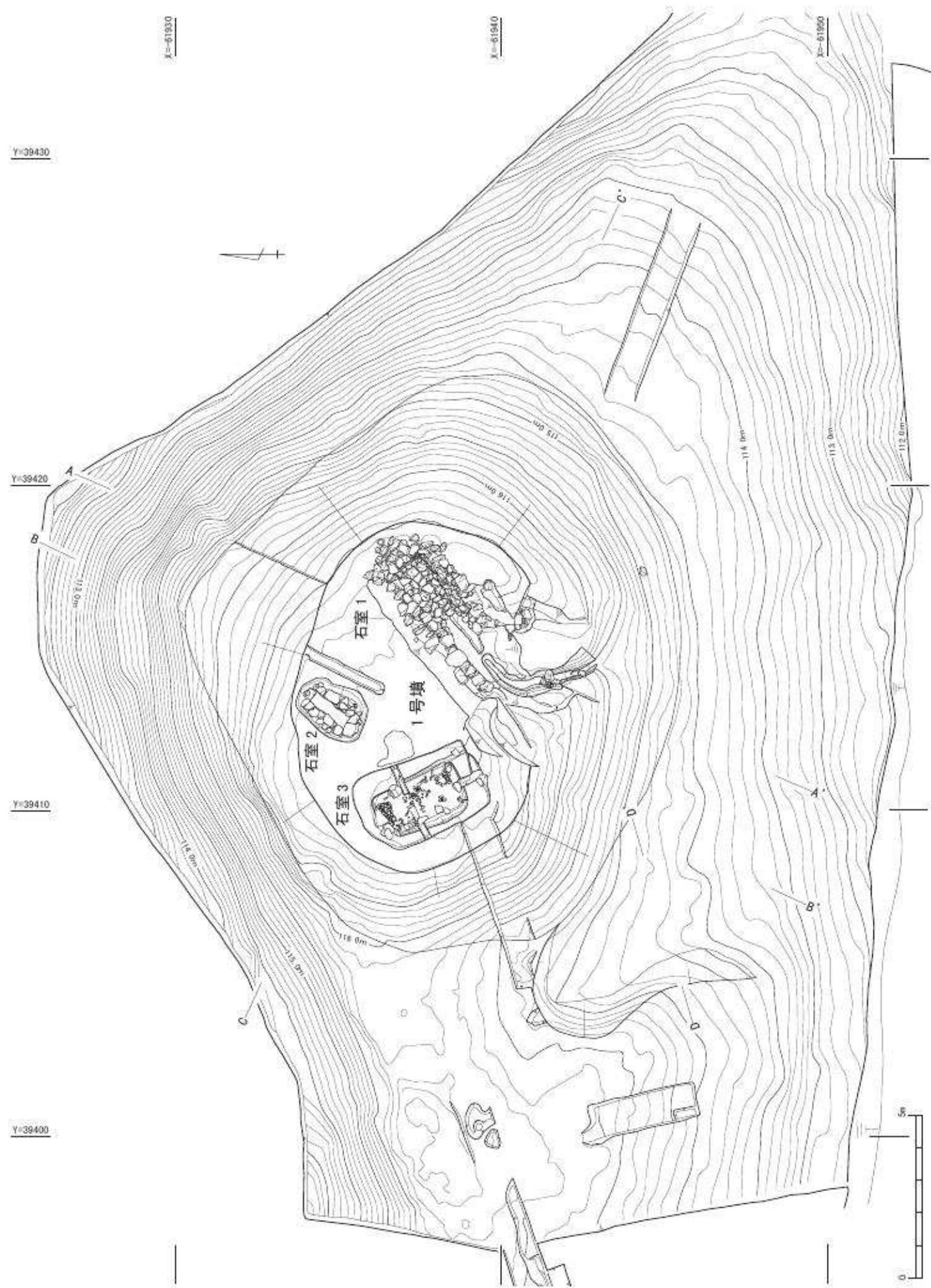
1～5号墳調査後地形図

図版3



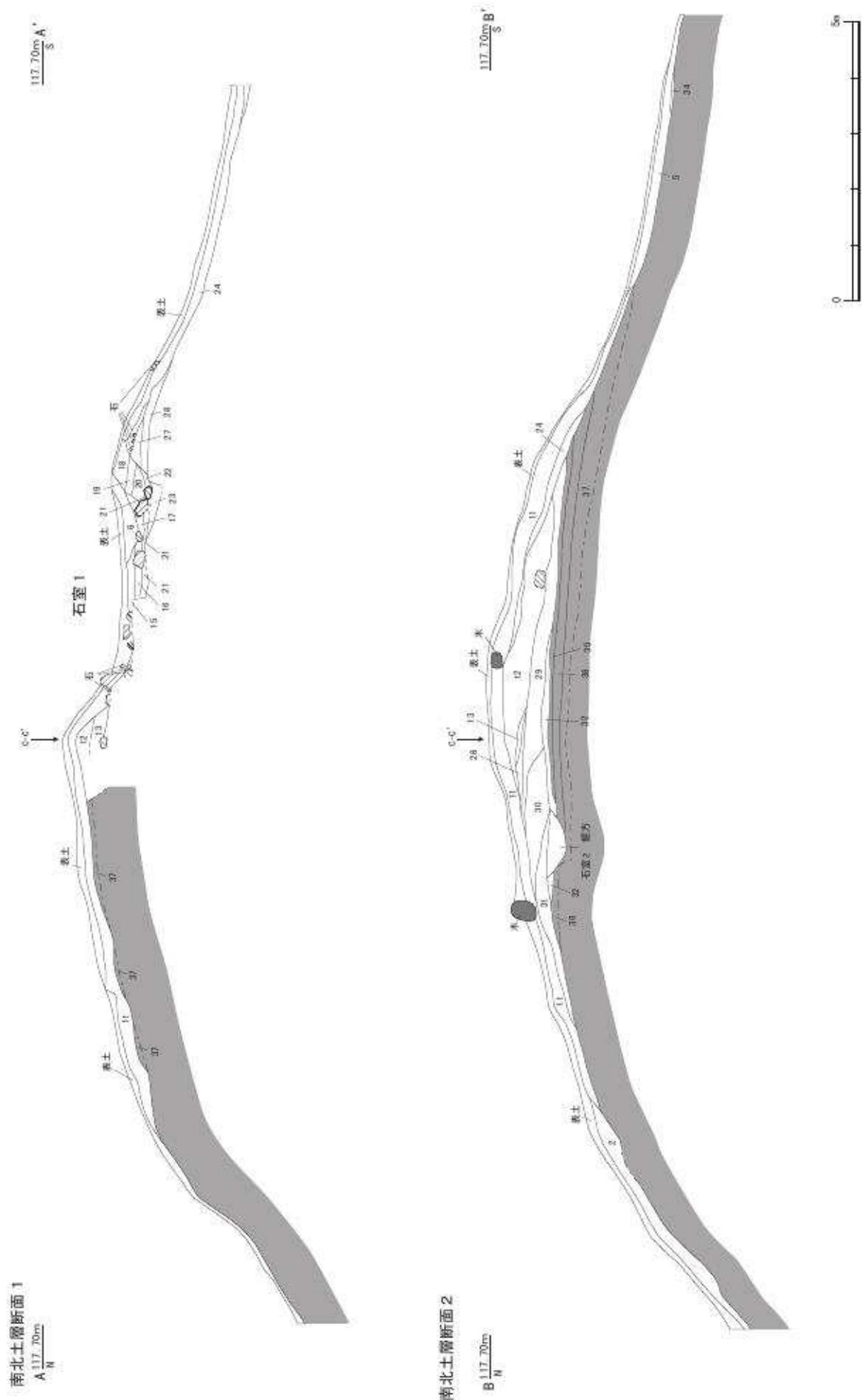
図版 4

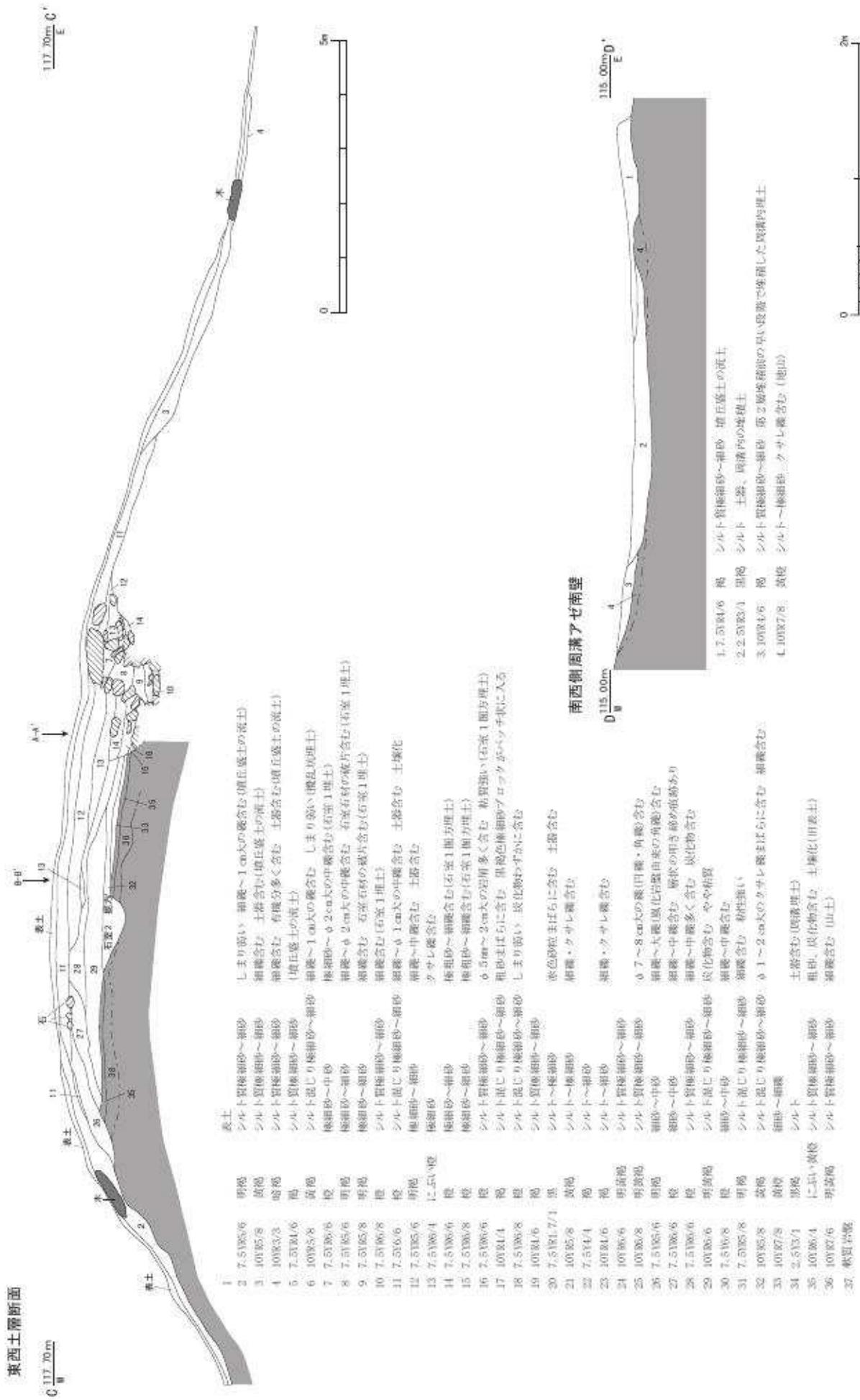
1号墳全体図



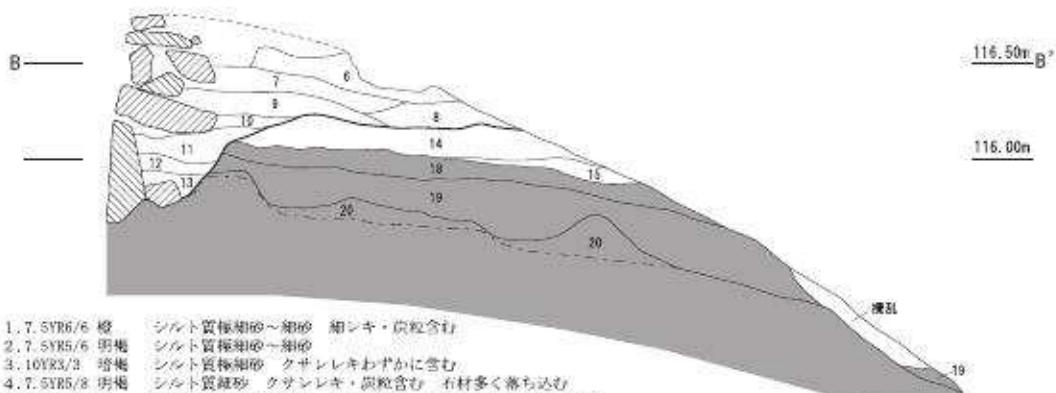
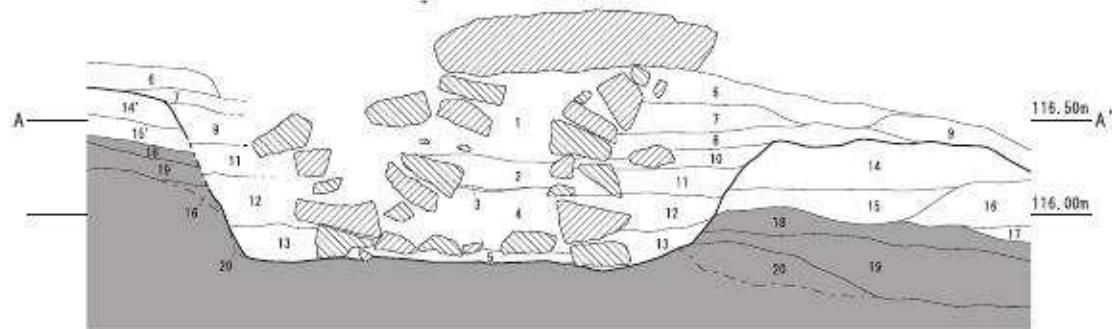
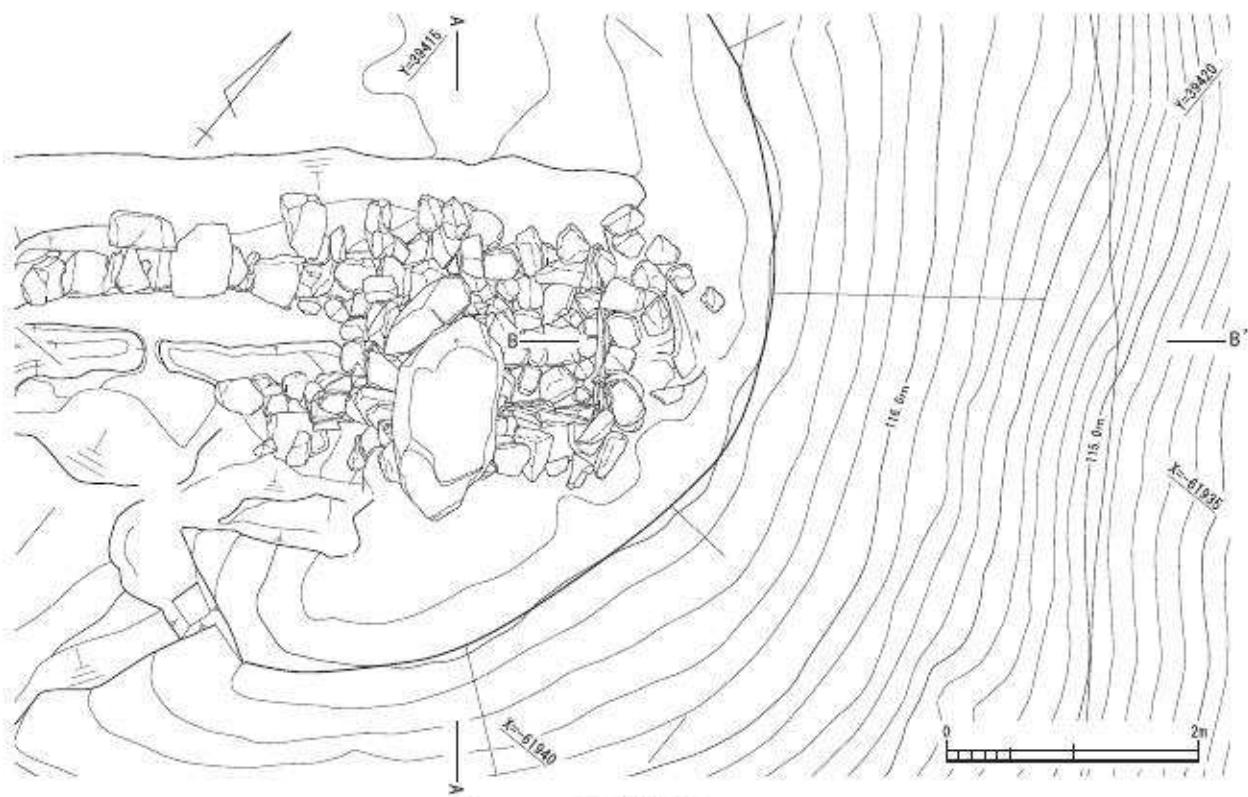
1号墳墳丘断面図（1）

図版5



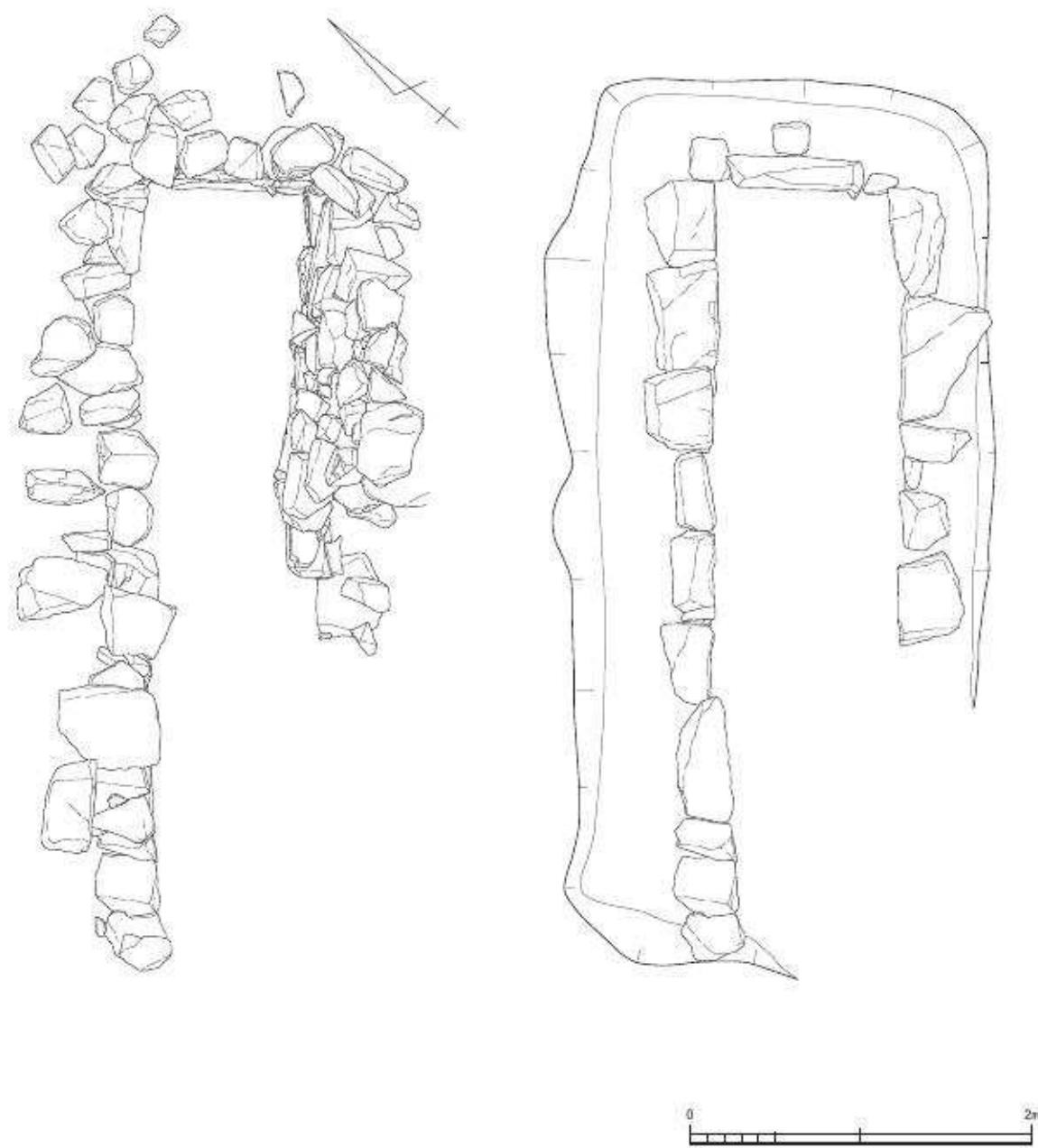


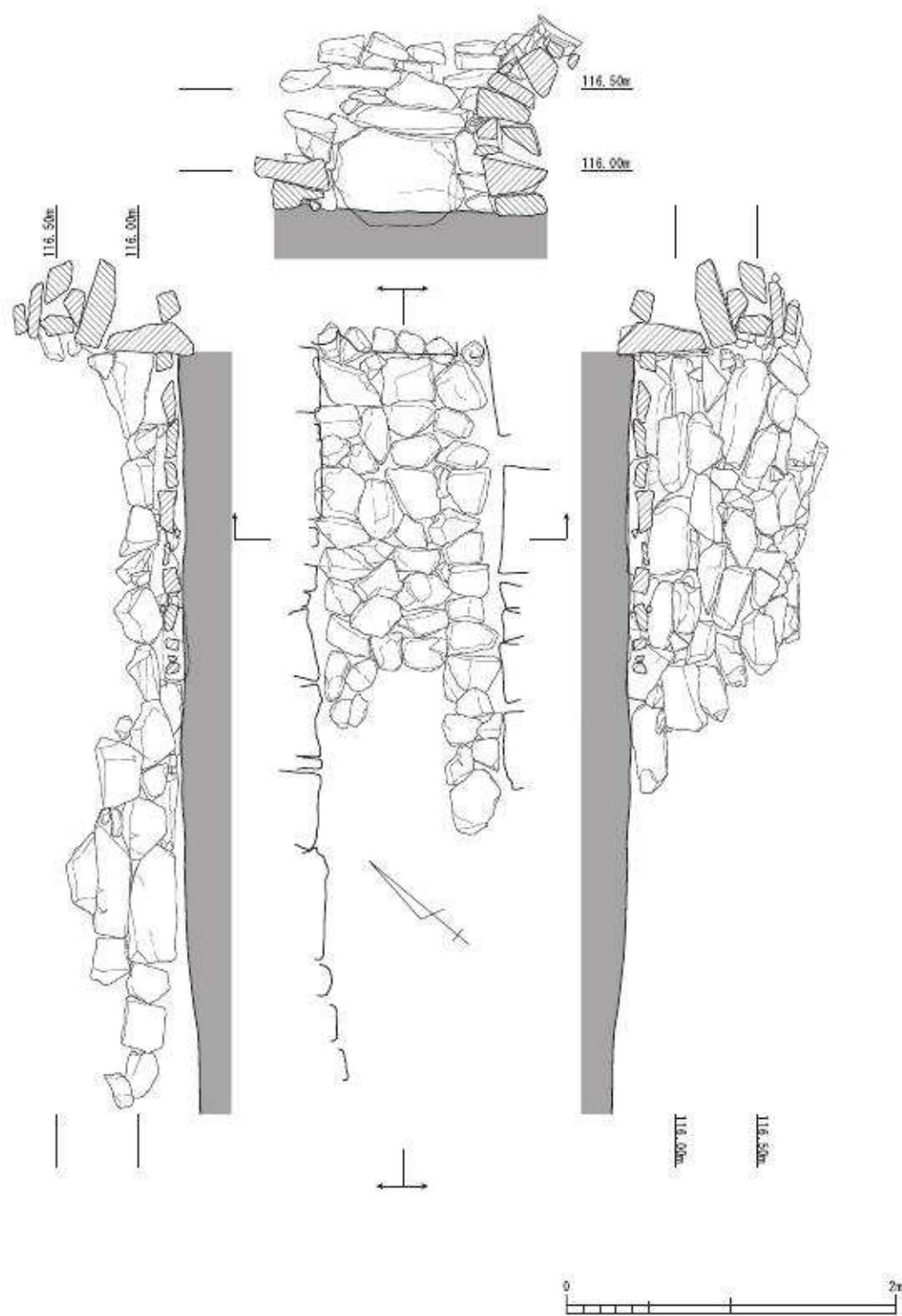
1号墳石室 1平面図・断面図

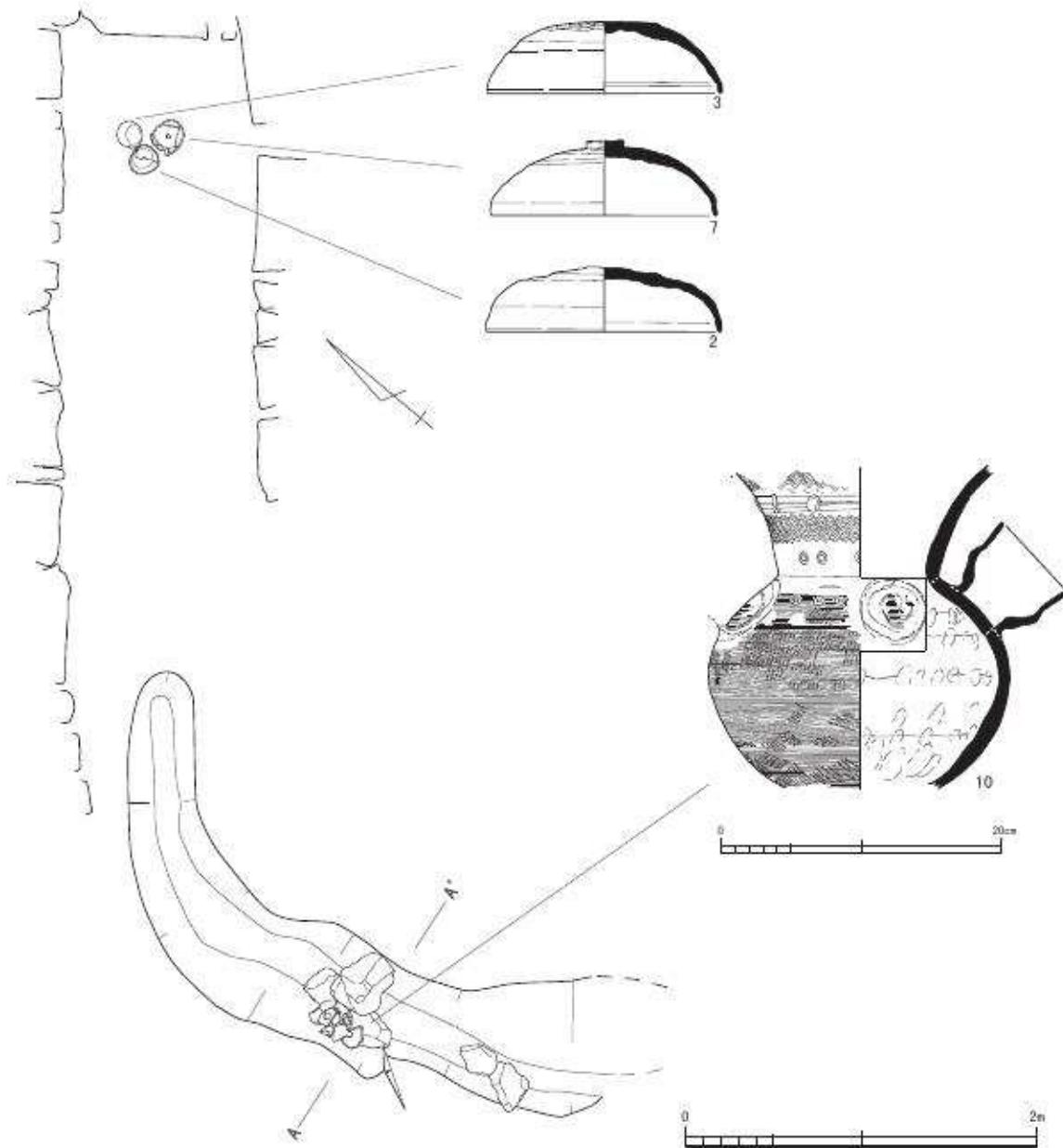


1. 7. SYR6/6 横 シルト質極細砂～細砂 細シキ・炭粒含む
 2. 7. SYR5/6 男堀 シルト質極細砂～細砂
 3. 10YR3/1 塔堀 シルト質極細砂 クサレレキわずかに含む
 4. 7. SYR5/8 男堀 シルト質極細砂 クサレレキ・炭粒含む 石材多く落ち込む
 5. 7. SYR6/8 横 シルト質極細砂～細砂 細シキ含む (礎床設置のための整地土)
 6. 7. SYR6/8 横 シルト混じり極細砂～細砂 蝋粒含む (底土)
 7. 10YR6/6 男黄堀 極細砂 欧賀岩盤ブロック含む (盛土)
 8. 7. SYR7/8 黄堀 シルト混じり極細砂～細砂 欧賀岩盤ブロック・炭粒含む (盛土)
 9. 7. SYR6/8 横 シルト混じり極細砂 欧賀岩盤ブロック多く含む 炭粒含む (盛土)
 10. 7. SYR6/6 男堀 シルト混じり極細砂～細砂 欧賀岩盤ブロック含む (掘り方理土)
 11. 7. SYR6/8 横 地盤砂～細砂 欧賀岩盤ブロック含む 炭粒含む (掘り方理土)
 12. 10YR6/8 男黄堀 地盤砂～細砂 欧賀岩盤ブロック多く含む 炭粒わずかに含む ± 1～3cm のクサレレキ (埋土)
 13. 10YR7/8 黄堀 シルト混じり極細砂～細砂 欧賀岩盤ブロックわずかに含む 炭粒含む (理土)
 14. 10YR7/8 黄堀 シルト混じり極細砂 欧賀岩盤ブロック含む 炭粒含む 細シキ含む (古い盛土)
 14'. 10YR5/8 黄堀 シルト混じり極細砂～細砂 細レキ含む ± 1～2cm 大のクサレレキ少含む
 15. 10YR5/6 男堀 シルト混じり極細砂～細砂 (崩壊による盛土)
 15'. 10YR7/8 黄堀 細砂～粗シキ (崩壊による盛土)
 16. 10YR5/8 黄堀 シルト質極細砂 細シキわずかに含む
 17. 10YR7/6 男黄堀 シルト質極細砂～細砂 細シキ含む
 18. 10YR6/4 にぶい 黄堀 シルト混じり極細砂～細砂 細レキ含む ± 1 (非表土)
 19. 7. SYR6/6 横 地盤砂 細レキ含む (山土)
 20. 灰化骨盤

0 2m

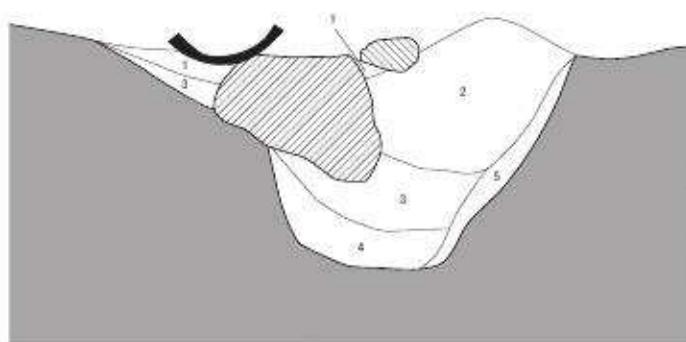






A—

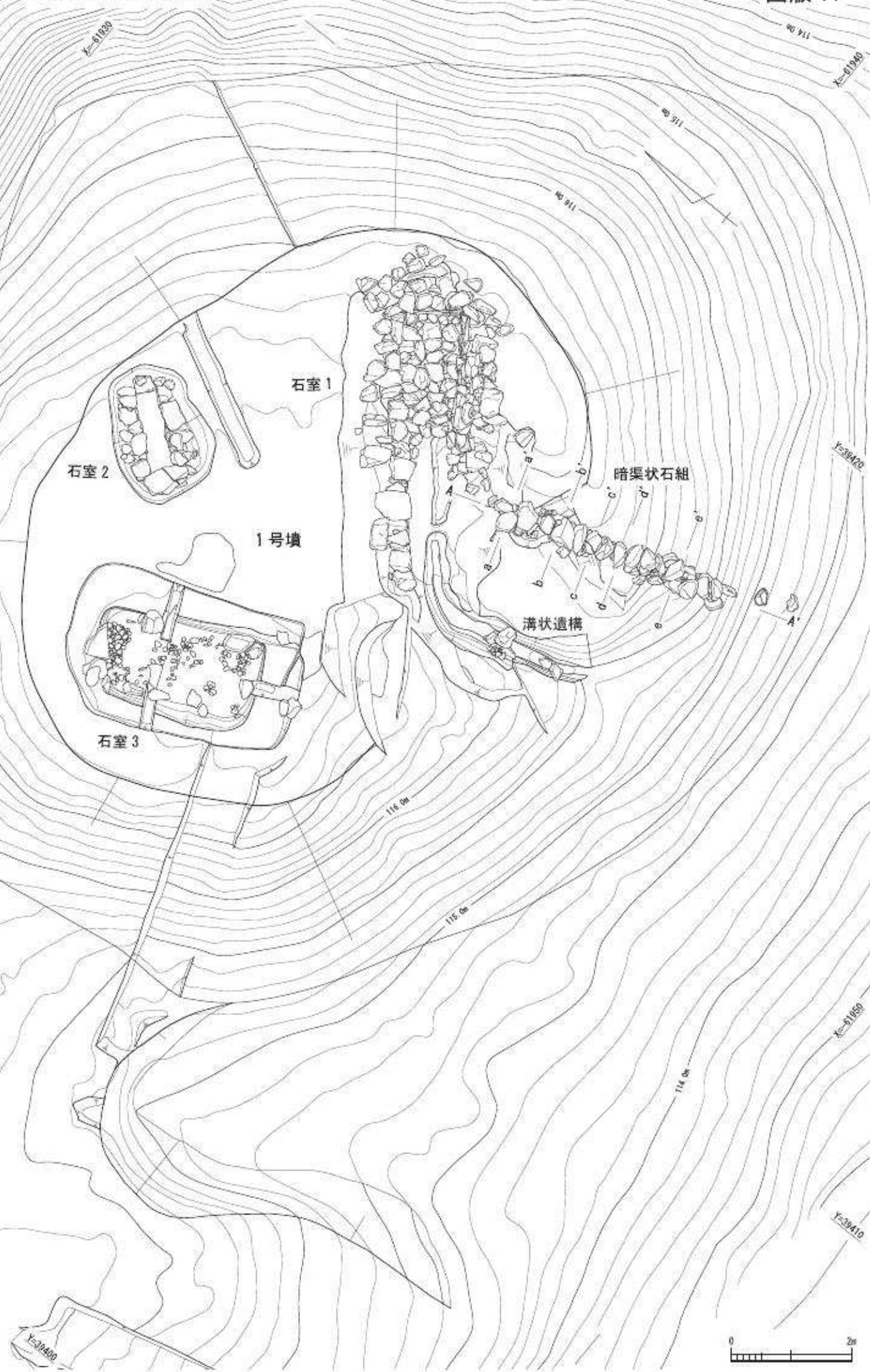
116.00m A'

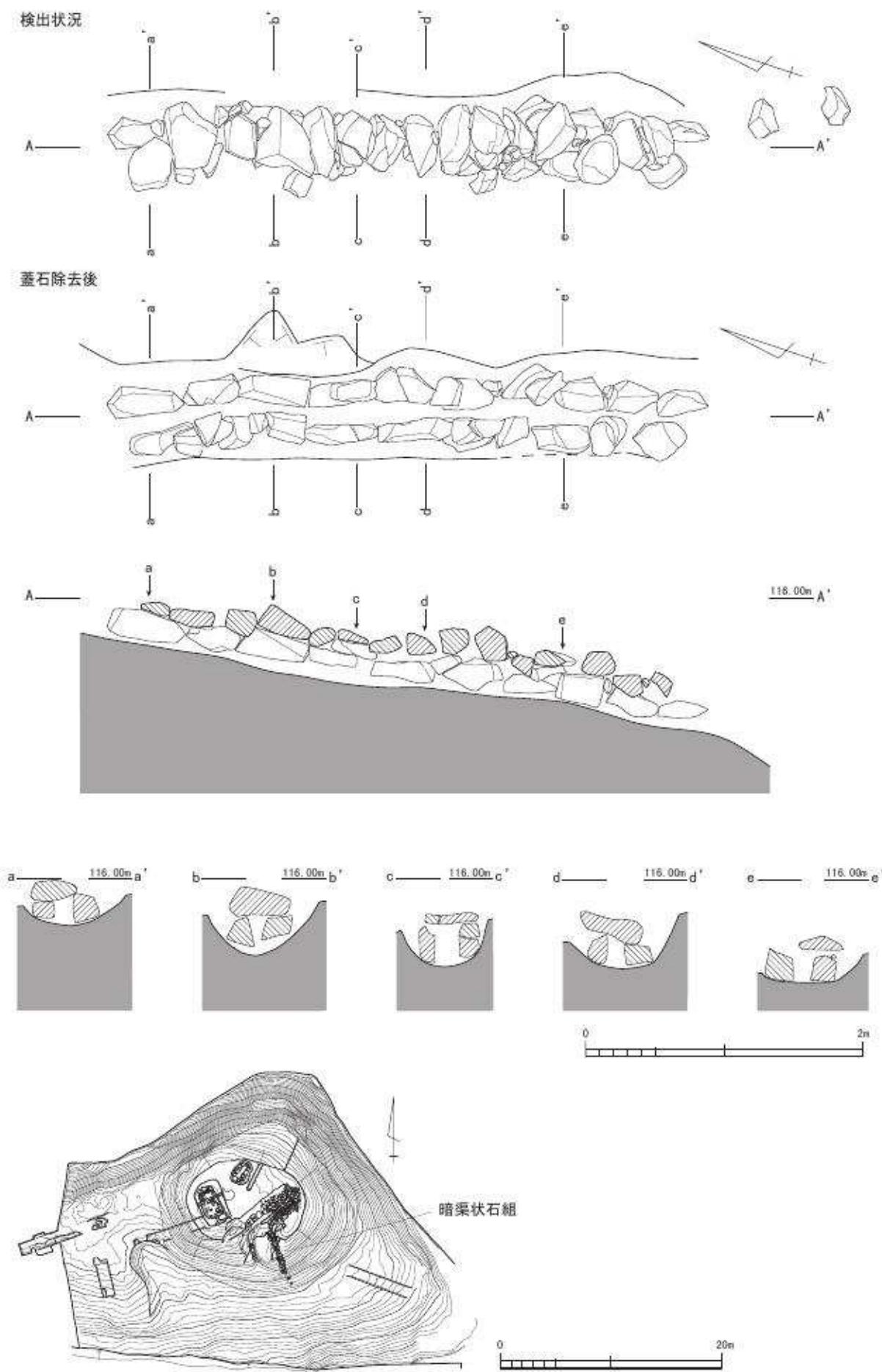


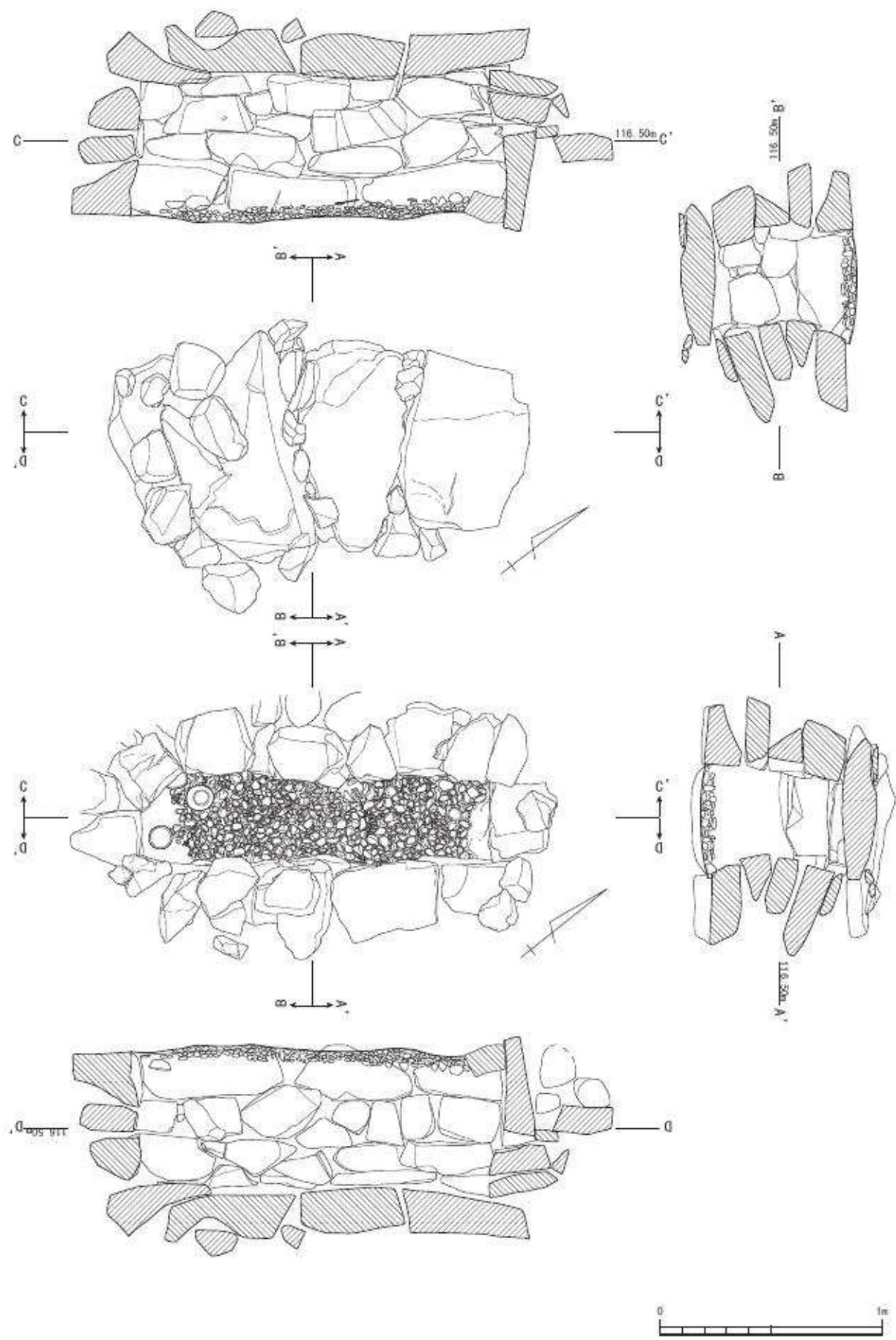
- 1. 7.5YR1.7/1 黒 シルト～細砂 土器 赤色粒まばらに含む
- 2. 10YR5/8 黄褐色 シルト～細砂 細レキ クサレレキ含む
- 3. 7.5Y4/4 深 シルト～細砂
- 4. 10YR4/6 深 シルト～細砂 細レキ クサレレキ含む
- 5. 10YR5/6 黄褐色 シルト～細砂 クサレレキ含む

0 50cm

1号墳墳丘上の遺構







西側壁

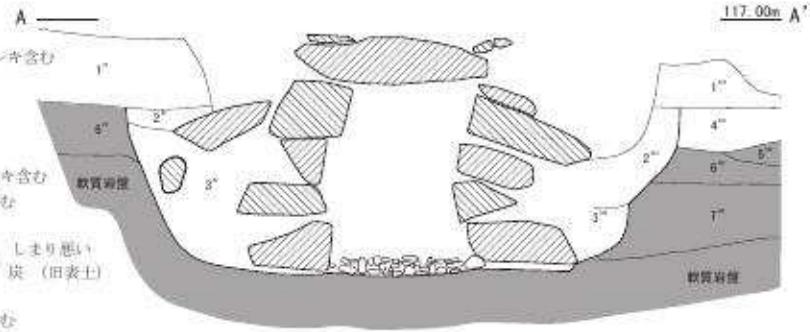
- 1". 103B6/6 明黄褐色 シルト混じり極細砂～細砂
　　細レキ クサレレキ含む
- 2". 7. 5VR5/6 明褐色 混砂混じりシルト
- 3". 7. 5VR6/8 橙 シルト質極細砂～細砂 クサレレキ含む
- 6". 7. 5VR6/9 橙 シルト クサレレキ少量含む

東側壁

- 1". 7. 5VR6/6 橙 シルト混じり極細砂～細砂
　　クサレレキ多く含む
- 2". 7. 5VR7/6 橙 細レキ混じりシルト クサレレキ含む
- 3". 7. 5VR6/8 橙 細砂混じりシルト 細レキ含む
- 4". 7. 5VR6/4 にふい橙 細砂～細レキ
　　クサレレキ多く含む しまり悪い
- 5". 7. 5VR5/4 にふい褐 シルト質極細砂 soil 塵 (田表土)
- 6". 7. 5VR5/8 明褐色 シルト
- 7". 7. 5VR5/6 明褐色 シルト クサレレキ少量含む

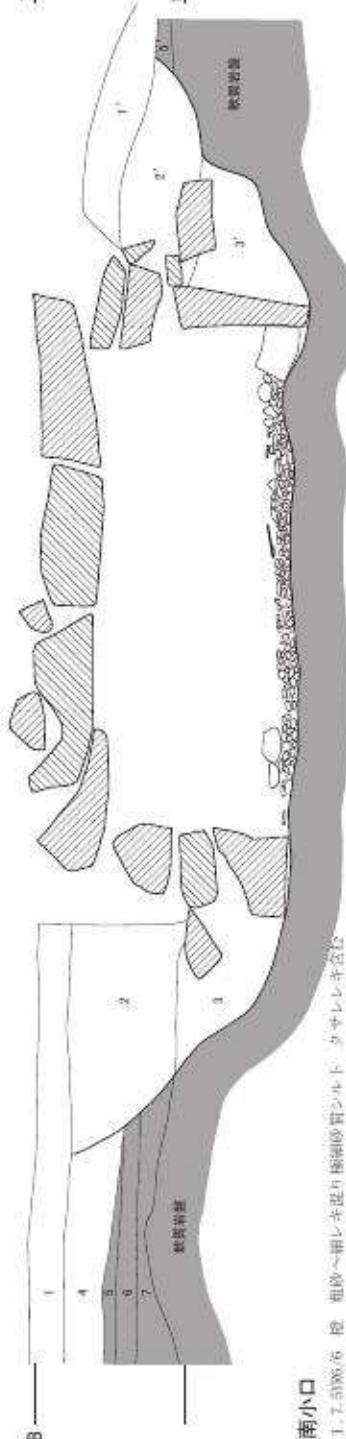
117.00m B

116.50m



117.00m B

116.50m

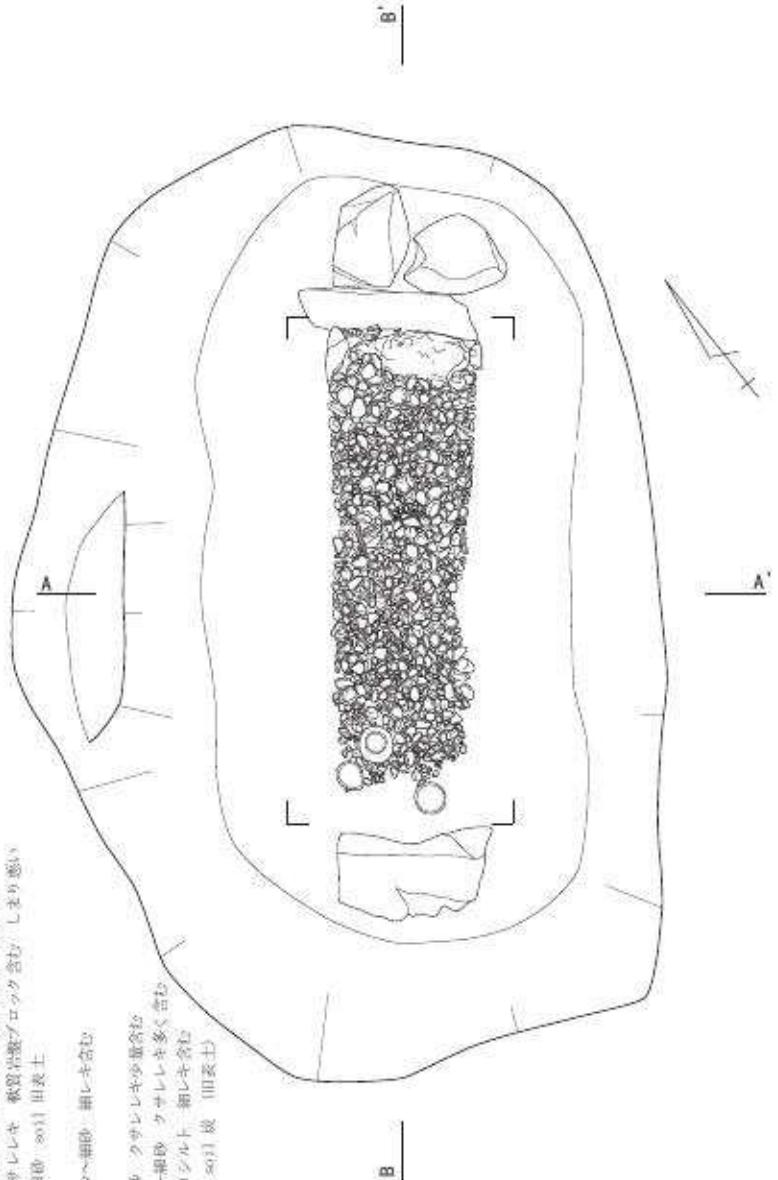


南小口

1. 7. 5VR6/6 橙 粗砂～細レキ混じり極細砂質シルト クサレレキ含む
2. 3VR6/8 明黄褐色 シルト混じり極細砂～細砂
3. 10VR6/6 明黄褐色 シルト質極細砂～細砂 クサレレキ含む
4. 7. 5VR6/8 橙 粗砂～細レキ クサレレキ
5. 10VR6/4 にふい褐色 極細砂～細砂 soil 田表土
6. 7. 5VR6/6 橙 シルト質極細砂
7. 10VR7/6 明黃褐色 シルト質極細砂～細砂 細レキ含む

北小口

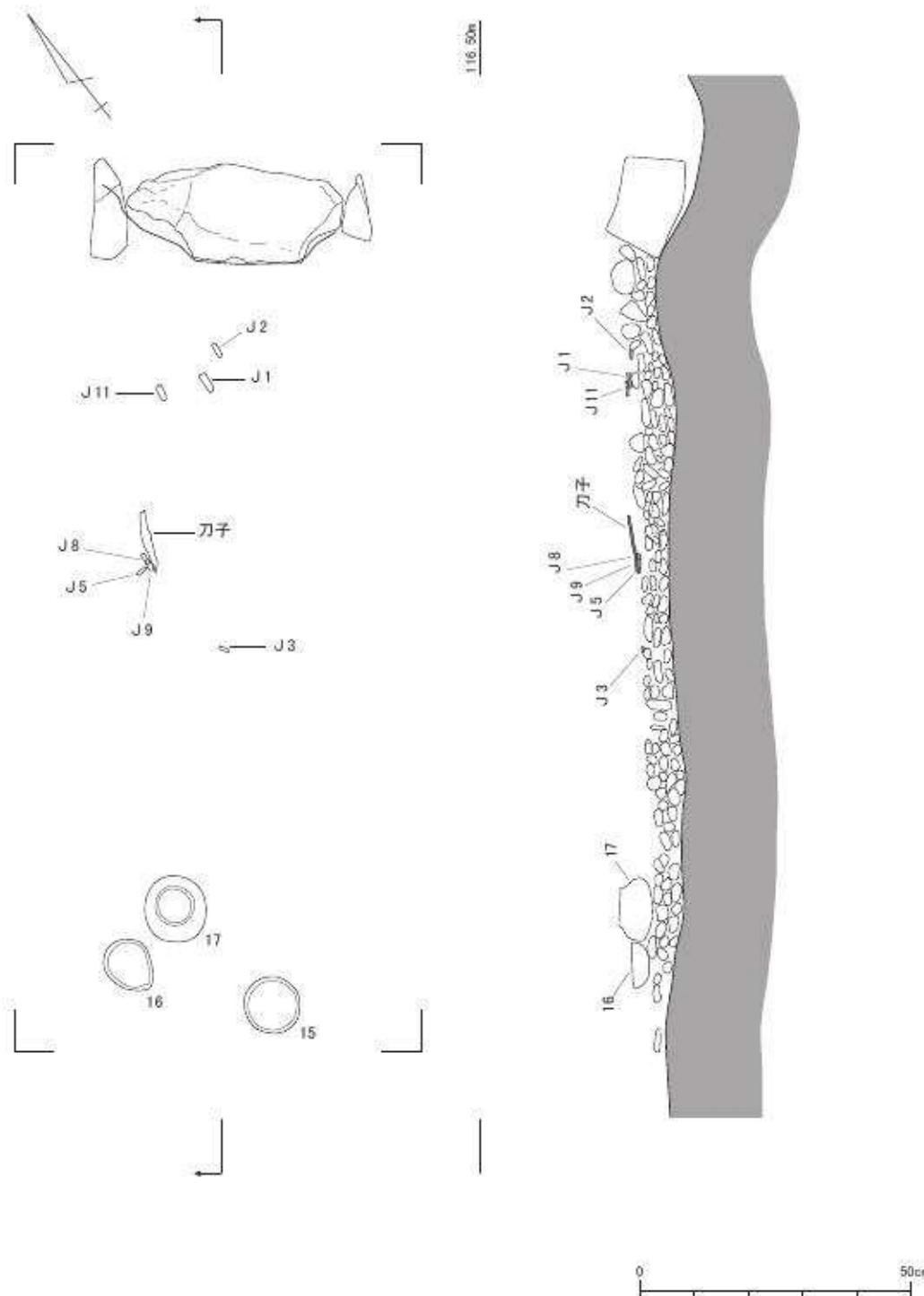
1. 7. 5VR6/8 明褐色 シルト質極細砂 クサレレキ少量含む
2. 7. 5VR6/8 橙 シルト質極細砂～細砂 クサレレキ多く含む
3. 7. 5VR6/6 橙 粗砂～細砂混じりシルト 細レキ含む
5. 7. 5VR6/6 橙 シルト質極細砂

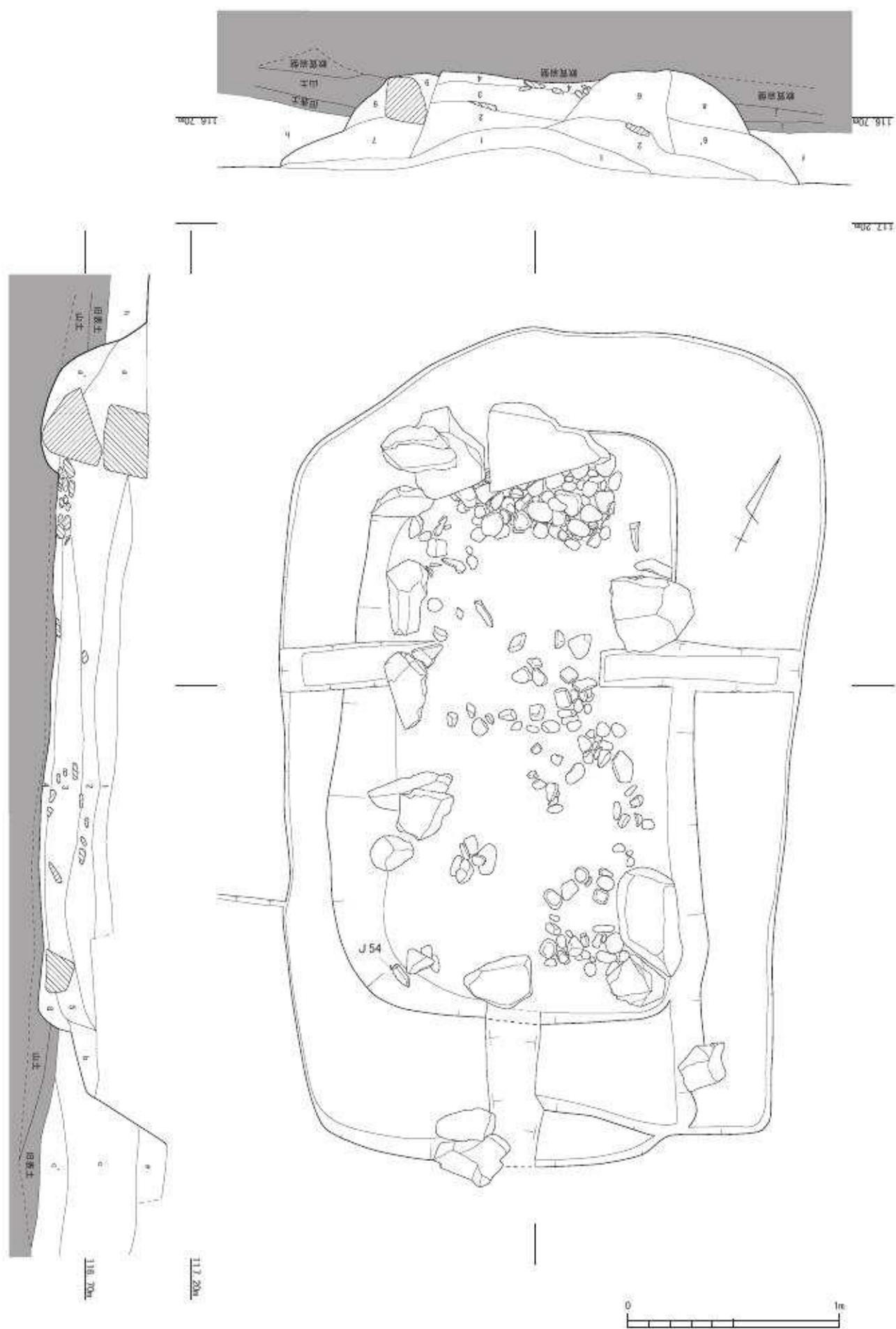


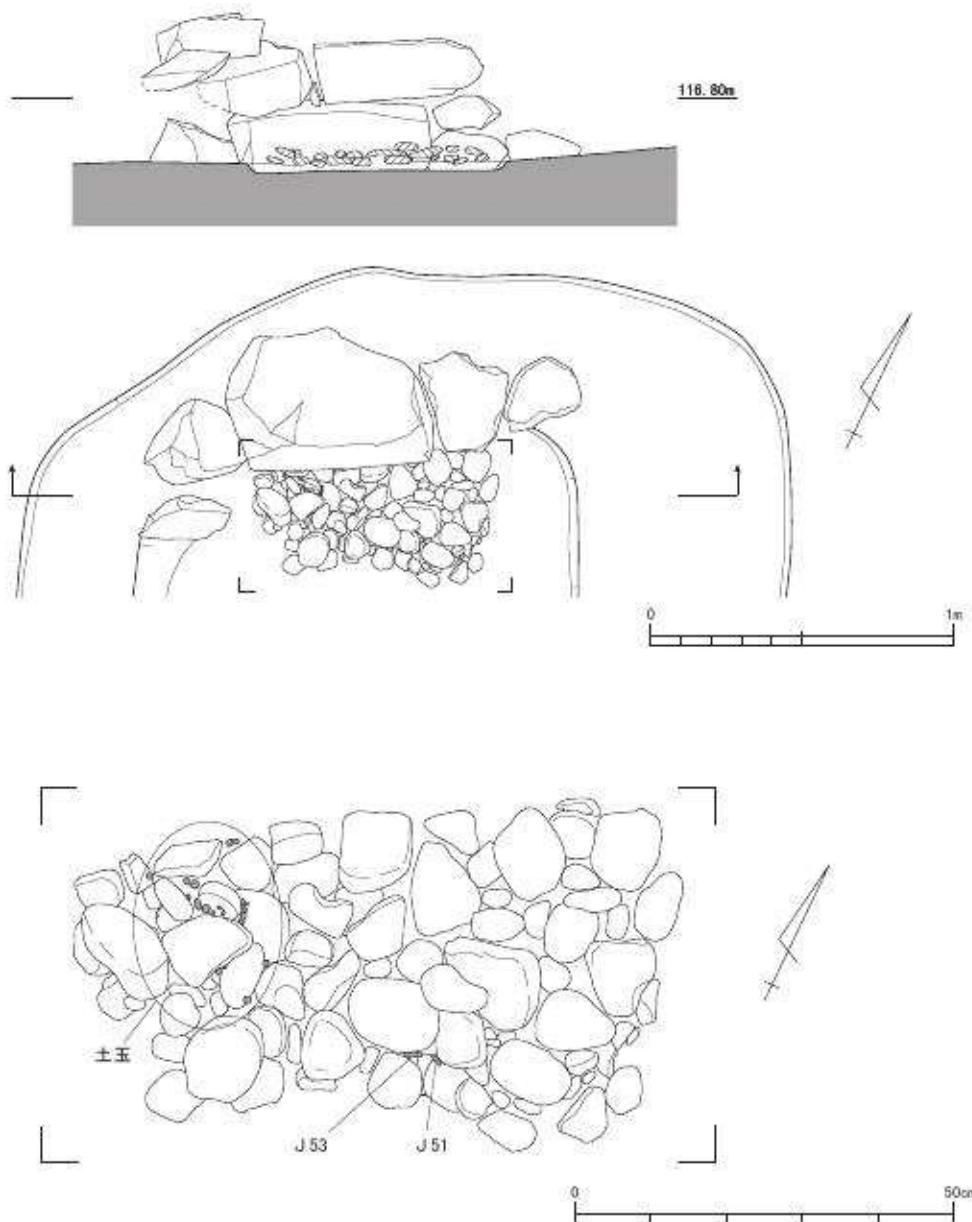
B

0

1m



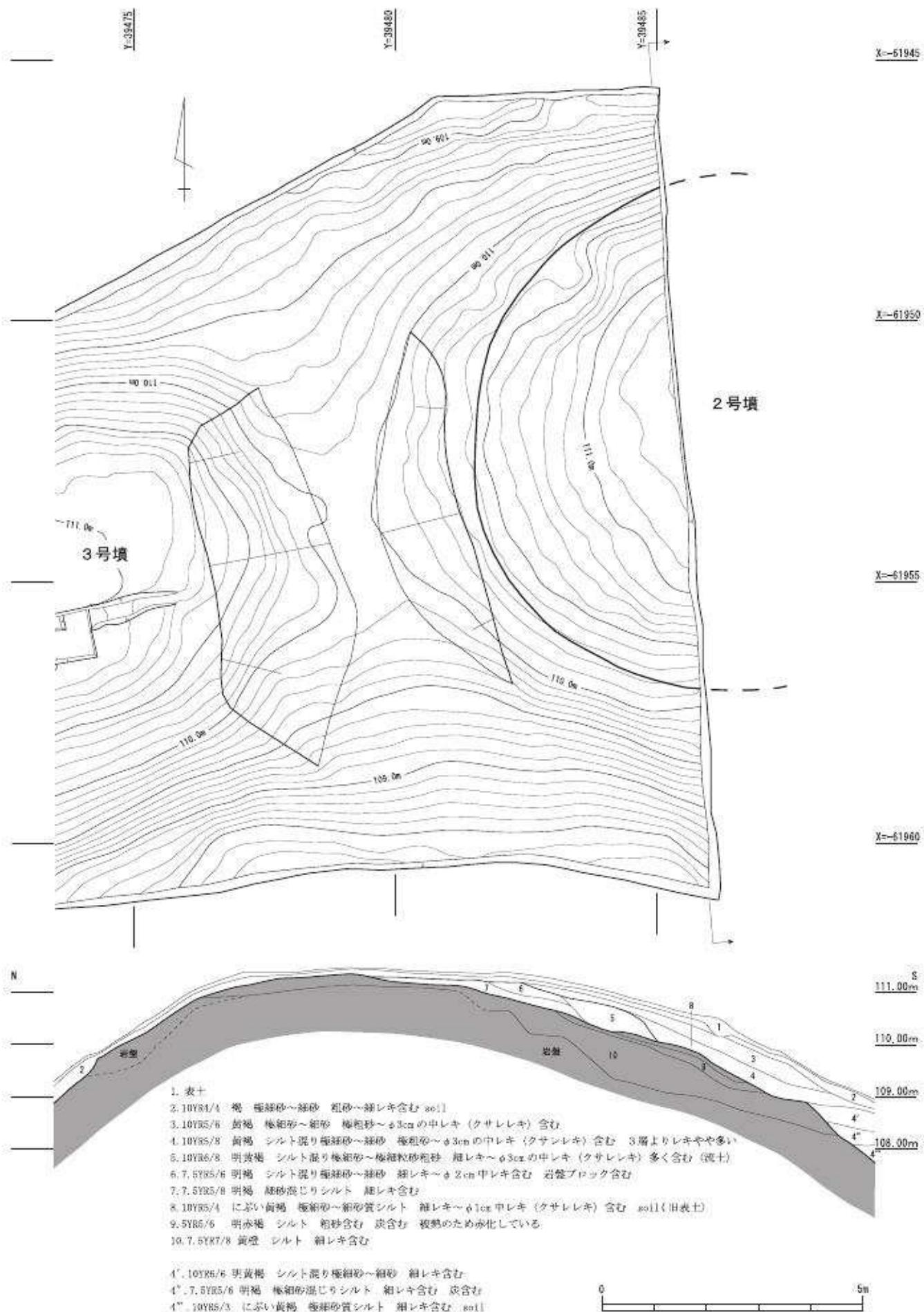


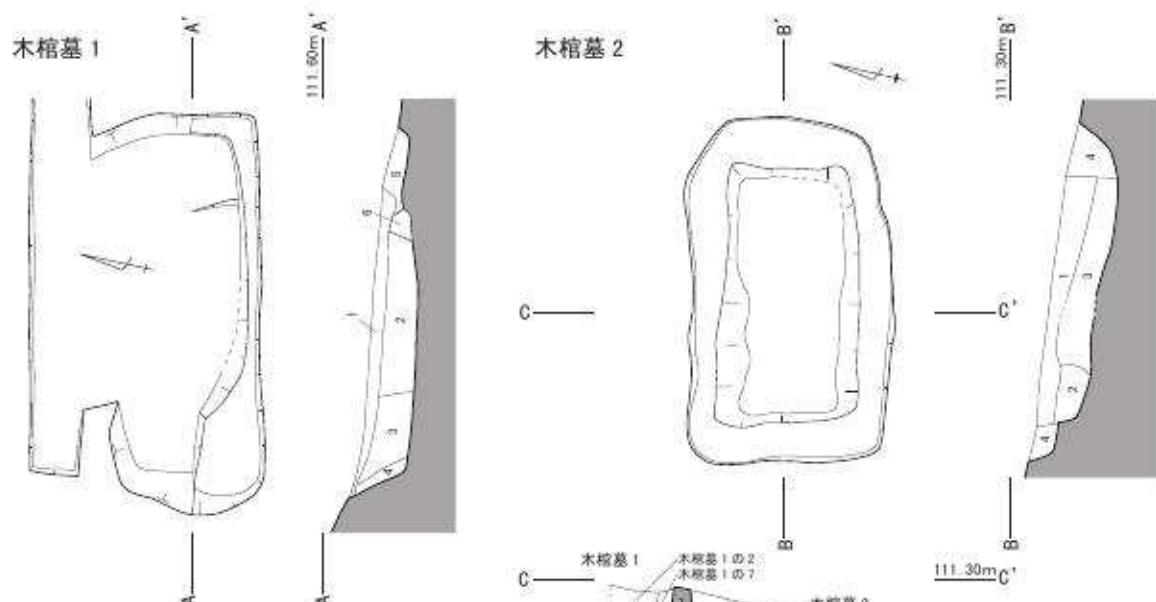
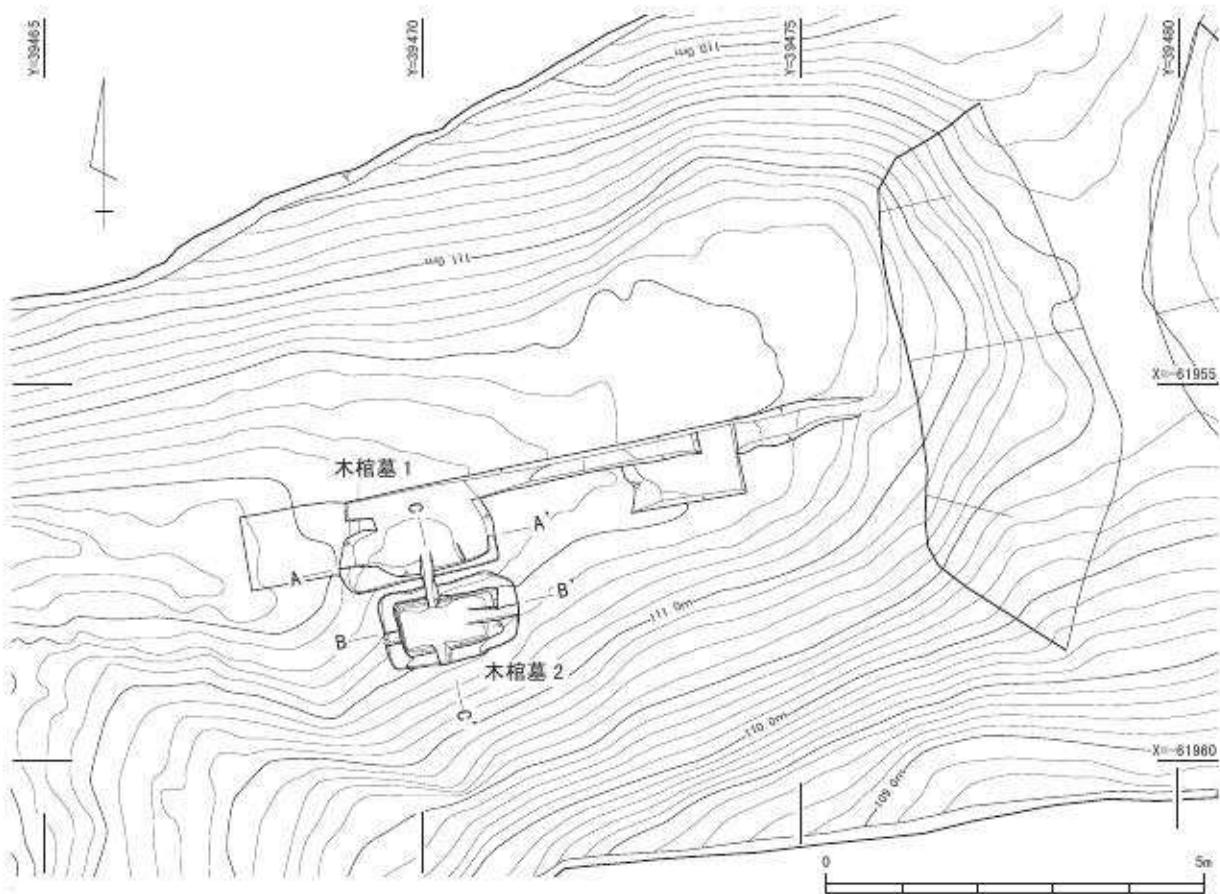


1号墳石室3 断面図

- a. 7.5VR6/6 横 極細砂～細レキ 塗化岩壁含む
 - a'. 10VR6/8 明黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂～細レキ含む
 - b. 10VR5/6 黄褐 極細砂～細砂 細レキ含む
 - c. 10VR6/8 明黄褐 極細砂質シルト～中砂 細レキ含む
 - c'. 7.5VR6/8 横 極細砂質シルト 粘性強い
 - d. 10VR5/8 黄褐 細砂～粗砂混じりシルト 細レキ含む
 - e. 7.5VR6/6 横 極細砂～粗砂 細レキ含む
 - f. 7.5VR6/8 横 極細砂～粗砂 細レキ、塗化岩壁含む
 - g. 7.5VR7/8 黄褐 シルト混じり極細砂～細砂 細レキ含む
 - h. 10VR6/6 明黄褐 極細砂～細砂 細レキ～中レキ（塗化岩壁）含む
 - i. 10VR5/6 明黄褐 極細砂質シルト 細レキわずかに含む
 - j. 10VR7/6 明黄褐 シルト
 - k. 7.5VR6/6 横 粗砂混じりシルト
- 旧表土, 10VR5/4 にぶい黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂わずかに含む soil
 山土, 7.5VR5/8 明褐 極細砂質シルト 粘性強い

- 1. 10VR6/6 明黄褐 極細砂～細砂 細レキ含む 木根による土壌化受ける
- 2. 10VR5/6 黄褐 シルト混じり極細砂～細砂 細レキ～中レキ含む 川原石が浮いた状態で入る
- 3. 10VR6/6 明黄褐 極細砂～細砂 細レキ～中レキ含む 川原石が撒乱した状態で入る 石材の破片含む
- 4. 10VR7/6 明黄褐 精緻高じりシルト 貼り床面
- 5. 10VR6/6 明黄褐 シルト混じり極細砂～細砂 細レキ～中レキ含む じまり悪い
- 6. 10VR5/8 黄褐 シルト混じり極細砂～細砂 細レキ～中レキ含む
- 6'. 7.5VR5/6 明褐 6と同じ
- 7. 10VR6/8 明黄褐 シルト質極細砂～粗砂 細レキ～中レキ含む
- 8. 7.5VR5/6 明褐 極細砂質シルト 細レキ少量含む
- 9. 10VR5/8 黄褐 極細砂～細砂

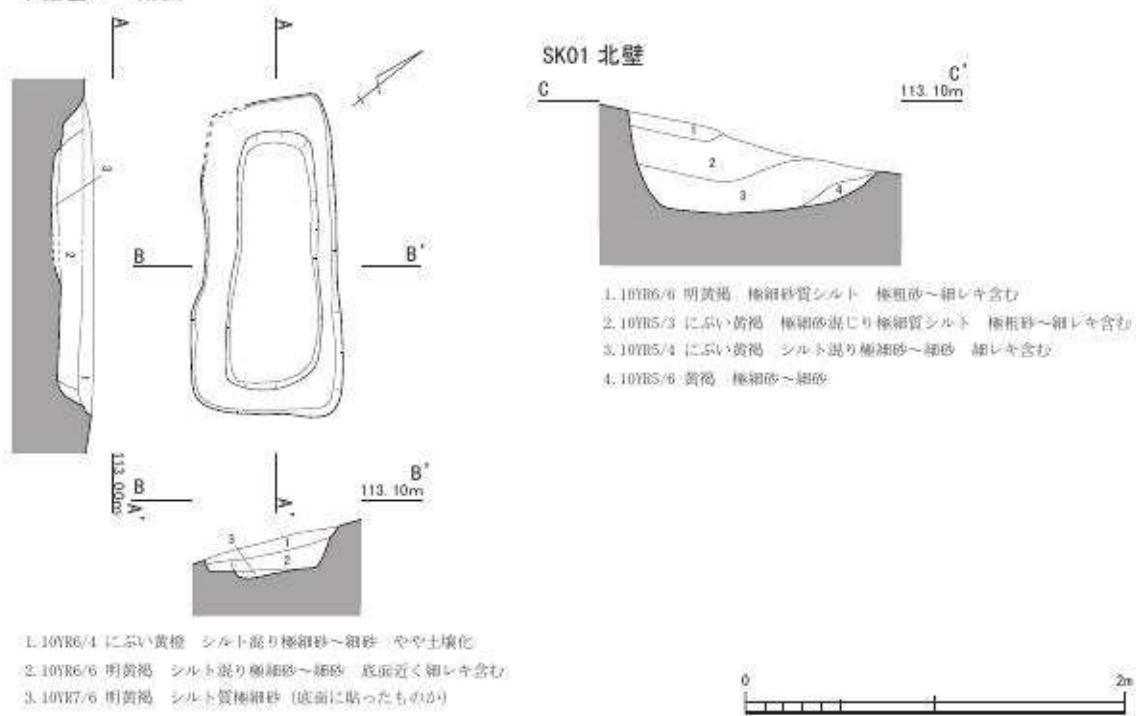


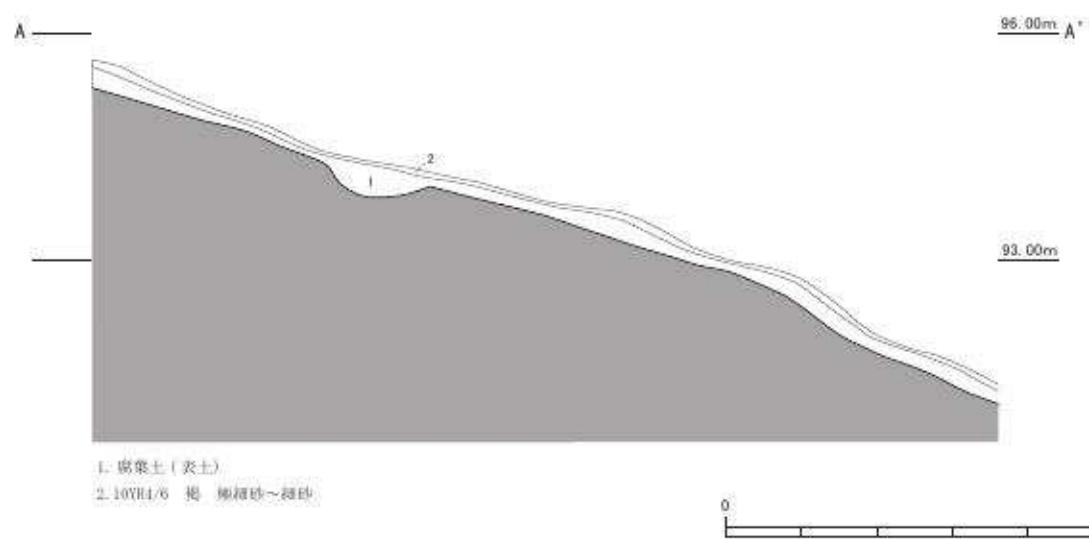
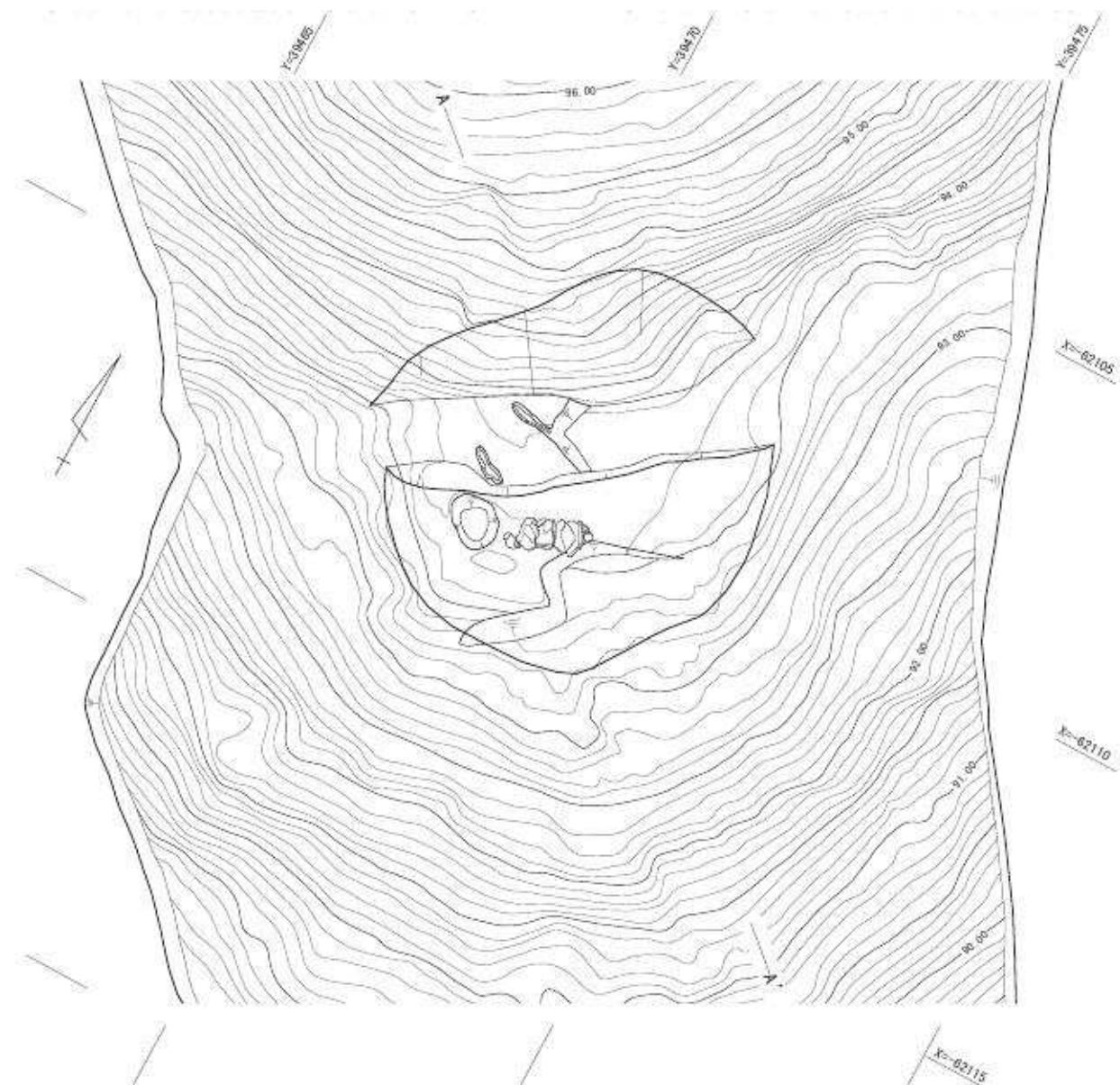


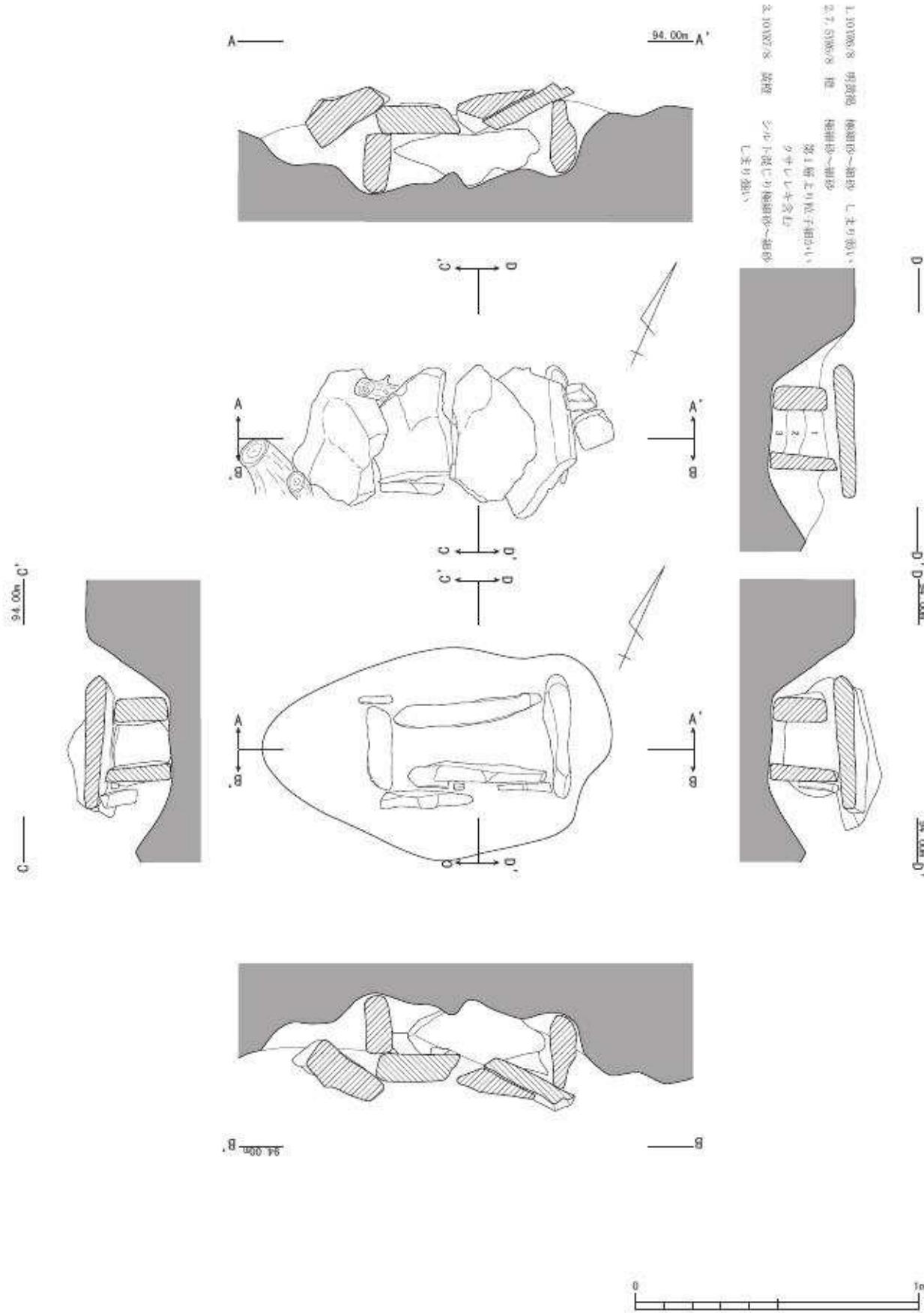
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細砂～細砂 細レキ～中レキ (風化岩盤) 含む
 2. 10YR4/2 灰黄褐色 極細砂～細砂 細レキ～中レキ (風化岩盤) 含む
 3. 10YR4/4 黄褐色 極細砂～細砂 岩屑多く含む (0.5～5cm)
 4. 10YR5/4 にぶい黄褐色 極細砂～細砂
 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 菊細砂～細砂 細レキ～中レキ (風化岩盤) 含む
 6. 10YR5/3 にぶい黄褐色 軟質岩盤の節理が露出
 7. 10YR4/6 黄褐色 極細砂～細砂 細レキ・岩屑少々 2cm 含む
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト混り極細砂～細砂 細レキ含む やや土壌化
 2. 10YR5/3 暗褐色 シルト混り極細砂～細砂
 3. 10YR4/4 黄褐色 極細砂～細砂 軟質岩盤のブロック含む
 4. 10YR1/6 黄褐色 極細砂～細砂混じシルト
 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色 極細砂～細砂 軟質岩盤のブロック含む
 6. 10YR1/4 黄褐色 極細砂～細砂 クサレレキ含む
 7. 10YR5/3 にぶい黄褐色 極細砂～中砂 クサレレキ含む
 8. 10YR5/6 黄褐色 細砂～中砂



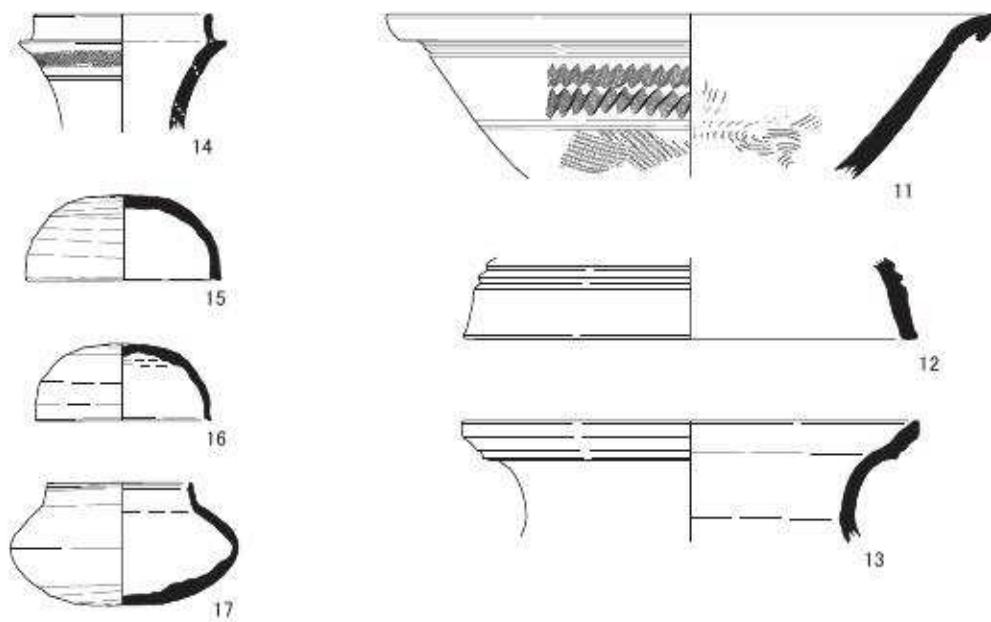
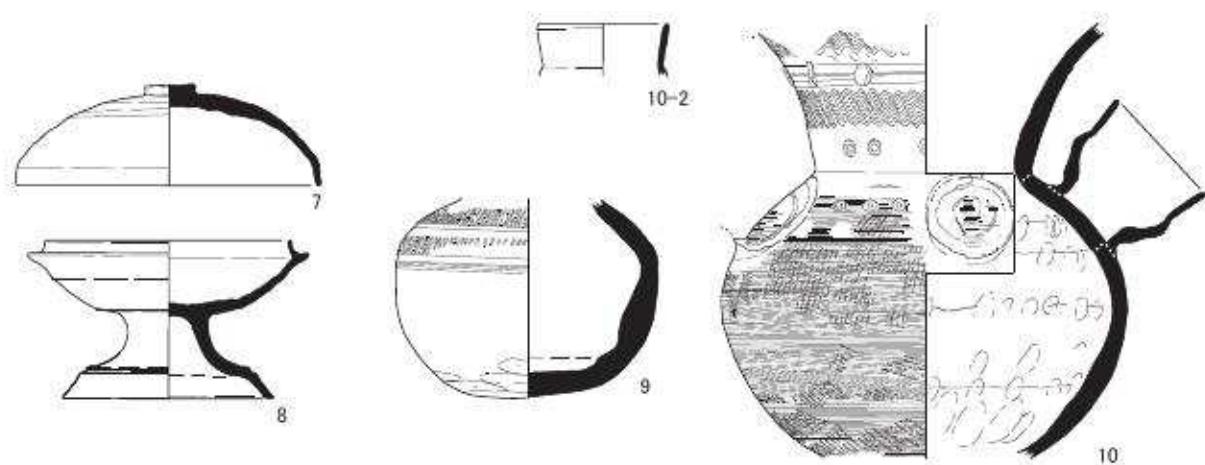
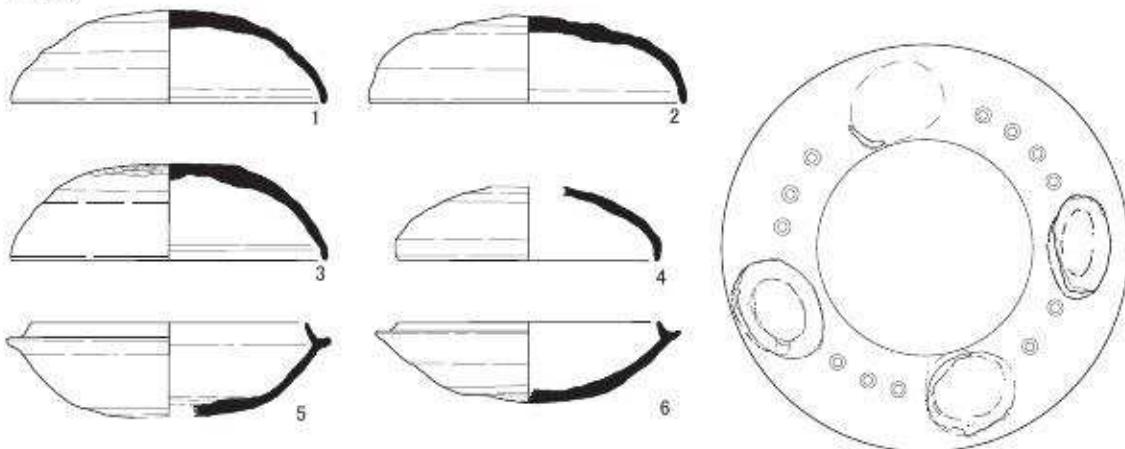
木棺墓 1 断面







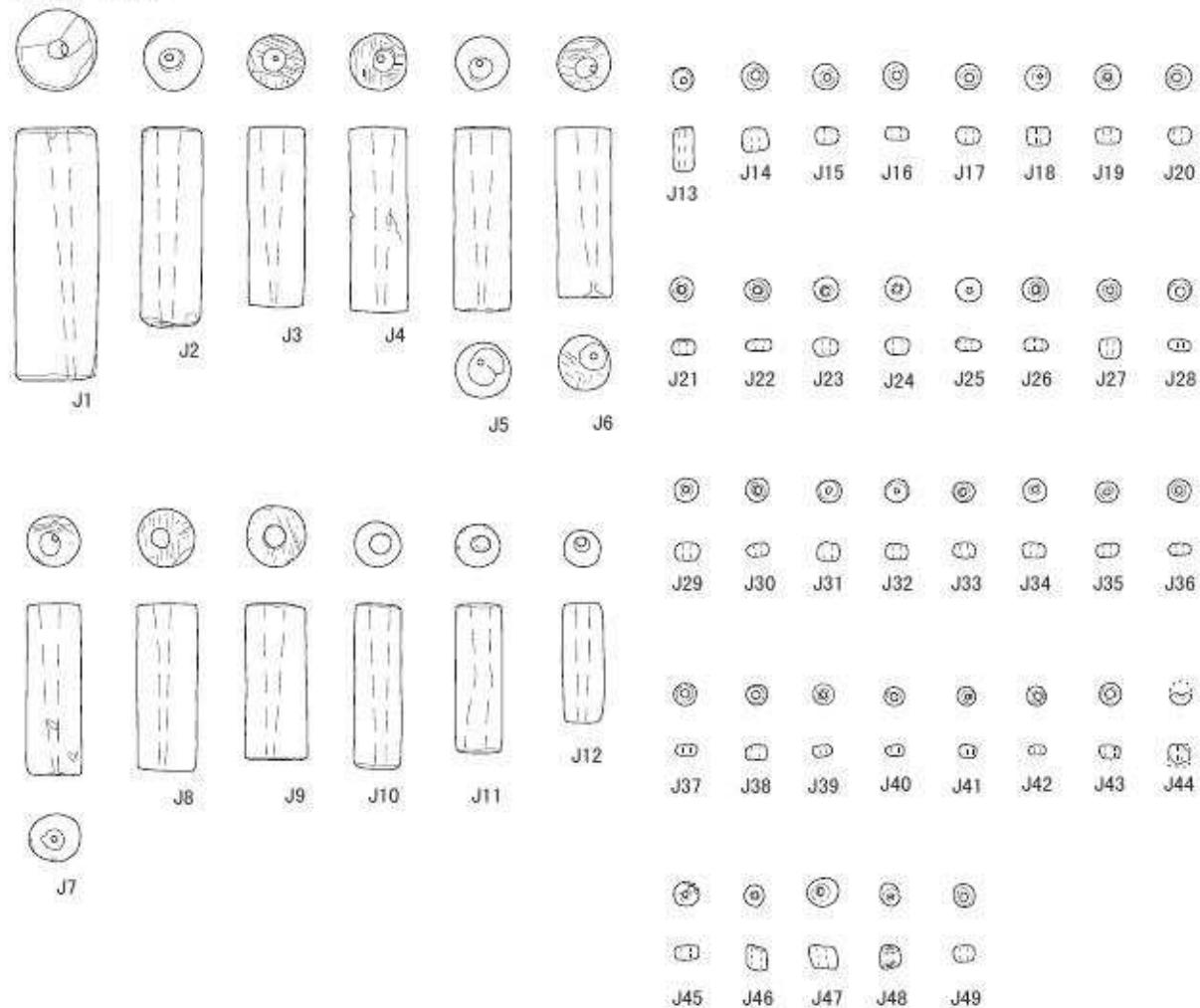
1号墳



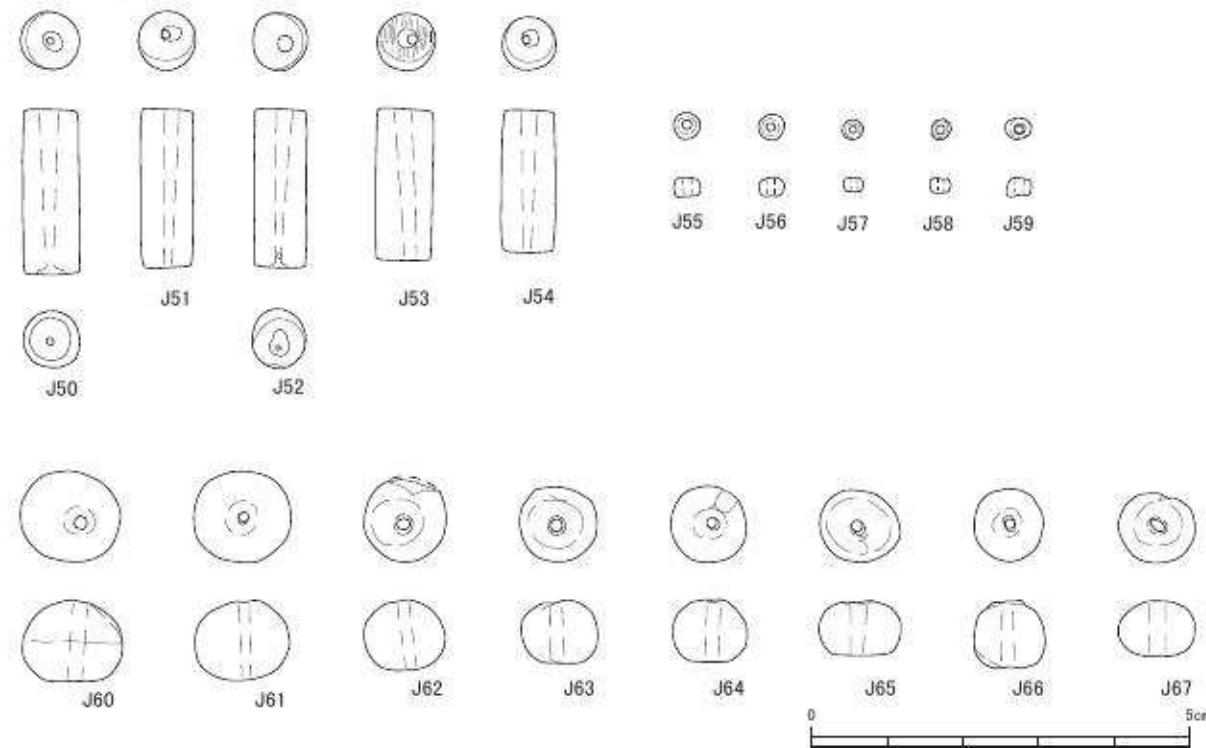
5号墳



1号墳 石室2



1号墳 石室3



写 真 図 版



広瀬古墳群全景(真上から)



調査前状況遠景
(北西から)



調査前状況遠景
(西から)



調査前状況遠景
(南から)





調査前状況
確認調査Tr 4 (西から)



調査前状況
確認調査Tr 5 (東から)



石室1 調査前状況
(北から)



表土掘削後全景
(南から)



石室石材散乱状況
(南から)



石室掘り下げ前全景
(南から)



全景(南から)



石室1全景(南西から)



石室2・3全景(南から)



東側周溝検出状況
(西から)



西側周溝検出状況
(東から)



西側周溝土層断面
(南から)





石室1検出状況
(西から)



石室1検出状況
(南から)



石室1石室内埋土
東西土層断面
(南西から)



石室 1 南西半部
長軸方向土層断面
(南から)



石室 1 南西半部
長軸方向土層断面
2回目掘削後
(南東から)



石室 1 北東半部
長軸方向土層断面
(南から)



石室1石材崩落状況
(南西から)



石室1西側壁石材
崩落状況(東から)



石室1西側壁石材
崩落状況(南西から)



石室1 完掘状況
(南西から)



石室1 完掘状況
(南西から)



石室1 奥壁～東側壁
(西から)



石室 1 東側壁
(北西から)



石室 1 西側壁
(南東から)



石室 1 奥壁
(南西から)



石室1須恵器出土状況
(南西から)



石室1須恵器出土状況
(西から)



石室1溝状遺構
装飾付須恵器出土状況
(西から)







石室2検出状況
(南東から)



石室2検出状況
(南西から)



石室2全景(南東から)



石室 2 磠床(北東から)



石室 2 南小口
(北東から)







石室2完掘状況
(南西から)



石室2基底石検出状況
(南西から)



石室3検出前状況
(南から)



石室3長軸土層断面
(南から)



石室3長軸土層断面
(南西から)



石室3 短軸土層断面
(北西から)



石室3 全景(北東から)



石室3 北小口石材・礫床
残存状況(南東から)



石室 3 全景(南東から)



石室 3 管玉出土状況
(南東から)



墳丘北半部土層断面
(南東から)



墳丘西半部土層断面
(南から)



墳丘東半部土層断面
(南から)



調査前状況 確認調査
Tr 7(西から)



墳丘土層断面(西から)

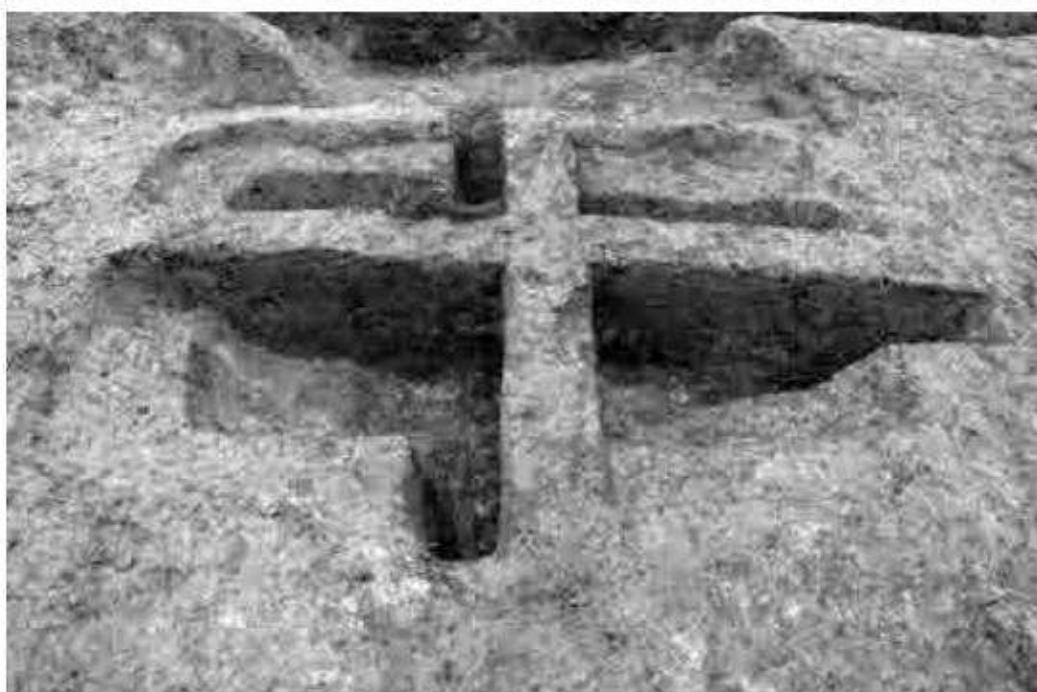


周溝土層断面(南から)





木棺墓1 土層断面
(北から)



木棺墓2 土層断面
(南から)



木棺墓1・2 完掘状況
(東から)



調査前状況 確認調査
Tr 7周辺(東から)



全景(東から)



木棺墓土層断面(南から)



木棺墓完掘状況
(北から)



SK01土層断面
(北から)



SK01完掘状況
(北から)



石棺調査前状況
確認調査Tr15
(東から)



全景(南東から)



石棺検出状況
(南東から)





石棺完掘状況
(北西から)



石棺完掘状況
(北東から)



石棺掘り方埋土
土層断面(南東から)



表土掘削状況(北から)



1号墳石室1 石材検出状況(北東から)



1号墳石室2 清掃状況(南から)



1号墳石室1 実測状況(北から)



1号墳作業状況(南から)



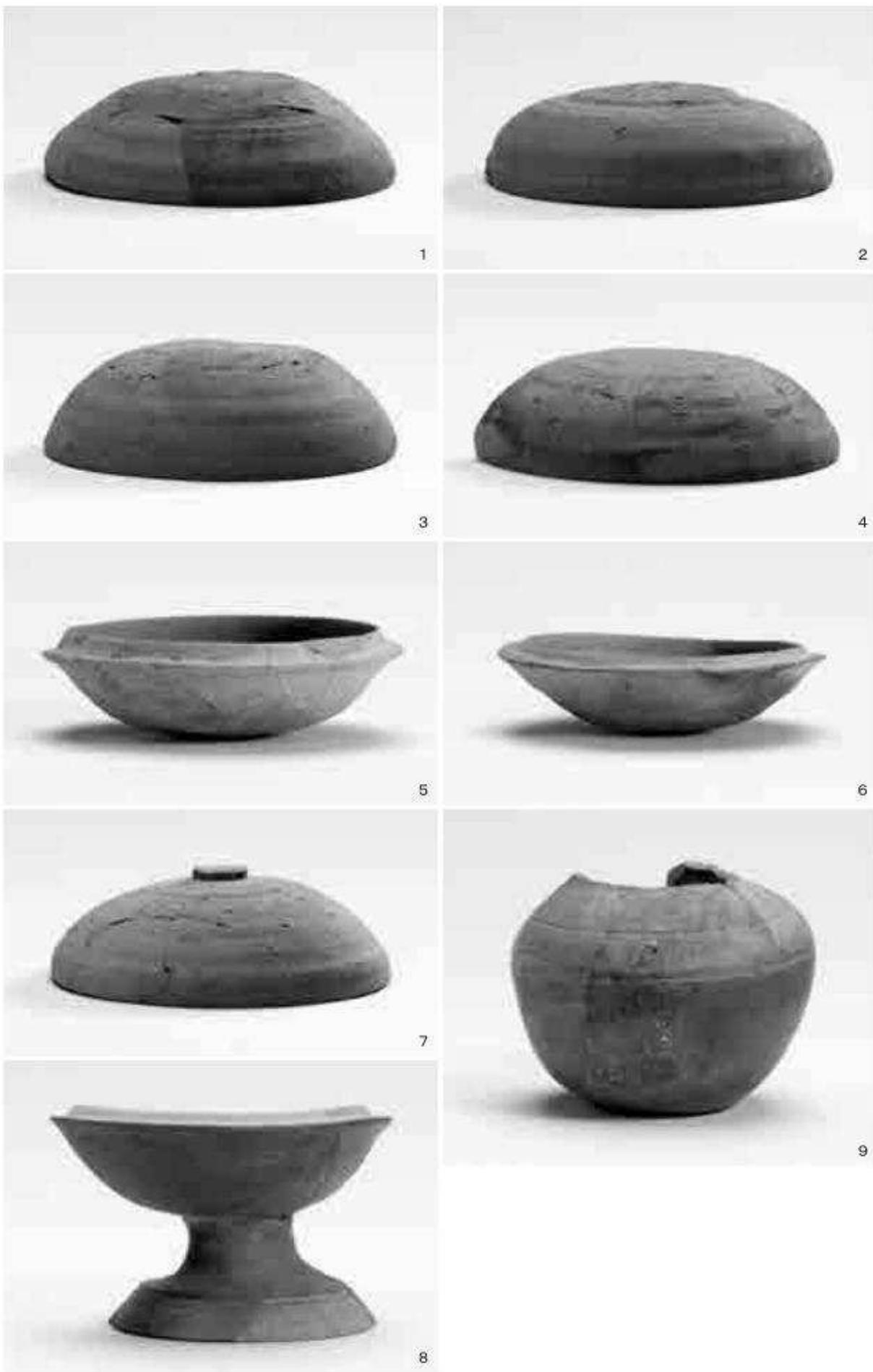
学識経験者現地指導状況

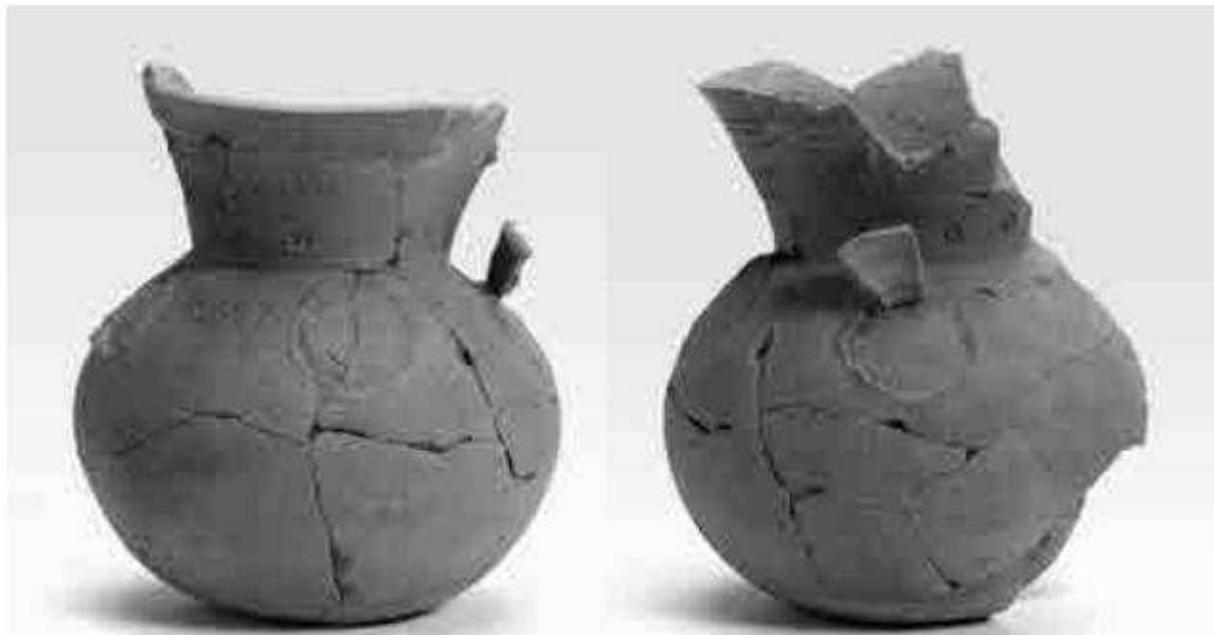


地元小学生見学状況



調査成果説明会実施状況





10

(右側面)

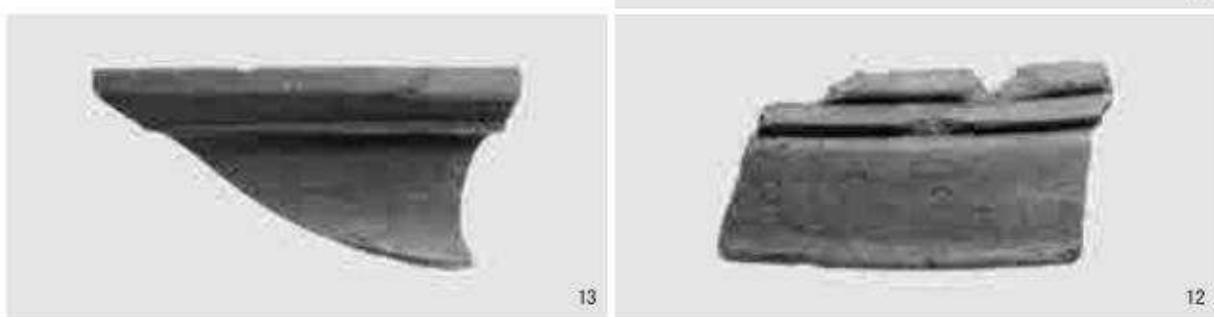


(左側面)

10-2

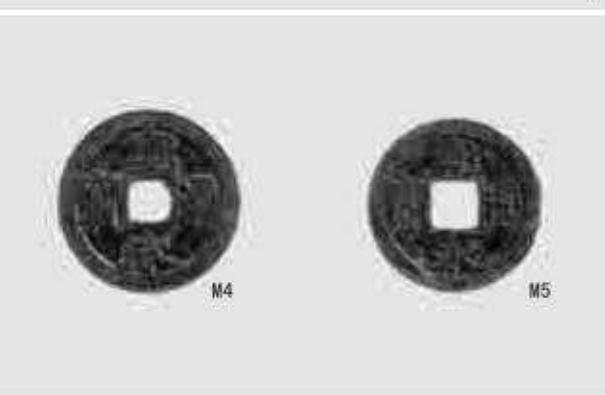
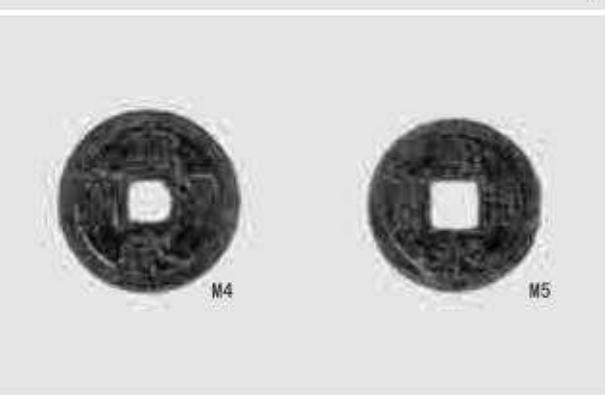
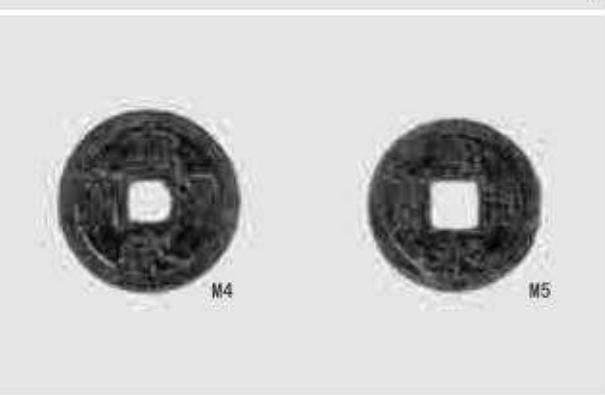
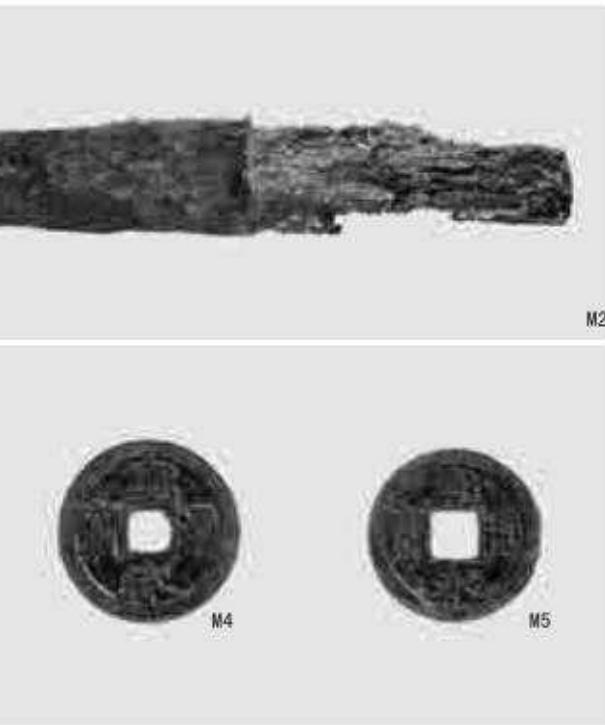
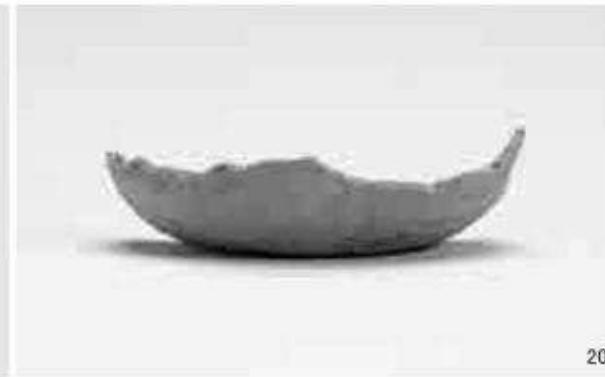
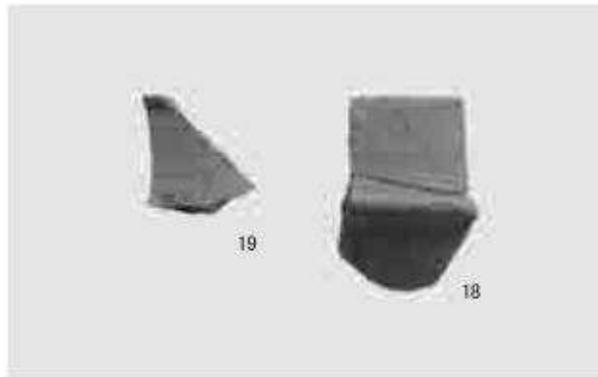


11



13

12



報 告 書 抄 錄

兵庫県文化財調査報告 第502冊

養父市

広瀬古墳群

—一般国道483号北近畿豊岡自動車道八鹿豊岡南道路に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成31(2019)年3月8日発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：株式会社クレアチオ
〒672-8071 兵庫県姫路市飾磨区構4丁目140番地 baseAビル
